



東方三界黃龍伝

『天界編』

小龍

目次

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
珍客は迷惑で有難い	呉謙の視線	ゾンビ来襲	五行のイロハ	八景宮の宴	太上老君	玄都到着	気懸りは夢に出る	赤帝君	九玄の周囲	探しものはなんですか	愛しの元帥閣下	沙龍的売買論
137	128	118	103	94	87	77	63	56	43	30	18	5
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
とんでも企画	四神会議	秦帝の本音	迷った時は直感	西王母の提案	前夜祭の正しい過ごし方	西華上空、白帝君 VS 飛龍	ミッシング・ピース	西域へ	竜吉公主	懺悔	金鑾斗闕への道	沙龍と木佐のそれぞれ
297	285	273	267	257	239	227	218	205	190	173	162	149

27	下馬評	311	32	予想屋、九玄	366
28	破茶目茶な人達	319	33	思えば、遠くへ来たもんだ	374
29	カキ氷はメロン味に限る	329	34	私が勝ち取ったもの	386
30	武闘大会、開始	341	35	エピソード(終)	393
31	沙龍、大興奮の巻	353			

主な登場人物

沙龍(甲斐馨) ……主人公。色々あった末に水雲宮の住人になっている。

木佐小次郎(真武君) ……沙龍の親友。四方将神としての道を選択したが……。

九雷 ……天界軍元帥。沙龍の恋人。

陽輝 ……天界西方軍大将。九雷の親友。

九天玄女 ……崑崙防衛軍隊長。沙龍の良き協力者。

白帝君 ……四方将神の一人。普段は西域に住む奔放な若者。

赤帝君 ……四方将神の一人。良識ある美丈夫。

# 1 沙龍的売買論

二月前、紫色の空の下で麒麟きりんを倒したときの記憶はほとんどない。

私は三日間昏倒したように眠っていたし、気付いたら水雲宮すいろうんききゆうの最上階だった。

マツキーもユエもとつくにいなかった。それぞれの帰るべき場所に戻ったらしい。

キサさんはお馴染みの能面顔で、

「よくお休みだったようで」

と、第一声。

いつの間にか元の身体に戻っていたので、あのダイナマイツ・バデイはどこにいったんだ、と聞いたら、

「さあ？ どこか別の場所に保管されたって話だけど。なんだ、未練でもあるのか？ いいじゃないか、その貧相なミニマムサイズの方が生活しやすいだろ」

などと言っていた。相変わらず、この親友は容赦ない。

私の姿を元に戻してくれたお偉い神様は泰山府君たいざんぷくくんというらしい。

天界でも超VIPの神様らしいが、今度会ったとき、法外な金額を吹っ掛けられたりするんじゃないだろうか。

それを恋人の方に言ったら、笑いながら「心配するな」と言っていた。

大凡この人には似つかわしくない花畑の中で、綺麗に綺麗に微笑んでいる姿を見たときには、さすがに絶句した。

私の目が覚めるのをそこで待っていたのだという。

その足元一面の黄色い花畑と、視界いっぱいの水色の空は、夢の中でも見た風景だった。後で聞いた話では、この花は金盞花きんせんかというらしい。

ごく普通の、庶民的な野生花だそうだけど、この花を植えたのは誰だろう、元帥本人だというのだから驚きだ。

意外な一面を知って、「へえ……」と思ったんだけど、やはり「イっちゃってる人」だというのは忘れないようにしよう、と思った。

「私、ビザ持ってないんだけど……」



そう言ったら、

「大丈夫だ。邪魔する奴は俺が全員消してやる」

なんて真顔で言ってたからだ。

本気だ。

これは一〇〇〇パーセント本気だ。

ナムアミダブツ。

そして、こんな大魔王みたいな神様に惚れてしまった私の天界ライフはここから始まる。

最初の一月は、特に何事もなく平穩に過ぎていった。

ドクターにさんざんからかわれ、戦勝祝いで陽輝<sup>ようき</sup>大将と呑んだくれたことは、取り立てて言うことでもない。

元帥は、先の一件の後始末に奔走しているようで忙しそうだったけど、それでも仕事が終われば水雲宮に来てくれた。



「ここはお前の家だから、お前の許可がなければ俺は来ない」

と律儀に仰るので、いまのところ、「時間が許す限り来て下さい」という私の要望通りに、日参してくれている。

彼には普段住んでいる官邸があるらしく、そこで仕事をすることもあるそう  
だ。

まあ、この際、どっちが本宅だろうと別宅だろうと、どっちでもいいわい。

水雲宮は、元々は玉皇大帝が離宮として使っていたのを、りよくれい緑麗が将神になつたときに下賜したそうで、安らぎ第一の造りになっているのは当然といえれば当然なのだそうだ。

更に、要塞としての機能も持っているこの宮殿は、部屋がいくつあるのか知らないほどにでかい。

玄関までの直通エレベーターは途中のフロアーをすっ飛ばすので、階段を使って探検してみたことがあるのだが、映写室から図書室、はたまたジムまであつたりして、もう、ここだけで充分人生楽しめるんじゃないだろうか。

私が実際に使っているのは最上階のエリアだけで、ここは最初に拉致されたと

きに連れてこられた部屋でもあるんだけど、これといって嫌な思いはしなかったし、むしろあれこれ思い出すと不気味にニヤけてしまう。

湖の畔に建つこの水雲宮は、実は、火雲宮のある帝都と、そう離れてはいない。最上階のテラスからは、帝都の南門が見えるくらいだ。

私はよく、小龍シヤオロンと一緒に水雲宮の周辺を散歩している。

いまのところ、まだ情勢が落ち着いていないから遠くまでは出歩くな、という情人の言いつけを守って、湖の周囲の数キロの散歩コースをぶらぶらしているだけなのだが、このポカポカ陽気の中、散歩のシメとして芝生の上で昼寝をするのはなんとも幸せで気持ちがいい。

大抵、先に小龍が寝こけるので、それにつられて私も眠ってしまうのだが、この小さな龍は猫みたいだな。暇さえあれば眠ってる。

小龍はまだ幼龍で、鱗が生えてない。

触るとナイロン毛布みたいで、このツルペタな肌触りが妙に気持ちよくて、ついつい撫で回してしまう。

それを、この子も嬉しがっているみたいで、余計にすりよってくる。

だから、こうして昼寝をするときはマシユマロに囲まれて、茶碗蒸しに頬ずりされるような、そんな幸せな夢ばかり見る。

ああ、もう、なにかも幸せで、どうしよう。

でも、なによりも幸せなのは、

「沙龍、なぜいつも外で寝る……」

こうして、最愛の人が探しにきてくれて、起こしてくれることだ。

「……?」

うすぼんやりと目を開けると、輝く陽光を背に、くつきりとした黒髪が見えた。

この際、だらしない寝顔を見られたとか、そういうことはどうでもよくて、いままで抱いていた小龍をポイっと横に投げ捨てて、今度は私がこの人の小龍になる。

「ここの空気が、眠気を誘うんだよ……」

微睡むような心地で、恋人の身体に這い上がって、また目を閉じた。

私はまだ半分眠っているのだ。

適度な温度と、適度な微風の中、湖の畔で、こんなベタベタな風景を晒しているなんて、数ヶ月前の私にしてみれば信じられないところだけど、そういえば、私はそれだけの代償を払ったんだっけ？ と、ふと思った。

人にいわせれば波乱万丈、私にいわせれば傲慢な二十年の人生の中で、失ったものは確かにある。

戦国時代だったわけでもないのに一家離散して、物騒な組織の中に放り込まれ、その連中を叩きのめしたはいいけど、もう私に普通の小学生をやって生きていく術はなくて、仕方なしに指パッチンで人の命を握りつぶせる立場にふんぞり返って。

でも、それだって、自分の力だけで成し得たわけじゃない。なにもかも、『黄龍』のおかげだ。

私にはいつだって、この切り札があったから、なにものにも怯えることなく、悠々としていられたのだ。

黄龍のせいで失ったものは大きいけど、黄龍のおかげで私はいままで生きてこられたわけである。

なら、今のこの幸せは？

私はこのグータラ主婦のような毎日を手に入れるために、苦勞してなにかしたのだろうか？

「そういえば、真武君しんぶくんがな——」

膝枕をしてくれている元帥が、思い出したように言った。  
天界住民の面々は、キサさんのことをそう呼ぶ。

「うん……？」

「引越ひりゆうしに人手が欲しいと言つて、敖開ごうかいを連れていったぞ」

「……飛龍ひりゆうを？ まあ、それはいいんだけど……」

飛龍は、あれ以来、すっかり水雲宮の居候になっている。

たまに保護者である九玄娘々の屋敷にも戻っているようだけど、実家に戻る気はこれっぽっちもないらしい。

飛龍の実家は……、えーと、どこだっけ？ お父さんが西海龍王なのだから、やはり西海ってことになるんだらうか。

しかし、キサさんは、いつの間にかそういうことになったんだらう。

引越し？

どこに？

いや、そもそも、なんでキサさん、まだ天界に居るの？

……という私の疑問を全て読んだらしい元帥が、教えてくれた。

「昔、真武君自身が使っていた家が残ってるんで、そこに住むことにしたらしい。しじんぷ四神府の官邸だ」

「四神府？」

「ああ、役所の一つだ」

「つ、つまり？ キサさんも、こっちに残ることにしたわけ……？」

「そうだろう」

「そ——、そんなアツサリ決めちゃっていいのか!? そりゃ、私はいいけど！ キサさんだって、多少は地上に未練ってもんが……」

完全に目が覚めたので、起き上がって元帥に詰め寄った。

「ないんだろ」

「……って、それは元帥の意見でしょうが」

「真武君はな、昔から、ああいう男なんだ」

「……フーン」

ちよつと面白くない顔をしていると、元帥が気を回す。

「嬉しくないのか？」

「そりゃ、嬉しくないわけじゃないけど……」

私がこの世界を選んだのは、最初は敵として出逢ったこの人に強烈に惚れてしまったせいで、それ以外の全てを捨てなければいけないことは覚悟の上だった。

自分の名前も、いままで住んでいた世界も、そこで築いたわずかな人脈や財産も。

といつても、そんなものは最初からどうでもよかつたのだ。

私にはそもそも本名らしき本名がないから、名前にこだわりはないし、空気と水さえあればどここの世界だって生きていける自信はあるし、お金を稼ぐ方法は幾つか知っている。

私の一番の財産と呼ぶべきはキサさんだけなのだ。

だから、一番辛いのは、私がこの恋を貫くことでキサさんとお別れしなければ

ならないことだった。

そう、"だった"——のに。

「キサさんとお別れしなくていいのは、これ以上ないってくらい嬉しいんだけど……」

なんだろう、この不安というか、これじゃいけない感。

通帳残高〇円なのに、高い買い物をしてしまったような、なのに、あっさり買えてしまったって、商品だけ先に届いたような、そんな感じである。

私は、恋人と親友のどちらにも失わずにぬくぬくと過ごしていいんだろうか？  
後でとんでもないしっぺ返しを食らうような、そんなことにならないだろうか？  
か？

実は百年ローン組まされてましたとか？

いや、それくらいならまだ可愛いかもしれない。

「ウーン……、まあ、その件については、今度、キサさんとじっくり真面目に話してみるワ」

キサさんがどういうつもりで、こちらの世界を選んだのか、私には分からない



い。

でも、もし私のためだというなら、それは間違ってる——気がする。

## 2 愛しの元帥閣下

火雲宮の本殿から大門へと続く大通りを歩きながら、改めて、でかい宮殿だと思った。よく、こんな所にたった数人で殴りこみに来れたもんだ。今更ながらに自分の無謀さがよく分かる。なんだか、酔っ払って車運転した次の日に、思い出して冷や汗たらしちやうような感じだ。

「九雷元帥、とくつても素朴な疑問がある」

隣を歩く天界軍総司令官、元帥閣下を見上げて聞いてみる。

この標高差で会話するのはきついのだが、だいぶ慣れてきた。

首の傾きが、我ながらこの角度に固定されつつある。

「……。なんだ？」

この独特な間も、気にならなくなった。

なんでこの人が返事をする前に一呼吸間を置くのか、その理由が分かったからだ。よくよく観察していると、彼がこんな風に変な「間」を置くのは私だけなの

だ。

陽輝大將や悠花<sup>ゆうか</sup>相手にはサクサク会話しているし、決裁伺いに水雲宮にやってくる部下相手にはバツバサに即決しているシーンも何度か見た。

だから、きつと、これは彼なりの愛情表現なのだ。

「こうやってスレ違う人達は、私のことを地上の人間だと分からないもんなの？」

半壊した火雲宮の復旧作業に従事する宮大工達や、それを指揮してる棟梁、また、行き交う官吏らしき人々で、この大通りはかなり賑やかだ。

なのに、彼らは別に私を見咎めることはない。

たまに遠巻きに視線を感じるが、それは、この隣のVIPに向けられているだけであって、この建物を半壊した張本人である私には目もくれない。

「分かる者もいるし、分からない者もいる。だが、そうと分かる者は、同時に以前の素性も分かる者さ」

「なるほど……」

「気になるのか？」

「まあ、天帝殺しの重罪人がこうして堂々と表を歩けるんだから、不思議ではあるかな」

「それが陛下の意思だったということをも、上層部の連中は皆知ってるからな」

「指名手配にならずに済んでるのは、元帥の根回しのおかげなの？」

「おかしな奴だな……。天界を救ったという自覚はないのか？」

「いや、救おうとして救ったわけでもないし……。どころか、余計な厄介事を増やしたという自覚ならある」

そう言うと、元帥は今朝から抱えていた疑問がやっと解けた、という顔をしました。

「なるほど、だから、後始末を買って出たのか」

「まあ、そういうことになる……。のかな」

ふと、そのとき、上空の青空をなにかが横切ったので、なんとはなしにそれを眺めた。よくある風景だ。数ヶ月前、私が暮らしていたところでは、空を飛ぶものは鳥か、飛行機か、Gくらいのもものだった。

しかし、ここでは飛行機の代わりに霊獣がよく空を飛んでいる。

大抵は、お偉いさんの騎乗している霊獣だが、単体で飛んでいるときもある。いま、私達の上空を横切ったのは、綺麗なエメラルドグリーンをした単体の鸞らんだった。

九玄娘々の青鸞せいらんも美しいが、あの鸞も一度見たら忘れられないような色合いをしている。

「黄龍のせいだと言われれば、ケリは付けないと」

思い出したように会話を続けると、元帥が苦笑する。

「しかし、それがここに残った理由だというなら、俺は立場がないな」

「……ち、違いますよ」

そんな意地悪そうに微笑まれても、困るというか、赤面するだけというか。

この人は未だに掴み所がなくて、困ってしまう。

これでも歳のわりには色々経験してきたつもりなのに、この魔性の微笑みの前では、私はいつもなす術がなくて、ドギマギしてしまう。

「よ、ご兩人」

と、建物の陰から姿を現したのは、ヤンキーオヤジだった。オレンジ色に染め

た髪と、くわえタバコの、見た目は中年に片足、いや両足突っ込んだ軍大将。

「陽輝大将——」

この世界における、私の貴重な知人の一人だ。

「へえ、こりやまた、随分化けたな」

陽輝大将が言うのは、私の「正装」だろう。

小さい頃、絵本で見た、天女様の格好そのものだ。

今朝、悠花に着付けてもらったときは、衣装の重さと締め付けに死ぬかと思っ  
たが、天帝陛下にお目見えするにはこの姿じゃないと駄目と言われ、百年分の我  
慢をしておの晴れ姿だ。

「ふふん。似合うだろうか？」

と開き直ってみる。

「……つーか、童殿上わらわてんじょう（注1）って感じがしねえでもねえが」

などと言うので、迷わず、

スパーン！

と、ハリセンを取り出して、一軍の大将を叩いた。

どうせ、童顔だよ。見た目年齢十五歳だよ。

いままであまり気にならなかったのに、最近は妙にそれが気になって、しようがない。

「心配するな、沙龍。陽輝の審美眼の悪さには昔から定評がある」

と、元帥がフオーローなのか追い討ちなのか分からんボケをかます傍ら、陽輝大將は後頭部をさする。

「……元気そうだな、沙龍。もうすっかりいいのか？」

「うん。相変わらず稼働時間は短いけどね」

そうなのだ。ここ天界じゃ、私の生身の人間の身体はかなり燃費が悪い。

蝕まれてボロボロだった身体は全快したものの、こればかりはしようがない。

酸素が薄いわけでもないんだけど、やっぱこれって人種の違いなんだろうか。

「で？ こんな所までめかしこんでデートしに来たわけじゃねえんだろ？」

「うん、ちよっとお仕事をね。引き受けてきた」

ぎょくしゅう

玉皇 大帝が崩御して（というか、殺したのは私なんだけど）、急遽東宮が帝

位に就き、天界もだいぶ落ち着いて来た頃、私は火雲宮に呼び出された。

身柄拘束とか事情聴取とか、ましてや裁判の出頭命令などではない。

どころか、私は秦帝に感謝と労いの言葉まで承ったのだ。

人界から来た一行が玉帝と麒麟を倒したという事実は、既に天界の住人達には普あまねく知れ渡っていた。

更に、その主犯ともいふべき輩が、かつて天界を追放された将神緑麗本人であることと、玉帝と麒麟の打倒は、玉帝自らの意思であるという事実が、秦帝の即位と共に公布されていたのだ。

おかげで私は重罪人にもならず、この天界で（おそらくは特例として）、人身ながら住まうことを許されたわけだ。

元より、誰の許可があるうとなかろうと、私は元帥のそばを離れるつもりはなかったけど、この世界の支配者である天帝陛下のお墨付きがあるなら、それに越したことはない。

そうして、晴れてラブラブ天界ライフを楽しもうとしていた矢先、私は二回目の火雲宮呼び出しを食らった。それが、今日である。

「仕事？」



陽輝大将が怪訝な顔をする。

私だって、今日、秦帝から聞いた話は初耳だったのだから、彼が知らないとしてもしょうがない。

「うん。麒麟が消滅したことで、五行のバランスが一時的に狂ってるらしい」

「フーン？ でも、そこら辺は四方将神が揃ったんだから、大丈夫なんじゃないのか？」

「うん、早急にどうこうってことはないみたいだけど」

「余力のあるうちに、不安要素は潰しておきたいってことか」

ここ、天界では、麒麟と黄龍は、異世界の存在、といわれている。

いわれている、というより、事実そうだった、というのは元帥や緑麗、そして玉帝が体験したことだ。

そして、玉帝は、麒麟と黄龍がなぜこの東方天界に現れたのか、ということ調べていたらしい。

「なぜ、どこから——」

それが分かれば、今後、不慮の事故も防げるはずだ、という玉帝の遺志を引き

継いだ秦帝は、玉帝の死と共に中断されてしまったその調査及び研究を再開するつもりなのだ。

だから、今日、私が呼ばれたのである。

「黄龍の保持者でなければ分からない『五行の歪ひずみ』ってのがあるんだとき」と、人事のように言ってみる。

一応、引き受けはしたものの、私は五行のスペシャリストじゃないし、「できる範囲のことはやります」と消極的な返答をしてきただけなので、こんな言い方になってしまうのだ。

「まあ、いいけどよ。お前がやるつつうんなら」

「ついでに、元の職に戻ってくれて言われたんだけどさ……」

と、最後まで言い終わらないうちに、陽輝大将が素早く反応した。

「ヒョー、将神に復帰させる気か!？」

陽輝大将が口笛吹きそうな勢いなのも無理はない。

『将神』は、四神府の長官として、四方将神を公的に統べる地位だし、実質的には天界のナンバー2か、ナンバー3くらいの、とんでもない地位だ。

しかし、そんな陽輝大将を、九雷元帥が嗜めるように言った。

「沙龍は断ったんだぞ。宰相も上大夫達も勢揃いしている前でな」

「ああ？ 断ったあ!？」

「……うん」

「なんでまた——」

「いや、まあ、それはさ、ホラ……」

と、言葉を濁す。

「なんだよ？」

「お飾りの肩書きだけ貰ってもさ……」

というのは、半分建前で、半分本音ではあるんだけど、本当の本音は別にある。

「フーン……?」

大通りでの立ち話なので、遠巻きの視線が更に増えた気がする。

ここでこの話を続けるのはなんとなく嫌だったし、元帥も陽輝大将も仕事があるだろうと思い、引き上げることにした。

「元帥、私は水雲宮に戻るから」

そう言うと、恋人歴二ヶ月の元帥閣下が無言のまま、黒焰虎こくえんこを呼んだ。

(うゝゝゝん)

と、心中唸ってしまふ。

黒焰虎に乗って帰れ、という意味なんだろうけど、こういうのってちよつと過保護すぎないか？

「一人で帰れるよ」

と言つても、またしても無言で有無を言わず、猫の仔摘まむようにして、黒焰虎の背中に乗せられた。

この身長差で、この扱いって、なんだか、ひよつとして、ひよつとすると、私って、端から見たら完全に「被保護者」なのか？

「……ぶ」

その一幕を見ていた陽輝大将が笑った。

なんだよ、なにがおかしいんだよ。

(注1) 童殿上……「平安時代以降、宮中の作法の見習いのため、公卿の子弟が、元服以前に昇殿を許されて奉仕すること」……だそうだけど、多分これは日本のみの風習……。でもって、ここはイチオ、(擬似) 中国……。

3 探しものはなんですか

『以上の調査結果から、麒麟と黄龍が、異なる次元の世界より到来した存在であることはほぼ間違いないであろうと思われる。異世界と呼ばれる存在の立証は未だされていないが、当面の問題である、麒麟と黄龍の実態解明に焦点を絞って本調書を完成させることを第一優先とする』

—— 『こう昊ちゃんレポート』より抜粋。

眼下に広がるは、針葉樹の鬱蒼とした森。

「うひゃー、広い森だなー」

ここはツンデレか？ いや、違った、ツンドラか？

まあ、帝都のボヘーっとした常春の気温よりは、こういう冷たい空気の方が好きだけど、こーも辛気臭いとなんか気分が滅入る。

「ここが通称『黒の森』です。昔は魑魅魍魎が跋扈する森だったのですが、幾度

となく天界軍の遠征がされて、いまでは植物以外の生物がほとんど住まない死の森となっておりませう」

律儀に答えるのは、九雷元帥の霊獣、黒焰虎である。

「……ふーん。とすると、私も過去に来たことがあるのかな？」

確か、緑麗は将神になる前は、天界軍に居たはずだ。

「いえ、ないと思います。遠征が始まったのは、緑麗様が転生された後ですの  
で」

「そっか」

「ウキユー……」

小龍が、私の肩の上で『腹が減った』と鳴いた。

「まあ、待て。着いたばかりで、いきなりここで弁当を広げると黒焰に怒られる」

「……怒りはしませんが」

でも確実に説教はされそうだ。

ここ数日で、この一人と二匹のパーティーの役割も出来つつある。

しぶしぶ仕事に駆り出されて、楽をすることしか考えていない私。お役立ち度満載だけど、礼儀正しすぎて、融通のきかない黒焰虎。そして、役立たずの小龍——である。

「うゝむ。それにしても、どこから手をつければよいものやら」と、滞空する黒焰虎の広い背中の上で、地図を開いた。

昨夜、チエックした怪しいポイントは二十以上もある。それを見ただけでも閉じたくなった。

「なんかやる気無くすなあ……。ここの空気もなんか、澱んでるしー」

「陰氣が溜まるエリアですから、緑麗様がそれを感じ取られるのは当然かと思われまます」

「だとしたら、ただでさえ無いやる気が、ここの空気のせいで十割減だな」

「十割って……」

「大体さー、なんで私がこんなメンドイ調査任務をしなきゃいけないんだっけ？ほとんどボランテニアよ、ボランテニア。住民税がわりってか？」

「はあ……」



小龍も、まだなにやらブツブツ言ってるので、とりあえず地図を閉じた。

「いいこと考えたぞ、黒焰」

「なんでしよう？」

「もう、全部行ったことにして帰る！」

「緑麗様……」

黒焰虎が呆れたように振り向いた。

「冗談だつてば……」

「緑麗様が度々仰るその冗談というのが、私にはよく理解できないのですが」

「そりやまあ、きみのご主人も得意な方じゃないからショーガナイねえ。こればかりは。慣れてもらうしか」

「……努力致します」

先帝の玉皇大帝が調べ上げたという、麒麟と黄龍に関する調書——別名『昊ちゃんレポート』（沙龍命名）——。

私が今上帝の秦ちゃん陛下に、直々に依頼——命令ではない——された仕事は、第一義的にはこのレポートを完成させることである。

気軽に（でもないんだけど）引き受けたこの仕事が、実はとんでもなく面倒で、時間も労力もかかりそうだということに気付いたときは遅かった。

水雲宮に『昊ちゃんレポート』が届いたのが一週間前。

荷台で運ばれてきたその書類の量を見て、絶句することしばし。

そして、否応無く書齋に引きこもること、一週間。

その間、書齋の隅で文字通り書類に埋まり、ほとんど遭難した状態で、九雷元帥に発見されることもしばしばあったりなんかした。

数日前――。

「うきや——ッ！」

私のそんな悲鳴に駆けつけてくれる元帥閣下も慣れたものである。初回は、血相変えて助けに来てくれたのに。

「また埋まったのか。沙龍……？ どこだ？」

「……………ここです」

私が書類の下から手だけ上げると、その手を掴んで引っ張り上げてくれた。

「大丈夫か？」

「ふう……、謝々。大丈夫」

引っ張り上げられる間も、手にしている紙片は死守した。これに気を取られて、本日二回目の雪崩に遭ったのだ。

「少し休め、根を詰め過ぎだぞ」

元帥は、私をデスクの上に座らせるように降ろしてくれたが、そのまま離れていこうとしない。

「……？」

視線が間近で絡んで、髪を撫でられた。

思案没頭モードに入ってる私を、ラブラブ・モードに持って行こうという魂胆か。

いや、それだって、全くもって吝かじゃないんだけど。

いまは、ちよつと、まとまりかけたこの頭を整理したい。

「元帥殿、ちよつと知恵をお借りしたい」

「……なんだ？」

「ありきたりだが、五つの視点で考えてみた。つまり、いつ (when)、誰が (who)、どのように (how)、どこから (where)、なんの目的で (what or why) ——。『いつ』は三千年とちよい前。『誰が』は麒麟と黄龍。『どこから』は、推測では『異なる次元の世界』から。『どのように』は、推測では空間の亀裂のような『五行の歪』<sup>ひずみ</sup>を通して。だけど、サツパリ分らないのが『なんの目的で』なの。……ここまではいい？」

聞いているの？ という意味も込めて言った。

私が喋る間も、この人の手つきは限りなく怪しい。……というか、妖しい。

「ああ、それで？」

天界側の最終的な目的は、再びあの悲劇を繰り返さないために、『異なる次元の世界』とのコンタクトを完全に断つことだ。

玉帝は、黄龍と麒麟が天界に出現した直後、天界に点在していた『五行の歪』を強力な結界で塞いだらしいが、だからといって、それで安全かというところでもない。

この調書によれば、この三千年の間に、幾つも新しい『歪』が生じている。

玉帝はその度にそれらを塞いでいったのだろうが、なぜそんな空間の亀裂が生じるのか、といえば、五行の『氣』の流れに関係しているらしい。

「私は玉帝と同じことはしない。それじゃ、同じ結果になると思うから。だから、私の主眼は、麒麟や黄龍がなんの目的で現れたのか、に絞ろうと思って」「そうだな。基本的には俺も同じところから始めるだろう」

元帥はやっと手を止めて、正面から私を見据えた。

「『基本的には』ってことは、元帥のオプシオンは別にあるんだね？」

そうそう、それが聞きたいわけなのよ。

「なんの目的で、か……。もしくは、目的など『彼ら』には最初から無いのかも  
しれない」

「え……？」

「麒麟も黄龍も知能はあっても、自我（注1）はない。地球上の生物とは、全く別の存在だ」

「思考はできても、心が無い……ってこと？」

「そうだ。与えられた環境や命令に対しての演算能力はあっても、自ら想起してある結論に至ることはない。AIみたいなものだな」

「つまり、擬似生命体……？」

「そういう可能性もある、ということだ。だとすれば、麒麟や黄龍自身は、明確な目的や意思を持っていないことになる。しかし、『目的』はなくとも『原因』は必ずある。例えば、なんらかの『事故』かもしれない」

「うん、そうだね……」

「しかし、『彼ら』に命令を与えた者が居る、または居た、とすれば、話は違ってくる」

「うん……？」

ああ、誰かが、破壊力満載のパワーを持った擬似生命体を、この東方天界に送り込んだかもしれないってことね。

それは、確かに考えられる。

いまでこそ、黄龍は三千年の地上生活を経て、ある程度の使役が可能になったけど、当初はただの破壊神だったわけだし。

その『誰か』が、この世界を滅ぼそうとして送り込んだというのなら、筋は通る。

「ウーン……」

と、唸りかけたところで、手にしていた書類のことを思い出した。

「あ、これ、これ」

玉帝が記した、『五行の歪』の候補地リストだ。

元帥はそれを見て、納得したように言った。

「ああ、黒の森か……」

「場所が分かってるならてつとり早い。明日、そこに行ってみるよ」

数千年前に突如として天界に現れた神獣、黄龍――。

四方に四神を従え、天の中央に座す姿は、当時の天界の住人達にとっては、聖なる守護神のように映ったという。

しかし、その数百年後に現れた麒麟により、両者の対立が始まる。

麒麟と黄龍は相反する存在。

その性質が同じであるために、互いを殺し合う。

そして、勝った方が天を制する『仕組み』。

しかし、それは、先帝と緑麗の介入により、おそらくは本来の形を違えた結果となる。

麒麟と黄龍の闘いに勝負はつかなかったが、結果として、暫しの間、麒麟が天を制して、この三千年間は安泰していた。

だが、それは先帝が麒麟の力を極限まで抑えていたからに過ぎないのだろう。

あのととき、闘ってみて分かった。神獣は例え一匹でも、天界全てを破壊できる凄まじいエネルギーがある。

もし、先帝と緑麗の介入がなく、あのととき、どちらか一方が勝ったとしたら、天界はどうなっていたのだろう、と考える。

いや、おそらく、勝負はつかず、ぶつかり合うパワーで天界は消し去られていただろう。

だからこそ、先帝はあの闘いを止めようとしたのだ。



単品では無害な神獣が、二者が揃うと争いになる。

玉帝と緑麗が、それぞれを身体の中に取り込んだ（というか、感覚としては『封印』だ）からこそ保たれた均衡。

だけど、それにも限界があつて、いつしか宿主の身体を喰い殺し、再び闘おうとする二者を止めるために、二人が企てた一計。

その一計に乗せられ、いま、私はここに居るわけだけど——。  
「ふわああああああ〜」

地図を投げ出して、大あくび。

「ヤメヤメ。やっぱ、弁当にしよう、小龍」

「キュウ！」

「緑麗様……。やる気あるんですか、貴女は」

「ん〜、まあ、あるっちゃ〜、あるんだが、こう広いとねえ〜」

「納期が無いとはいえ、陛下にご報告しなければならぬのですから、あまり悠長にされても……」

「まあまあ、人生長いんだから、そう焦ることもないし……」

言って、自分の言葉に苦笑した。最近では、全く反対のことばかり考えているというのに。

天界の住民達の人生は確かに長いだろう。殺されない限り、ほとんど不死だ。でも、私は違う。

私は天界に住むことにしただけで、生身の人間であることに変わりはない。平均寿命生きたとして、せいぜいあと五、六十年くらいしか、あの人のそばに居ることはできないのだ。

(注1) 九雷は自我という言葉を「mind (精神)」として使っている。

崑崙の防衛庁を訪れた木佐小次郎は、すんなりと九天玄女の執務室に通されて、大した待ち時間もなく目的の書類を受け取ることができた。

このまま辞去するのでは少しあからさまだろうと思ったので、出されたコーヒーの一杯くらいは飲んで行こう、と思った。

「この書類を手配してくれた西王母殿せいおうぼには、近々直接お礼に伺うつもりです」  
木佐は、元々、他人に対してそつなく応対できる方なのである。

商売相手に対するような口の利き方で、問題の書類を取り寄せてくれた九天玄女にも礼を言った。

「しかし……、いいのか？ 真武君」

九玄は、木佐の決断のことを言っている。

「貴方が天界に戻るといふことは、どこの団体にとつても歓迎だろう。いままで四方将神が揃っていないなかったために起こっていた不具合も、是正する必要はなく

なるし、なにより、私自身も個人的に喜んでる」

さらっと付け足す九玄の想いは、当然、木佐にも分かっていた。

かつての真武君が、この麗人と深い関係にあったであろうことも、それ故に、今の自分に対して特別な想いを抱いているのだろうということも。

それは木佐にとっては不可解ではあるのだが、同じことは、沙龍に対する九雷を見ていても分かる。

(いくら魂魄が同じだとはいえ、育った環境が違えば、それはもう『別人』じゃないのか……?)

木佐は人間として、地上で生きてきたので、当然、そう思っている。

それが普通感覚というものだろう。

しかし、天界や仙界の住民達は、別の次元での捉え方をしているのだということとは、この世界に来てわりとすぐに知った。

「未練がないと言えば嘘になります……、最初から、予感がありましたから、覚悟はできてました」

「予感？」

「ええ。僕は多分、馨よりも早い段階で、馨は彼を選んだらうなって分かりましたから」

「しかし、沙龍はいいとしても、貴方は……」

「違うだろう、と九天玄女は言っている。」

「一蓮托生なんですよ」

木佐は、言葉を省いて、そう答えた。

「……そうか」

九玄も、木佐のそんな短い物言いに、それ以上、この件についての追求はしなかった。

（まあ、彼の感覚では、知り合って間もない、しかも女の私に、多くは語れぬのも当然だろう……）

そう思っている。

普段の様子から、木佐が女性には全く無関心だということもすぐ分かった。

それに気付いたときはさすがに頭を抱えたが、九玄は、昔の続きをやるつもりは最初からない。

前世を忘れている恋人に、昔のままの関係を強要するのはおかしいと思っ  
てい  
るからだ。

本人の意思を完全に無視して、強引に拉致するような真似ができるのは、ど  
この自信過剰な男だけなのだ。

「ご機嫌伺いだけに西華せいかに（※仙界の首都とよぶべき場所の総称）に行くのも難儀  
だろう。もうすぐ蟠桃会があるから、西王母様への礼ならばそのときでもいいと  
思うが」

九玄は木佐の手元にある書類を視線で指して、そう言った。

「蟠桃会……。仙界主催の園遊会ですね。僕も招待されるんですか？」  
俄か勉強ながら、天仙界の歴史や現在の情勢まで調べ上げている木佐は、その  
園遊会がどういったものか知っている。

しかし、具体的にどういった面々にお呼びが掛かるのかまでは知らなかった。

「勿論だ。四方将神はVIPだからな。しかし、蟠桃会の前にそちらでも色々あ  
るだろう。秦帝の即位で、公的、私的な催しは目白押しだろうからな」

「そうですね。今日もその私的な会合の一つをお断りして来ました」

「四神府に戻られたんだったな。これで晴れて貴方も天界の公務員か」

「ちよつと前までは従業員二人だけの地味な興信所の経営者だったんですけどね……」

木佐も自分の轉身には、もう笑うしかない。

その従業員のせいで毎月赤字スレスレになって、金の工面に奔走していたことなど、嘘のようだ。

しかし、衣食住の心配がなくなったのはいいことだが、その代わりに三千年間溜まっていた仕事の木佐の身に突然降ってきたわけで、これが「普通の公務員」なら代替も利くが、四神府の仕事はそういったものではない。

北の任地と帝都を往復しながら、忙しい毎日を送っている木佐には、色んな感慨に耽る暇もないというのが本当のところだった。

「そろそろ戻ります。飛龍君が痺れを切らしているようなので」

木佐は、窓の外にへばりついている龍型の飛龍を手振りで見送って、席を立つた。

窓を開けて、そこから乗り込めば時間短縮になるのだろうが、木佐はそれをせ

ずにドアから帰るつもりのように。

自分の部屋ならまだしも、他人の仕事部屋でそれをするのは失礼だろう、と思っただからである。

しかし、九玄はそれを見て、そういう所も変わらないな、と思うのだ。

木佐がドア向こうへ消えた後、窓を開けて、九玄は飛龍を呼び止めた。

「水雲宮に入り浸っているようだな？　せつかく恩赦が下って天界に戻れるようになったというのに、相変わらず実家には戻っていないのか」

飛龍の表情は人型であっても、龍型であっても、あまり動くということがない。

しかし、少しムツとしたのは九玄には分かった。

「帰れと説教するわけではないが、ご母堂の方には一度くらい顔を見せに戻った方がいいぞ」

「……分かった」

渋々ながらも頷く飛龍に苦笑した直後、九玄の顔が引きつった。

「御機嫌よう、九玄殿。本日もまた、朝露に濡れたこの薔薇以上に、お美し



い」

そんな声と共に、ワサワサと巨大な花束が部屋の入り口で動いている。それを持っている人物は花束に埋もれて見えない。

「見えてないのに、なぜそれが言える」

「もー、クールなんだから。見えずとも、貴女の気高くも澄んだ空気が、私には充分分かるのです。……よいしょ、と」

天真はやっとその巨大な花束を部屋に引き入れると、その中から一輪の薔薇を抜いて、優美な動作で九玄に差し出した。

「どうぞ。うちの庭で朝一で咲いたものです」

「天真大夫……」  
てんまたいふ

「もー、この薔薇がですね、九玄殿の隣に飾ってくれて言うもんだから、午前のティータイムをすっ飛ばして来てしまいましたよ。お久しぶりです、我が麗しの九玄殿。ああ、やはり、美女には深紅の薔薇がよく似合いますね。今日のお姿も一介の医者をお殺するほどにお美しい」

「天真大夫……あのな……」

その天真の一人芝居に、九玄はなかなか口を挟めない。

最低でも五分くらい待たなければ、この陶醉しきった天真の挨拶は止まらないのだ。

そして、きっかり五分後、天真が一呼吸したのに狙いをすまして、九玄は片眉吊り上げたまま言った。

「天真大夫、昨日会ったばかりで“久しぶり”という用法は違うんじゃないのか。それに、昨日も今日も私は同じ隊服を着ているはずだが、昨日の褒め言葉と違うのはどういうわけだ。そして、昨日も言ったはずだが、そうたびたび職場に来られても、困るのだ」

冷たく言い放つ九玄に全く取り合わず、天真は別のことを言った。

「そういえば、さつき、真武君が来てましたね」

「ああ、それがなにか？」

「今の彼には、貴女の美しさは目に入ってませんよ」

そんなのは分かっている。だからどうした、と言わんばかりの九玄に、天真は容赦のない言葉を続けた。

「貴女が忘れる努力をしなければ、この三千年の恋は、決して終わらないでしょう。それとも、九雷のように、終わらせないつもりですか？」

「……」

「叶わぬ恋は人は蝕みますよ。それは、不治の病と同じでしょう。なのに、それを自らの意思で続けるというのは、私に言わせれば正気の沙汰じゃありませんね」

「では聞くが、天真大夫。人の想いが簡単に昇華できるのならば、この世に大夫は要らないのではないか？」

九玄は黙らせるつもりで言ったのだが、天真はそんなことでは引き下がらない。  
い。

「男としてではなく、心療医としての私が必要だと？」

「カウンセラーに掛からなければならぬほど、病んでいるつもりもないが……」

「そうですか？ さつき、随分、憂愁に閉ざされた目をなさってましたけど」  
これは、なんでも病にしたがる医者性の癖だな、と九玄は思う。

「もし、貴女が少しでもその憂いを晴らしたいと思っっているのなら、どうか、私にそのお手伝いをさせて下さい」

「天真大夫、たまに世間話に来る程度なら歓迎しよう。しかし、私には厄介な身分の男と一時の恋愛ゲームをするつもりはない。……と、昨日も言ったはずだが？」

九玄が言っている『厄介な身分』というのは、別に天真の元の身分を指しているわけではない。

崑崙の防衛隊長という肩書きを持っている以上、九玄にとっては、天界の市民は全て厄介な存在になるというだけの話だ。

しかも、男女の関係など、一番槍玉に上げられやすい。

「なるほど、つまり、私も今のところは『叶わぬ恋』の患者ということですね。しかし、幸運なことに私には時間も可能性もある。僅かな可能性がある限り、私はそのご尊顔を拝みに来ますよ」

そして、また、天真の一人芝居が始まった。

「そう、叶わぬ恋と分かっているながら、私は貴女を想わずにはいられないので

す。哀れな男と思し召して下さるのなら、どうか追り返して下さるな。貴女に逢えない日は一日千秋の思いで、仕事は手につかないわ、夜は夜で眠れないわ、で、こんなに典型的な病状も久しぶりなんですよ。この前のお茶の時間には砂糖の分量間違えちやつて、せつかくの『シルバーニードルズ』が台無しになつちやうし……、あ、そうそう、それでね、もう、聞いて下さいよ。この前なんか……」

(ダメだ、こりや……)

と、九玄は思った。

「あの人は一体なにしに来たんだ？」

木佐はさつき防衛庁の玄関ですれ違った天真のことを言った。

「九玄を口説きに来てるんだろ。最近よく見る」

飛龍が抑揚のない口調で答える。

「しかし、あの人は一般市民だろう？ 気軽に仙界まで来ていいもんなのか……」

…？」

木佐だって、今日は正規の手続きを踏んで、天仙界の境界を越えてきたのである。しかも、公務員特権というものを使った。

開業医である天真には、裏技を使う以外、ここへ来る術はないはずだ。

それがバレたら、天真の元の身分を考えても、全くのお咎めなしということにはならないだろう。

天仙界の関係は、多少の緊張を持ったまま、ずっと変わってはいないのだ。

ただ、いまは秦帝が即位したことで、各方面が色々と浮き足立ち、帝都の首脳陣はあまり仙界に注意を払っていないというだけかもしれない。

崑崙の山々が視界から遠ざかってしばらくすると、関門が見えてきた。

さすがに飛龍の脚は早い。

天界最速といわれているのは九雷の靈獣の黒焰虎だが、それに次ぐ早さではないだろうか、と木佐は思った。

「ところで玄武、俺はちよつと出かける用事ができた。しばらく帝都を留守にする」

「そうか。色々お手伝ってくれて随分助かったよ。ありがとう」

無表情の飛龍が更に無表情になって黙ったが、木佐には飛龍がお礼を言われ慣れていないだけ、というのが分かった。

火雲宮の敷地は、気が遠くなるほど広い。

帝都の約半分を占めるその火雲宮は、大きく三つのエリアに分けられる。

朱雀門をくぐった先の、右側に広がる行政エリアと、左側に広がる軍事エリア、そして、北に進むと見えてくる、一番象徴的な建物である本殿だ。この本殿以北が、皇族のプライベート・エリアになる。

木佐の勤める四神府は、位置としては軍事エリアの中にあるが、実際の仕事は木佐の感覚で言えば国土整理みたいだし、組織としては軍部からも行政からも独立している。

ただ、現在、四神府には長官といえる将神が居ないので、暫定的に天界軍預かりとなっているだけだった。

これは、おそらく、青龍である九雷がその事実を公にはしていないので、四神府に関われないのをなんとかするために施した処置なのだろう。



赤帝君が、その事情や背景を大体教えてくれた。

「先の事件で、麒麟打倒のためにあなた方を欺いたことは許されよ」

四神府の一室で再会したとき、赤帝君はまず初めにそう言った。

「それは、もう済んだことですから」

「そう言って貰えると有難い」

素直に安堵の笑みを漏らす赤帝君は、木佐の考えていた朱雀像とはだいぶ違う。

もっと、その属性である炎のような闘争心や情熱を持った男ではないかと思っていたのだが、実際の赤帝君は礼儀正しく、落ち着いたイメージが強い。

「よく戻ってくれた、真武君。同胞としては歓迎する」

その言い方に少し引っ掛かるものがあつたので、木佐は率直に聞いてみた。

「なにか問題でも？ 同胞としては、と限定するところを見ると、なにかありそうですね」

「ああ……、なくはないが、戻ってきたばかりの貴方に言うべきかどうか……」

「いえ、聞かせて下さい。いまの僕に足りないのは、そういうった情報全てですか」

ら

木佐がそう言うと、赤帝君は微笑んだ。

「その向上心は変わらないな」

「……」

昔の自分を知る赤帝君の物言いだ。

九玄と話しているときもたまにこの奇妙さを感じるのだが、自分の知らない自分を知っている人達との交流にはまだ慣れない。沙龍も同じような気分を味わっていることだろう。

「黄龍の周りに四神が集うのは、当然のこと。だが、麒麟が消滅したいま、緑麗様が唯一の神獣の保持者であることが、なんらかの波紋を呼ぶ可能性はある、ということだ」

「……なぜ？」

「あくまでも、天界を統治しているのは陛下だからな……」

「ああ、僕達が天帝でなく、馨に忠誠を誓っているように見える、ということか」

赤帝君が領いた。

「既に、九雷元帥はそれを憂慮して、せいしょう聖霄（※白帝君の字あざな）を西域の任地に常駐させた。あの男のやることに抜かりはないが、だからといって、私の杞憂が晴れるわけではない。四神が揃わなければいい、というような簡単な問題でもないからな」

「なるほど……」

「黄龍が為政者ではない緑麗様と共に在ることを選んでしまったのが問題なのだろう。黄龍にしてみれば、知ったことではないのだろうが」

神獣を単独で切り離すことができれば、全ては解決するのだろう。

だが、それは玉帝ですら、緑麗が生きたまま行うことはできなかつたのだ。

「僕も大概、悲観主義者と言われるが、貴方はそれ以上の上のようだ」

木佐は、赤帝君が大真面目にそんな話をするので、からかい半分にそう言った。

昼間から爆竹が鳴って、いまの帝都はどこを歩いてもお祭り騒ぎだというのに、赤帝君の頭には今後起こりうることへの心配事しかないようだ。

「僕は昔の緑麗さんは知りませんが、いまの馨は腹が立つほど樂觀主義者であることはよく知っています。その彼女に言わせれば『なんとかなるさ』といったところでしょう」

そう言うと、赤帝君も苦笑した。

彼も、自分の性質というものを自覚しているようだ。

「しかし、随分早く手に入れられたもんだな」

さきほど、木佐が持ってきた『転生証明書』は、赤帝君の手から秘書官に渡された。

これが秦帝の下に届けば、後は形だけの認証を経て、木佐には自動的に『黒帝玄武佑君』の称号が与えられることになる。

西王母の直筆サイン入り書類なので、その効力や真偽を疑う者は居ないだろう。

木佐は、申請書類一式を整えている赤帝君の秘書官に「よろしく」と声をかける。この秘書官もかなり目立つ美人だったので、なんとなく九玄を思い出した。

「そういえば、九玄さんに聞いたんですが、蟠桃会に出席しなきゃいけないんで

すよね？」

「ああ、そういう時期か。そのうち四神府宛に招待状が届くだろう」

「他にはどんなメンバーが呼ばれるんです？」

「仙界側では、西王母の一家が主催者として出席し、九玄殿もスタッフとして参加するだろう。あとは燃燈道人や、十二仙といった面々だな。天界側だと、陛下と太上老君、太上道君、そして泰山府君の四名が主賓になるのだが……。陛下以外の三人は、長年この会を『欠席』している」

「なにか政治的理由でも？」

「太上老君は、そうかもしれん。だが、あとの二人は……。違うだろうな。太上道君は行方不明、というか出奔中だし、泰山府君はあの通り変わり者で……」

と、言葉を濁す赤帝君の様子を見て、木佐もなんとなくそういうものなのだろう、と理解した。

会う人会う人、奇人変人が多いこの天界で、ごく普通に喋れるのは目の前のこの赤帝君くらいなのだ。

(なんだか……。愉快的園遊会になりそうだな……)

そんな嫌な予感がひしひしとする。

「あとは、四海龍王と、各府の長官も呼ばれる。軍関係者だと、元帥は当然として、四方軍の大將までには必ずお呼びがかかるはずだ。近衛府の隊長は職業柄、陛下についてまわるが、個別にも招待されるはずだ」

「つまり、主だった面子は全て集まるわけか」

「そうだな、それに今回は緑麗様も出席されることになるだろう」

「なんでまたあの無職プー太郎が？」

木佐は途端に素に戻った口調で、言った。

赤帝君は頑なにそう呼んでいるが、それはつまり沙龍のことである。

「真武君、お前は緑麗様がどれほどこの世界に貢献したのか、理解してないのか。緑麗様がいらっしやらなかつたら、我々はこちらには居ない」

赤帝君がそう言うのも分からないではないが、それは微妙に話が違うんじゃないか……と木佐は思った。

## 6 気懸りは夢に出る

もう陽が落ちてしまったので、今日の探索は切り上げた。

地図上にチェックしたポイントは全て調べ尽くしたっていうのに、どこにもそれらしき形跡がなくて、今日は彷徨うように森を歩くだけで終わってしまった。

「私の当たりのつけ方が間違ってるのかなー……」

黒焰虎の毛皮を背もたれに、もう一度地図を見直しながら唸ってみても、お腹が鳴るだけで集中できない。

しかし、火にかけてた缶詰スープが温まるまではもうちよつと待とう。

黒焰虎の脚の速さを考えれば、夜は水雲宮に戻ってもいいんだけど、「朝起きて仕事に行く」というのが嫌で、私はこの数日、森で野宿している。

朝起きたら、そこに仕事がある、という方がまだマシだからだ。

しかし、こんなことをしていると、原始人にでもなった気分だ。

食料は缶詰を山ほど持ってきたので、狩猟をする必要はないが、水道もなければ

ば電気もないという場所で普通に生きていける人って、そんなには居ないんじゃないだろうか。

私がこういうサバイバル生活ができるのも、風林や董天に色んな知識を教わったからなんだけど、手から火が出せたり、水が出せたりすれば、もっと簡単で便利なんだろうな。キサさんと赤帝君を連れてくればよかった。

「ふう……」

ここ数日、昼間は取り憑かれたように森を彷徨って、夜は夜で『昊ちゃんレポート』を読み直してたら、さすがにクラクラきた。

「イチかバチか、当たりが出れば夢の世界一周、出なくても栄養満点、一缶で一食分！」がキャッチコピーの、深夜通販で有名な『ギャンブル・スープ』を五秒でたいらげ、もう寝ることにした。

「黒焰、後を頼む。おやすみ」

「御意」

背中の聖魔剣を外して脇に置き、横になった。

フカフカの黒焰虎の毛皮を枕に眠るのは、なかなか気持ちがいいものである。



このどこまでも忠義な霊獣は、私が休む間は、こうして見張り役もしてくれるので、安心して眠れる。

小龍は最初から当てにしていなかった。放し飼いの状態なので、たまに一人で居なくなるし。

そういえば、今日は姿を見てないな……。

まあ、明日になれば、またフラッと戻ってくるだろう。

揺らめく影に、黒焰虎は一瞬、身を固くした。

だが、それが本来の主であると分かると、緊張を解いた。

「九雷様」

「ご苦労だったな、黒焰」

小龍を肩に乗せた九雷が、この暗闇の中に姿を現した。

「緑麗様は、さきほど、御休みになられたところです。お疲れのご様子で……」

「そうか。起こすのも可哀想だな。目が覚めるのを待つか」

九雷は、黒焰虎を背もたれにして寝ている沙龍を見て、そう言った。確かに沙龍は疲れ切った顔をしている。

「なにか、お急ぎの御用で？」

「いや、そうでもない。玄都げんとに呼ばれたんでな。緑麗りょを連れてこい、と」

「玄都——。太上老君ですか？」

「ああ。だが、出発は明日でいい」

九雷が沙龍の身体を掬い上げながらそう言うと、黒焰虎は一旦役目は終わつたとばかりに、軽く伸びをした。

「お前も朝までには休んでいろ」

九雷は、黒焰虎が沙龍に遠慮して、自分の食事も睡眠も満足にしていけないのではないかということを見越して言った。

「その必要はありませんが、水雲宮に忘れ物をしましたので、取りに行つて参ります。明日の朝までには戻ります」

黒焰虎は深々と頭を下げながら、足音を立てずにその場を離れた。

忘れ物というのは、黒焰虎の気遣いであつて、それを九雷も長年の付き合いで

理解している。

「……？ あ、れ……？」

沙龍が半分、目を覚ましたようだ。

「まだ寝ていていいぞ。俺がそばにいる」

「うん……？」

寝ぼけ眼で、沙龍はそのまま、また眠ってしまった。

夢かな……。近くで、誰かの、とてもイイ声が聞こえた気がしたけど。

まあ、いいや。このベッドは気持ち良くて、起きる気がしない。この肌触りと体温は、妙に落ちつく。

ああ、なんだか、すごく幸せだ。

まるで、フワフワの茶碗蒸しをお腹いっぱい食べた後、縁側で昼寝しているよ  
うな、そんな、当たり前前の幸せ。

だって、今にも聞こえてきそう。

「馨、そんな所で寝ていると、風邪引くぞ」

……？

「だから言ったただろう。もっと計画性を持ってやれって。まったく、馨の頭には学習機能がついてないのか」

あれ……？

「馨、頼むから、一円でいいから、黒字になる仕事を……」

ああ、これはキサさんか。

そうだよね、私をそう呼ぶのはキサさんしか居ないんだし。

あ、そうそう、キサさん、私、言おうと思ってることがあるんだよ。

もう、私のことは心配要らないから。

身体も治ったし、例え百年の恋が冷めても一人でやっていけるから。

そりゃ、泣くよ。私はキサさんと会えなくなるなら、大泣きするよ。

でも、それが見たくないからって、貴方までこっちの世界を選んでも、きっといいことないよ。

だったら、ちゃんと笑顔で送ってあげるよ。

勿論、その後、トイレで一人で泣くけどさ。

「沙龍——」

そうだ。

最近はこちらで呼ばれることがほとんどで、自分の日本名なんか忘れかけていた。

「沙龍」

「……」

ベリッ

と、音を立てるように目が開いた。

そして、急に覚醒した。

……ん？ 「ベリッ」ってなんかおかしくないか。

「目が覚めたか？」

「……!？」

慌てて、口元を拭った。よかった、よだれは垂らしてなかったみたいだ。

黒焰虎の毛皮の中で眠ったはずなのに、目が覚めれば恋人の腕の中って、幸せなんだか、寿命が縮むのか、分からない。

「ど、どうして、ここに……？」

元帥がかけてくれたであろう上着を引き寄せ、とりあえず、モサモサになっているはずの髪の毛を隠した。

私は猫ツ毛なので、朝起きると髪の毛が巨大な一つの毛玉のようになってしま  
うのだ。

それを見ていつも爆笑していた元同居人は、いまではなんの冗談か、お偉い神  
様になってしまって、しばらく会ってもいない。

「心配になって、様子を見に来た」

「そ、そうですか……」

丁寧語とか、尊敬語とか、今までの人生でほとんど使ったことがないのに、こ  
の人の前ではたまにこんな風になってしまおう自分に、最近気付いた。

「私、元帥に寝顔ばっか見られているような気がする……」

「なぜ嫌がる？」

「寝顔見られて嬉しがる女は居ません」

「だが、見ている方は飽きないぞ」

そうですね。私にもたまには、その役、やらせて下さい……。

今更取り繕ってもしようがないんだけど、簡易洗面所になっている湧き水で顔を洗って、髪を梳いて、なんとか普通の女の子くらいには化けておこうと思った。

客観的に見ても、私はただでさえ『可愛い恋人』にはほど遠いわけだし。

(あ、「ベリッ」の意味が分かった)

涙の残骸で瞼が張り付いていたようだ。

泣くような夢を見ていた自覚はないんだけど、よりによって過保護で極甘な恋人に見られたとは、痛恨だ。

さつきから、なにか言いたそうに、心配そうな顔している元帥が、変なことを言い出さないことを祈ろう。

と思った矢先に、直球な問いがきた。

「後悔してるのか……？」

「してないよ」

思わず即答した。

さらに、強調の副詞も入れなくなっただけ、却って嘘くさいだろうと思ったので、我慢する。その間、〇・一秒。

「そうか……、まあ、後悔しても遅いんだがな」

と、性悪な笑みを見せるので、ちよつと安心した。

まあ、それでこそその、元帥閣下なのよ。

私が身支度を整えている間に、元帥が朝食用の『ギャンブル・スープ』を開けて、火にかけてくれた。

「準備ができたなら、玄都へ向かうぞ」

「玄都？」

「陛下が太上老君のところに即位のご挨拶に行かれるんだが、噂の黄龍も一緒に連れてこい、とのご要望だね」



えーと？ 太上老君って、あの太上老君？ 天帝様よりも格上だという、無敵のご意見番の？

「『ご要望』なのは、太上老君の方？」

「そうだ。なにかあるかもしれない。気を付けておけ」

「なにかって……。老君は敵なの？」

「いや、そうじゃない」

と、元帥が苦笑する。

私は天界の力関係をまだよく把握してないから、その苦笑の意味が分からない。

「んじや、ハラグロ系？」

「いや、至って善人だが、少々悪戯が過ぎる所もある」

「フーン……？」

まあ、いや。

そういう政治的なやりとりは、この人に任せておこう。

「ところで、元帥はどうやって私を見つけたの？ この広い森で」

「簡単だ。ある程度近くまで来れば、黄龍の『氣』で分かる。四神には容易いとだ」

そっか。普段、封印してるから忘れてた。

この人に宿る、青龍の力を。

ん？ 待てよ……？

「ということは、その逆も出来るってことなのに、私には出来ないのはなぜ？ 潜在能力の差？」

「訓練してみるか？ 五十年もあれば出来るようになる」

「結構です……」

そんなことしてたら、寿命が尽きるわい。

「……？」

なぜか、元帥がさつきから自分の手元を凝視している。

そして、

「沙龍、旅行は好きか？」

唐突に聞いてくるので、その手元を覗き込んだ。

「特に好きでも嫌いでもないけど……、地続きなら」

実は、私はカナヅチなのである。運動神経は決して悪くはないと思うのに、なぜか水泳だけはできないのだ。だから、船は嫌いだし、飛行機だって海の上を飛ぶ限りあまり乗りたくないものではない。

「そうか、なら、これは要らないな」

「……？ え？ え？ ……ええええええ〜ッ!？」

元帥が見ていたのは、『ギャンブル・スープ』の缶のフタだった。

そこには、『大当たり』の文字が燦然と輝いている。

おそらく、どんな宝くじや懸賞よりも低確率と言われ、ネットやロコミでどんなに探しても決して当選者が出てこない、もしかしたら、当たりなんか最初からないんじゃないかとまで言われているこの『ギャンブル・スープ』に、ちゃんと当たりがあつたなんて！

「うわ〜、世界一周豪華客船クルーズかあ〜……」

「行きたくなかったか？」

「う〜ん、でも、船旅はやっぱ遠慮する。これは、誰かにあげようよ」

「お前は無欲だな……。なら、船旅じゃなきゃいいのか？ 別にこんな二流メーカーの懸賞など使わなくても、俺がどこにでも連れて行ってやるんだが……」  
出たよ、この超甘やかし攻撃。

この人のなになが凄いつて、普通の感覚では考えられないくらいの贅沢をさせようとするところで、私は毎度それを苦々しく思いながらも断っている。

といつても、断るのは謙虚な理由からではない。自分基準の理由で、である。重すぎて動けないくらいの豪華な衣装とか、行きたくもない船旅とか、はつきり言つて迷惑以外のなにもものでもないのです、遠慮せずにガンガン断ることになっている。

「旅行に行きたいわけじゃないの」

そう言うと、元帥が少し淋しそうな顔をしたので、ちゃんとフオローはした。

「好きな人と一緒なら、私にはどこだって楽園だから」

——と。

黒焰虎にタンデムして玄都に到着すると、すぐに王宮御用達のような仕立て屋に連れていかれた。

ジャングル探検隊のような着の身着のまままで来たわけだから、着替えなきやいけないのは分かるけど……。

「ゲフ」

胸から腰にかけて、鉄板でも仕込まれたかのように重い。

「まあ、よくお似合いですわ、緑麗様」

店の主人のようなマダムが齒の浮く台詞を言っているが、私は、外で待つてくれているであろう恋人のもとへ行かねばならんだ。

ならんのだが——、さつきから、一分に一歩くらいしか進めない。

「せ、世話になった……なつ。この着物代と、着付け代とかの請求書は、水雲宮に——」

そう言うと、マダムはにっこり笑って、言った。

「いえ、もう頂いておりますから」

やはり……。

ヨロヨロとよろめきながらも、なんとか店の入り口まで辿り着いたら、ドアが勝手に開いた。

「おい、服が歩いてるぞ、九雷」

いま、ドアを開けてくれたらしい人が、その優しい行為に反して、笑い出しそうな声で言ってる。

しかし、私は、陽輝大将を見上げてなにかを言い返す余力がない。

「陽輝の冗談は気にするな、沙龍」

気にはしてないけど、いや、多少はするけど、それよりも、私は、いま、それどころじゃなくて……っ。

「お、お待たせ……、でも、こ……、これじゃ、ろくに動けない……っ」

こんなにゴテゴテに飾り付けられて、衣装の総重量を聞くのもおそろしい。

一センチ動くたびに、ズツという重い音がしてる。

この前の火雲宮登城時の正装も凄かったが、今日のはまた格別だ。

つまり、それほど『太上老君』には気を遣わなければならぬってことなんだろうか。

「……あうっ!？」

見かねた元帥が、ギシギシ動いていた私の身体を摘まんで、黒焰虎に乗せてくれた。

「謝謝……」

帝都の華やかさとは違って、この街は落ち着いた感じがする。

私達がいま歩いている通りも、メイン通りではあるんだろうけど、行き交う人達もまばらで、みな歩調がゆっくりしている。

「はあ、ここに来てなにが一番苦痛かって、この『正装』なんだよな……」  
思わずそんな愚痴を零してしまった。

「そのうち、慣れんだろ。いーじゃねえか。筋肉養成ギプスだと思えば」  
中年オヤジがケロっと言うので、ムカっとした。

「そんなこと言うなら、お前が着てみる！　いいや、いつか絶対着せてやる！」

大体、なんだ、その一人で遊び人な格好は！」

元帥だってちゃんと軍服着てんのに、この軍大将ときたらTシャツにGパン、革ジャンに野戦ブーツという、とても堅気の軍人には見えない格好をしている。

「あー、いいのいいの、俺はこれがデフォだから」

「今日は、秦ちゃん陛下と太上老君が居るわけでしょ。そんなんで怒られないの？」

「まあ、別に俺は天ちゃんの直属でもないしな」

「え？ どういう意味？」

「ああ、四方軍つてのはちよつと特殊でな、別に天ちゃんの命令は聞かなくていいことになってんだ」

「なにそれ、じゃあ、臣下じゃないってこと？」

「いや、臣下は臣下なんだけどな、命令系統が違うっーか……」

「フーン……」

そんな話をしていると、通りの先で、軍服の男が元帥に気付いて最敬礼をした。



元帥は、足を止めてその男を見ると、独り言のように言った。

「呉謙ごけんか……」

「久しく拝眉の機会を得ず、誠に失礼を致しております」

元帥よりも少し若くて、華奢な感じのする男だった。

軍服のようなものを着ているが、これは天界軍の制服じゃない。

私も何度か見たことがある、これは、近衛府の隊服——である。

「……」

ちよつと緊張感が走ったので、私も陽輝大将も、なんとなく口を噤んだ。

天界四方軍のなかでも東方軍は近衛府と仲が悪いという話は聞いたことがあるけど、そういうのが関係しているのか、元帥も仕事の顔になっている。

「先的大幅な異動で近衛隊長に就任したと聞いたが」

「はい。各方面から推薦を頂きました」

ふーん、この人が超エリートと言われている近衛兵達のトップなのか。

もし、この人が常に秦帝の身边警護をしているのなら、私も二回会ったはず——  
—なんだけど、拝謁したとき、こんな人、居たかな—。

まあ、居たとしても、近衛府の軍人さん達はみんな帽子で半分顔を隠してるから、あんまり印象に残らないのは当然なんだけど。

二人の社交辞令な会話はしばらく続いて、すぐに終わった。

「知り合いか？」

遠ざかる近衛隊長を顎で指して、陽輝大将が聞いた。

元帥は半分呆れた顔をして、

「覚えてないのか？ 士官学校時代の後輩だ。当時は『庚』<sup>コウ</sup>と名乗っていたが」

「俺はお前と違ってロクに出席してなかったから、同級の奴らだって覚えてねえ

——。ン……？ 庚？ もしかして、下のクラスに居た、あの『庚』か？」

その言い方からして、やはり訳ありな匂いがする。

「ああ見えて、油断のならない男だ」

と、元帥自身、なにを考えているのか分からない笑みを浮かべる。

ああ見えて——、つまり、無害そうな、ちよつと華奢で繊細なお坊ちゃんに見

えて、という意味かな。

でも『油断ならない』ってのは、どうなんだろう。

「一番油断ならないのは、元帥だと思っただけど……」

ポツリと私の本音を漏らすと、陽輝大将が笑っていた。

「沙龍……、お前は俺のことを、常に陰謀巡らせてるでも思ってるな」

「褒めてんだけどな……」

「しかし、イカれた市民運動に傾倒してた奴が、皇族御用達ボディーガードの隊長やってるってのはどういった心境だよ。さつき庚が自分で言ってた『各方面』てのは、誰か特定のやばい奴のことでも指してんのか？」

「さあ、どうだろうな。誰の推薦があったにしろ、最終的に陛下の許可がなければ近衛府には入れない。ということとは、陛下には信用されてるんだろう」

「ふーん。でも敵に回すと色々厄介なんじゃねえ？ 沙龍、お前も気を付けとけよ」

「うん、分かった。……でもさー、実際問題、私はこの格好でどう気を付けろと？ 襲われたら、返り討ちにできるかどうか……」

と、改めて、とても動きにくい、この正装のことを言った。

「沙龍、ここは『そういう場所』じゃない。誰も太上老君のテリトリーでそんな

真似はしないさ」

「そーそー、今日なにがあるって話じゃねえって。八景宮でこと起こしたら、大変だぜ？ あの爺様怒らせたなら、街の一つくらいなくなるからなー」

「そ、そう……」

私達は数ヶ月前に、一番ことを起こしちやマズイような火雲宮でことを起こしたような気もしないではないけど、アレはアレ、ソレはソレってことにしておこう。

「まあ、いずれにしても……」

と、前方に見えてきた朱塗りの洒落た門の前で元帥は一度立ち止まった。

「なにがあっても、お前は俺が護ってやる。心配するな」

「……」

思わず絶句する私。

私は、こういう台詞を言われたことがないわけではない。

どちらかと言えば言う方だったけど、それでも、勘違いナルシスト野郎は世の中にたくさん居るわけで、私の見た目年齢も相俟って、不必要に護ってくれよう

とするフェミニスト君達は何人か居た。

だけど、この人ほど、この台詞に自信と根拠が伴っている人はいなかった。

本来、私は命令口調も、おしきせがましい口調も大嫌いなはずなのに、いま、そこにも引つ掛からなかった。

恋人特権により税関ノーチェック——、っていう感じで、本当にこの人だけは『特別』なんだ、と改めて思う。

だけど、実を言うくと、私は税関の手前の検疫で引つ掛かっているのだ。

恋人にそんな言葉を言われて嬉しいと感じる前に、自分の中の病原体が、ザワザワと騒いでいる。

「あ、そうだ。陽輝大将」

そのザワザワ感を打ち消すために、お前らは勝手にやってろ、と言わんばかりの陽輝大将に声を掛けた。

「見たところ、旅鳥なイメージもありありなんで、よかったらこれあげるよ」と、例の当たりフタを渡した。

「……？ うおっ！ もはや伝説になってる『ギャンブル・スープ』の当たりか

!?! 俺も長年非常食にしてるが、これの当たり、初めて見たワ……。で、これを俺にしてくれるってのか？」

「うん、私は要らないから」

「しかしなー、こういうのは一人で行ってもしょうがねえし……。あ、でも、豪華客船ってなんかいいな」

「一緒に行く人、居ないの？」

「あ？ 言ってなかったか？ 俺はヤモメだぜ」

「奥方に逃げられたんだ。女遊びがひどくてな」

と、元帥が意地悪そうな笑みで補足する。

「それって、なんか簡単に想像できる」

「まあ、そういうわけなんで……」

陽輝大将が当たりフタを返そうとしたが、その前に、八景宮のスタッフが出迎えに出てきたので、私達の馬鹿話は中断された。

すつかり準備のできた会場で、秦帝が恭しく跪いた。

遠目にも分かる整った顔立ちは、アイドルにもなれそうだけど、あの少年のよ  
うな陛下だって私よりも遥かに年上だし、五行術は一流だ。

二回謁見した限り、玉帝に感じたような鋭気はなかったけど、混乱気味だった  
帝都を短時間で見事に立ち直らせたその手腕は、やはり侮れないはずだ。

その秦帝の前に、カスツカスな感じのする爺様が現れて、信任の証である佩玉  
を秦帝に授けた。

取り敢えずこれでメイン・イベントは終わった——ってことになる。

天界のご意見番たる太上老君は、身分としては『最高神の一人』という一般的  
なカテゴライズでしか説明できないが、その名前と実力と影響力は天界住民達に  
とってはおそらくナンバー1の存在である。

私は欠伸を噛み殺しながらその式典に参列していたが、隣の陽輝大将は立った

まま眠っていた。なんて器用な……。

そして、ややくだけた感じの『昼食会』が始まると、太上老君と秦帝は二人で、式典の参列者達に声をかける。

招待を受けたのはこちらなのだから、こちらから挨拶しに行くのが礼儀じゃないのか、とも思うんだけど、目下の者から目上の者に声を掛けるのは失礼になるので、我々は声を掛けられるのを待つというスタンスだ。

すると、壁の端っこで、さっきの当たり缶の話の続きをしていた私達の所に、太上老君がニコニコしながら真っ先にやってきた。

周囲の目は、その太上老君と追従する秦帝に注がれている。

「久しぶりじゃのー。この三人が揃ってるのを見るのは」

骨と皮だけののような体格で、威厳という言葉とは無縁のような爺様だった。

両隣の軍人二人がキツチリと同時に敬礼する。

私も思わず頭を下げた。

「九雷、陽輝。先の件では色々ご苦労だったな」

先の件——というのは、勿論、麒麟打倒のことだろう。



「私は自分の仕事をしただけですから」

嘘っぽく、でも、一応マニュアル通りに答える元帥。

「しばらくは難癖つける者も出てこようが、まあ、お前さんなら大丈夫じゃろ」

麒麟を倒したことは、『天界を救った』として、ヒーロー扱いされることも多いが、その事実の裏には、必ず『玉帝殺し』がついて回る。

本人の筋書きだったにせよ、君主が殺されたという事実は間違っていないのだ。

ただ、火雲宮には呼び出されない限り行く必要のない私と違って、この一連の事件の矢面に立っている元帥は、色々面倒な思いをしているに違いない。

それを、気に病むどころか、陰口叩くような連中を嘲笑して楽しむのが元帥なので、ストレス面での心配はしていないが、実質的な被害（例えば、一番最悪なものとして、政敵による暗殺とか）は十分に考えられる。

「それにしても、緑麗、お主……」

「はい？」

考え込んでいたら、急に名指しで声を掛けられた。

「随分様変わりしたのー。前はアルコール漬けの妖怪のようじゃったが、今のほうが断然美しいぞ」

「……は、はあ」

（“美しい”……？）

どこをどう見たら、そう言えるんだ。

社交辞令にしたって、却って寒々しい。

緑麗は私から見ても超絶美人だったのに、それを『妖怪』と言い切るとは、この爺様、やっぱ相当おかしいワ……。

それとも、なんか別の意図があるんだろうか……？

「お主、今は将神ではないのだったな？」

「はい」

「フム……。では、儂のところへ嫁に来んか？」

ざわ……ッ

と、周囲の空気がどよめくのと同時に、私自身、ヒクツ、と口の端が歪んだ。

……ナンですと？

「独身主義にもいささか飽きてきたところでのう。お主も、公職に就いていないなら、毎日暇じゃろうし……」

いや、暇じゃない、断じて暇ではないぞ！

「若い嫁さんとウハウハな老後！ うーん、これこそステイタスというものよ」  
あ、ダメ。

もう切れそう。つか、切れた。

「ふじゃ——（けんな、このクソジジイ）、へんふあ、ホガガ？」  
叫ぼうとしたら、両脇から同時に口を塞がれていた。

「し、失礼を致しました。緑麗は転生後、東の国で育ちましたので、まだ言葉がよく分かっておりません」

陽輝大将が、咄嗟に取り成す。

「では、誰ぞ通訳をしてくれんかのう」

（ほがーッ！）

その時、若き天帝が進み出た。

「僭越ながら、太上老君。緑麗は、現在無位無官とはいえ、特別に私が国家機密

に相当する仕事を頼んでおります。多忙故、帝都を離れることはできませんまい」

(……)

いや、別に期限付きの仕事でもないから、多忙ってわけでもないけどね。

「フム、なら儂が帝都に引越してもいいのう♪」

「御戯れを。玄都の太上老君が、帝都の太上老君になってしまえば、印刷業者の叛乱が起きます」

「えー」

「えー、じゃありません。それに、一番大事なことをお忘れのようですね、太上老君？」

「……なんじゃったつけ？」

「緑麗は女性の身。老君のご執着される、少年期の男性の体型に似通った部分が多少見受けられるかもしれませんが、それでも女性であることに変わりはありません。老君のお相手は務まらないと思えますが？」

(……マテ)

今、陛下は、重要なことを二つ言った気がするぞ。

一つ目。

つまり、この爺様、少年スキーなのか……。フツ……。さっきの『美しい』の意味がなんとなく分かったぜ……。

そして、二つ目。

つまり、少年体型ってことですね。ぶっちゃけ、凹凸ありませんってことです  
ね。

陛下がすごい言葉を選んでくれたのは分かるが、なんだか、意外にもズドンと落ち込んだ。

両隣が笑いを堪えてるってのも、納得がいかない。

「……ま、軽いジョークじゃ。三人とも、楽しんでゆけ。酒はたくさん用意してある」

なんだよ！ 冗談かよ！ なんて人騒がせなジジイなんだ！

9 八景宮の宴

「最初っから冗談だろうとは思ったけどな。お前が啖呵切ろうとしたときは、さすがに久々に肝が冷えた」

夜になって、さらに弾けた宴会が始まったホールで、陽輝大将が寝そべったまま言った。

元帥は誰かに呼ばれて席を立ったままである。

「……すいません」

「まあ、退屈しねえんだけどよ」

と、豪快に笑うこの大将は、誰かによく似ている。

「悪戯が過ぎる人だったの、よく分かったよ。……でも、一つ分からないことがある」

「……あ？」

「なんで太上老君はわざわざ、周囲の注目を浴びるような真似をしたのかなー」。

ジョークを飛ばしたいだけなら、もっと軽くできたはずなのに、それとも、なにも考えてないだけかな……」

「注目を浴びたかったんじゃないやなくて、秦帝の度量とか機転を見たかっただけじゃねえ？」

「ああ……」

なるほど、今回の式典の内容からしても、そう考えた方が分かりやすい。

宴会会場はほとんど無礼講みたいになってきているので、私も頭上の髪飾りを外して、くつろいだ。

「あと、もう一つあるとすれば——」

「うん？ なに？」

「ウーン……、これは俺の考えすぎかもしれないが、九雷がちよっと不機嫌面してたのと関係あるかもな」

元帥が不機嫌？

私には分からなかったけど、長年の親友が言うなら、そうなんだろうな。

「前にも、そういうや、あったなあ……」

「……………」

「まあ、大昔の話だ」

と言つて、それ以上、陽輝大将は教えてくれない。

「あのさ……、陽輝大将。玉皇大帝は、結局、私に緑麗の記憶を戻さないまま逝つてしまった。私は、多分、死ぬまで緑麗だったときのことを思い出すことはないと思う」

「……………」

「二人共、それは気にならないの？」

「どういう意味だ？」

「私の感覚で言えば、親友や恋人と共有している過去の記憶は大切だよ。陽輝大将だって、私の前世が別の人だったら、こうして一緒にお酒は呑まないわけだしよ」

「否定はしねえが、沙龍。『それ』を思い詰めると、多分、お前にとっていいことはないと思うぜ」

「まあ、そうだろうけど……」



ここの老酒がまったりと美味しくて、気付けば杯がかなり進んでいた。

飾りは外したはずなのに頭が重いのは、眠気のせい……？

「あんま考え過ぎんなよー？」

「うん、分かってる……ダイジヨブ。そんなに、私の頭は難しく考えるようにはできてない……」

「なあ、沙龍。俺は、お前が『元の世界』を選んだのを喜んでるし、それが正解なんだろうと思ってる。だったら、後は楽しむだけじゃねえ？」

「うん、そう……、陽輝大将は、いいよね。私の好きだった人と同じことを言う……」

私の初恋は、今まで、上海のあの雀士だと思っていたけど、もっと前に、実は経験していた。

多分、ほうりゆう豊隆だ。

その後の人生では、あの野生的な面影をずっと追いかけていたわけだし。

「そうだ、沙龍。大したことじゃねえんだが、ちよつと気になることが——、つて、おい……」

でも、その原点がここにあつたなんて、私は知らなかったよ。

「すまん、以前の感覚で吞ませ過ぎた」

沙龍をおぶった陽輝が、八景宮の客室に現れた。

九雷はそこで仕事をしていたようだ。パソコンの脇に小龍が待機していて、輝いた目で九雷にお使いを頼まれるのを待っている。

しかし、その小龍も、陽輝のオレンジ頭を見た途端、ムスツと視線を飛ばしてきた。

「寝てるだけか」

「ああ、昔と違って酔っ払っても無害なのは助かるよなー」

沙龍の身体を長椅子に寝かせると、陽輝は勝手に部屋に設置された冷蔵庫を開けて、缶ビールを取り出す。

「なあ、ちよつと気になってんだが」

「呉謙のことなら、いまはなにも話すことはないぞ」

「『そっち』じゃねえよ。……沙龍な、お前のこと、なんて呼んでる？」

「階級で呼ばれることが多いな」

九雷は半分嘘をついた。

普段、沙龍は九雷のことを決して名前だけでは呼ばないが、情交中やそれに準じた時は名前でしか呼ばない。

それが彼女なりの切り替えなんだろうというのは理解していた。

「そうか。やっぱりな。あいつは未だに俺のことも『陽輝大将』さ。どうもな、あれが気になる」

「前世のことを気にしてるってことか？」

「気にしない方がおかしいだろ。どんな脳天気でも、片隅では考えるはずだぜ。

そうは思わないか？」

周りは、今の自分を見ているわけではない、という、地上出身者ならではの悩みである。

「だから、距離も置きたくなるんじゃないか？」

それが、呼び方に頭れているのではないかと陽輝は言っている。

「それは、時間が解決する部分もあるだろう」

「その時間が、ありやな」

「……？」

「沙龍は百年の寿命も持たない、生身の人間なんだぜ？ 多分、時間の感覚は、俺達とは全然違うだろうよ」

「そうだな……」

陽輝に言われるまでもなく、九雷とて、それを考えぬ日はない。

三千年間待った見返りが、たった数十年の逢瀬では、割が合わなさ過ぎる。

「あいつが仙骨持ったりやな……」

仙人修行がハードだろうと、それならば、ほぼ同じ寿命の中で生きられるが、沙龍には仙骨の欠片もなかった。

「……ぐう、きゅー」

なにやらもごもごと文句を言っている小龍は、陽輝に早く出て行って欲しいようだった。

しかし、陽輝はというと、これまた勝手に探してきた柿ピーを、小龍を的に

して放り投げては遊んでいる。

だから嫌われるんだ、と九雷は思っているが、今までの話が憂鬱だったので、口を開きたくなかった。

「で……？ 呉謙のことって、なんだよ？」

思い出したように陽輝が聞く。

「まだ大した情報はない。要注意ってだけの話だ」

「フーン？ 奴のバックとか、スポンサーを調べてたんじやないのか」

凶星を突かれて苦笑せざるを得ない。

だが、それくらいの目端が利かなければ大将にはなれないわけで、『こう見えて油断ならない』のは、本当はこういう男のことをいうのかもしれない。

「少し意外な人物が出てきたぞ」

九雷がそう言うので、陽輝は缶ビール持参でそのモニターを見にいった。

「ゲ……」

陽輝が嫌な顔をしたのは、それが陽輝にも多少因縁のある人物だったからだ。

「こいつが庚のスポンサーかよ？ だったら、狙いは沙龍じゃねえか」

「そうなるな……」

「そういや、最初に沙龍が火雲宮に呼び出されたとき、宰相が突っかかってきたって言うってたな？ あれも、こいつが絡んでんのか？」

「いや、あれは宰相の単独だろう。大した騒動にもならなかったし、沙龍も楽しんでたぞ」

「寄ってたかって近衛の連中が、沙龍に『本人確認テスト』をしたんだろ？」

「見事に全員、医療棟送りにしたけどな」

「それも見てみたかった気もするが」

「西華せいかにで、もうすぐ蟠桃会ばんとうえがあるだろ？」

「あ？ なんだよ、いきなり……。そうだな、そんな時期か」

「呉謙が動くかどうかは分からんが、それなりの準備は必要だな」

小龍はいつの間にか、長椅子の沙龍に寄り添って眠っていた。

八景宮の夜が更けていく。

八景宮に一泊するつもりはなかったのに、昨夜は不覚にも酔いつぶれてしまった。

「うう、呑み過ぎた……かな」

フラフラしながらベッドを抜け出し、足を引きずってバスルームへ行こうとすると、続き部屋の隣から話し声が聞こえる。

「……？」

髪の毛を直すのも忘れて顔を出すと、元帥と陽輝大将が朝日を浴びながら呑んでいた。

「オハヨー、お二人さん……。まさか、もしかして、ひよつとすると、昨夜からずっと——ですか？」

「よ、沙龍。お前も呑むか？ って、……ぶっ!!」

「いえ、結構です……」





化け物だ、やっぱこの人達は。

どんだけアルコール分解酵素持ってるんだよ。

「……で、なに指差して笑ってるの、そんなにオカシーかよ、この毛玉が」

開き直って腕組んでふんぞり返るが、陽輝大将の爆笑は止まらない。

その無礼な笑い方はキサさんみたいじゃないか、と思いつながら、そのままバスルームへ向かった。

「あれ？ 陽輝大将は？」

シャワーから上がってバスローブ姿で隣を覗くと、オレンジ頭が居ない。

小龍は、まだテーブル上のバスケットの中で眠っていた。そういや、昨日どこに居たんだ、この子。

「ああ、先に帝都に戻った」

と仰る元帥閣下が手招きをするので、頭を拭きながら近寄ると、そのタオルを取り上げられた。

「……………」

ああ、乾かしてくれるのね。

ますます子供扱いだな、と思いながらも、好きにさせた。

大きな手でガシガシと撫でられる感じが気持ちいい。

「沙龍、俺はしばらくここでしなきゃいけないことができた。お前はどうかする？」

「うーん、一緒に居たいところだけど、私も仕事の続きしなきゃな……」

まるで進展のない『黒の森』探索だけど、放置しとくわけにもいかない。

昨日は、秦ちゃん陛下にも遠回りに念を押されたし。

「それなんだがな、お前一人じゃ色々大変だろう。誰かアシスタントを募ったらどうだ？」

「でも、『国家機密相当』だし……、内容的にも五行のスペシャリストじゃないと無理なんじゃ？」

「四神府のスタッフなら問題ないだろう。白帝は居ないが、真武君と赤帝なら、帝都に詰めているはずだ」

「それって、勝手に頼んでいいもんなの？」

「現在の四神府は、『天界軍預かり』になっている。つまり、四神府に命令を下せるのは一人しか居ない。俺だ」

「な、なるほど」

職権濫用ってやつですね。

「どうする？ 沙龍」

「実際に手伝ってもらいかどうかは置いてくとして、話はしに行ってみるよ。ちよつと行き詰ってるし……」

キサさんには個人的にも話があるし——、と、思った途端に、なんだか憂鬱になった。楽しい話でもないから、しょうがないんだけど。

あれ？ そういえば、『ギャンブル・スープ』の話はどうなったんだっけ？  
陽輝大将が使ってくれるなら、別にいいんだけど——。

黒焰虎を借りて帝都に戻り、その足で四神府に向かうことにした。

火雲宮の敷地は広すぎてまだ把握し切れていないので、南門の売店で売ってる地図を買った。

「えーと、本殿があっちだから……、ああ、あの赤い柱だな。黒焰、北北西にG O！」

「場所さえ命じて下されば、お連れしますが」

「それじゃいつまで経っても覚えられない——」

と言ったとき、斜め背後から風圧を感じた。

黒焰虎もそれに咄嗟に気付いて、左に避けるように身体を傾ける。

「おーっと、悪イ、悪イ！」

いま、私達を、衝突寸前で追い抜いたエメラルド・グリーンの鸞が、数メートル先に急停止して、振り向いた。

「ちよつと考えごととしてたもんだからよ！ すまねえな！ 怪我はなかったかい、そこの娘さん」

と、一方的にまくし立てるその鸞は、身体の色合いは物凄く綺麗なのに、なんともいえないフアニーな顔をしていた。

身体と顔が全然一致しない——そんな感じである。

「いや、私は大丈夫」

目つきはすごく悪いのに、性格は全然悪そうには見えぬ、ひょうきんにも思えるその口調が笑いを誘う。

「そうかい、そりや良かつ……!? おっ!? おっ!? 誰かと思やあ、こりや、『天界最速』と評判の黒焔のダンナじゃないすか!」

「……知り合い?」

と、黒焔虎に聞くと、「いいえ」と短いお答え。

「黒焔のダンナは、あつしら霊獣の間じゃ有名ですからねえ。『天界一性格の悪い男を乗せた天界最速の霊獣』! ってなもんでさあ、カーツカツカ!」

「……行こう、黒焔」

「……御意」

恋人の悪口言われるのって、自分の悪口言われるより性質悪いな。滅入るよりも、思わず訂正したくなってムカツとする。

その反面、一生そう思ってる、という、困った独占欲もあつて——。

(でも、『性格悪い』と言われるのはしょうがない部分はあるんだよね……)

九玄娘々あたりも、元帥のことはあまりよく思っていないみたいだし。

かといって、董天とうてんみたいに心酔してるようなのも居るし、極端なんだよな。

我が恋人は確かに、どうでもいい人にはとことん嫌われようとしているような奇怪なところがある。それも複雑な生い立ちのせいなんだろうけど……。

「黒焰、ストップ。多分、ここ」

眼下に見えた白い壁の建物が、キサさんの新しい職場だろう。

地表に降ろしてもらって、改めてその門扉に『四神府』と書いてあったのを確認して、中に入った——ところで、呼び止められた。

「……緑麗様？」

慣れと条件反射で、その名前には一応振り向くようになったが、いま私を呼び止めたのは知らない女性だった。

随分、華やかな美女だ。ふんわりと長い黒髪で、白いシャツに黒いタイトスカートをはいている。

「まあ、やっぱり♪ 緑麗様、お帰りなさい」

なぜ百四十五センチ少年体型（結構根に持っている）の私が、八頭身金髪美人だった緑麗本人だと分かるのか——というのは、その人の仙術や五行術レベルに  
よるらしい。

つまり、そういった心眼が持てるのは、それだけの修業をしたからで、このお色気悩殺系の美人も、その姿に惑わされてはいけないうてことになる。

「お帰りなさい」とは？」

「え？ だって、ここは緑麗様の職場でもあったところですから……」

「ああ……、前の、ね」

そう言うと、その女性も色々気付いたのか、

「申し訳ありません。今の緑麗様に、昔の記憶がないということをお忘れしましたわ。……なにか御用でいらつしやつたのですよね。私、赤帝朱雀星君付きの秘書官で、紫凜と申します。以後、お見知りおきを」

「あ、うん……。キサさんに会いに来たんだ」

「佑様（注1）は、朝一で鎮江楼の方にお出かけになられましたわ。多分、お戻りは明日になるかと。詳しい日程は佑様の秘書官の曹昌に聞けば分かると思います

すわ」

「入れ違いになっちゃったか。じゃあ、出直すかな」

「ウチの星様セイじゃダメですか？」

「え？」

「なにかご相談なら、星様のことも頼ってあげて下さいまし。いま、ちょうど仕事シゴトが一段落ついて、時間もあると思いますし」

紫凜嬢が、思いも寄らなかつた提案をするので、それもいいかもしれな  
いと  
思った。

四神府の建物は、五棟あつた。

多分、四方将神プラス将神長の分つてことなんだろうけど、現在、使われて  
いるのは二棟分で、東の青龍は表向きは居ないことになっているし、白帝白虎聖君  
は、西域に駐屯しているらしい。

赤帝朱雀星君の居る棟は、クリーム色の壁と朱塗りの柱で簡素にまとまってい



て、以前、キサさんと京都に行ったときにこれに似た建物（※平安神宮のこと）を見たことがある。

あのとき、その建物に反応した私に、「唐風だからかな」とキサさんは言ったけど、北京の故宮とはまた違った雅な感じがして、印象に残っている。

赤帝君は、第一印象からして真摯な人だった。あの巨大な炎の剣に串刺しにされた時はさすがに「てめー、なにしやがる！」と思ったけど、それも一瞬だけだった。

執務室に通されると、さっきの紫凜嬢がすぐにジャスミン茶を持ってきてくれた。

なんだか、ここは一流企業の部長クラスのオフィスみたいな感じ。

赤帝君は、相変わらずキツチリと正装を着込んで、襟を正して迎えてくれた。

「即位式以来ですね、緑麗様。もう、お身体の方は大丈夫なのですか？」

「うん、元気一発、オロビタンD」

「……？」

いや、すみません、地上ネタでした。

「赤帝君は、五行術に詳しそうなので、色々聞きたいことがあるんだ」

「はい。私でお役に立てるのでしたら、なんなりと」

「えーと、どこまで話していいのか分からないんだけど、いま、ちよつと請負仕事をしていてね……」

と、『機密』に抵触しない範囲で説明する。

大体、話し終えたら、赤帝君は分かってくれたようだ。

「つまり、五行の氣の流れが中断されている場所を見つければいいのですね？」

「そうなんだけど、それがマイスタークラスでも分からないような、微細なものらしいんだよね。で、五行の全てを感じることはできないと、見逃してしまう——というのとある人の主張で……」

この仕事私が私に回ってきた理由でもある。

おもむろに席を立った赤帝君が、床の間に当たるような場所から、綺麗な飾り太刀を手にして戻ってきた。

「緑麗様の属性は、当然、黄龍と同じく『土行』になります。多分、普段は意識されてないと思いますが——」

と、赤帝君が私に差し出した太刀の、柄の部分を手にすると、そこに埋め込まれた宝石が鈍い黄金色の光を放った。

「……………」

「いま、この宝珠が示しているように、普段の緑麗様のお身体からは『土行』の氣が流れているわけです。……『氣』を抑えることはできますか？」

「……………？ やってみる」

具体的に『氣を抑える』というような訓練はしたことはないが、『氣配を消す』というのと同じだろうと思ったのでやってみた。

すると、今まで光っていた宝石が光るのをやめ、ただのガラス玉となる。

「結構です。これを、私がやると、紅くなります。……分かりますか？」

と、今度は、自分の『氣』を解放した朱雀星君がその柄を単独で手にすると、沈黙していたガラス玉が、見事な朱色の光を放った。

うわ、これはさすがに桁が違う……………！

サングラスが欲しいくらいだ。

「黒の森は、五行が乱雑に流れているのだと思います。それを感じ取るには、ま

ず自身の『氣』を消さないと、見えないものがあるのかもしれない」

「そっか……」

ん？ 待てよ？

私、場所まで特定したっけ？ してないよな？ なのになんで赤帝君は『黒の森』だって分かったんだ？

「できれば、同行させて頂いて、お手伝いできればいいのですが、実は、私も四神府に正式に戻ったのは最近でして……」

苦笑する赤帝君が、自分のデスクに山積みになっている書類を見た。

「いや、その気持ちだけ有難く頂戴する。それに、今の話は随分参考になったと思う。謝謝」

「どういたしまして」

「また困ったことになったら力を借りるかもしれん、そのときはよろしく頼む」  
「勿論です。いつでもお待ちしておりますよ」

赤帝君が屈託なく微笑んだ。

なるほど、これが火雲宮の女性陣を虜にしているとかいう、朱雀スマイルだ

な。

「ところで、なんで『黒の森』だって分かったの？」

そう聞くと、赤帝君自身もなにかに気付いた顔をする。

「いえ、それは……」

「……？」

「またの機会にでも、お話しますよ」

誤魔化されちまった。

でも、一応覚えておこう。

(注1) 格下の者が四方将神を呼ぶときは字に様付けをすることが多い。

キサさんには会えなかったが、思いがけない収穫を得て、再び『黒の森』に戻ってきた。

『五行』——この厄介……いや、有難いもの。

天界の住民にとっては、ほぼ『空気』と同義語になる。

そこら辺に流れていて、普段は見えず、なくなると非常に困るもの。

かつて、真武君が天界を去った当初は、五行で成り立つこの世界は、色々とバランスが崩れて、大変だったらしい。その分かりやすい例としては、出生率が落ちるとか、水が枯渇するとか、そんなところだ。

しかし、キサさんの前世である真武君は、ちゃんと自分の代理となるものを用意していったらしい。

あの人の用意周到というか、キッチリ自分の仕事はしますってところは、大昔から変わってないってわけだ。

真武君が用意した『代理』というのが、人なのかアイテムなのかは知らないけど、そのおかげでなんとか五行の流れを保っていた天界は、玉帝の政策もあって、平穏な三千年間を送っていたわけである。

「……？」

黒焰虎の背中から降りると、この前よりも一層、陰鬱な空気を感じた。

これが『陰氣』というものなのか、正確なところは私には分からないが、まあ、多分、そんなようなものだ。

私は地上に居た頃から純粋な力技しか鍛えてこなかった。いわゆる靈感もない。だから、多分、お化けに遭遇しても気付かないか、気付いても害にならないなら放っておくだろう。

とりあえず、赤帝君に言われた通り、自分の気配は殺した状態で臨んでいるが、以前と違うのは、この重苦しい空気のレベルくらいか。

「天界の住民達は、力の大小はあれ、全員、五行属性を必ず持つって赤帝君が言ってたけど、ということは霊獣も同じなの？ 黒焰は名前からして『火行』かな」

「御意。しかし、我々の属性は『五行術』に昇華できるようなレベルではありません」

「フーム……、ところで黒焰」

「はい」

「最初に聞いておくべきだったが、戦闘経験は？」

背中の聖魔剣を抜いて、その刃を確認した。

これは特殊な剣で、使う者の属性や力により、その質を変えらるという。

いま、この剣はごく普通の形状になっている。

「九雷様と共に、幾度か」

「そうか、では、己の身は護れるな」

地面から雨後の筍のように湧いてくるアメーバー状の物体が、いまにも襲ってきそうだが、彼らの動きは変則的で、鈍い。

「私のことはお気になさらずに。緑麗様を護ることが私の務め」

黒焰虎のその言葉に、妙に反発を覚えた。

「私を護っていいのは、この世で唯一人だけだぞ」



「では、緑麗様の邪魔にならない程度に、微力ながらお手伝いを」

アメンバー状態から、かろうじて人型のようにうねうねと形を取ったその物体達は、なにかの映画で見たゾンビのようだった。

顔色悪っ！　っていうような灰色で、服も着てるんだか着てないんだか分からないような見た目である。

跳ねるようにして襲い掛かってきたゾンビ一体を真つ二つにしたら、まるで手応えを感じなかった。綿飴とか、ゼリーを斬った感じだ。

案の定、またひつついて元のゾンビの姿に戻る。ノーダメージだ。

「ム……、キレテナイ」

「緑麗様、物理攻撃は効かないようです」

別の一体に突進して、同じ結果になった黒焰虎が、冷静に言った。

うーむ、しかし、私は五行術は使えないし、だったら一発黄龍召喚で片付けてもいいんだが、それじゃ面白くないので、色々試してみよう。

無数に沸いて出てくるこのゾンビどもの正体とかも気になるけど、とりあえず襲ってくるものは叩きのめすしかない。

「ザコに用はないぞ、責任者を出せ！」

斬ってもしょうがないんだけど、他にまだ方法も思いつかないので、左右から飛び掛ってきた二体を――。

あ、ちよつと思いついた。

赤帝君から預かった太刀を腰から左手で引き抜き、いま、聖魔剣で二分割したゾンビの上半身部分を、抜いた太刀ごと地面に突き刺した。

『刀身は本当に飾りです。果物を切るくらいにしか使えません』

赤帝君はそう言っていた。しかし、この柄の宝珠は貴重なもので、五行のメーターにもなるし、五行力の多少の増幅や減少といったこともできる。

「グアーツ！」

不気味な叫び声をあげるところを見ると、やはり効いているらしい。

太刀に私の『土行』――という自覚はないんだけど――を最大稼動で込めて、大地に縫いつけると、そのゾンビは絶命したように動かなくなり、最後には塵になつて消えた。

「なるほど、コツは分かった」

勝利を確信した顔で立ち上がると、遠巻きに蠢いていた他のゾンビ達が、怯んだ様に立ちすくむ。

人語は喋れないようだが、知能はあるのか。

「フツ……、喧嘩を売る相手を間違えたようだな。百四十五センチを舐めてかかると、痛い目見るぞ、おまえら——」

私が、IQ 45くらいの客席陣に向けてカツコつけてると、その客席側に、

ドゴオツ！

という物凄い爆音がした。

十秒間くらいは、もうもうと立ち込める煙でなにも見えない。

しかし、私の隣に鎮座している黒焰虎が動かないってことは、慌てることもないわけだ。

「……ケホツ」

全身煤だらけになったことだろう。

煤かぶり沙龍、負けるな百四十五センチ、ここにあり。

なんて、わけの分からぬ川柳詠んでる場合じゃない。

「私の見せ場、これからだったんだけど……」

「なんか、地面とか、木とか、なくなっちゃったじゃないか。」

「緑麗、無事か！」

「この姿を見て、判断してくれ——、飛龍」

かなりの自然破壊と共にゾンビは一掃されたが、結局奴らが何者かっつのは分からず終いだった。まあ、普通の物理攻撃は通用しないが、『物凄い力技』なら倒せるということは覚えておこう。

「で、飛龍はなんでここに？」

焚き火にあたって、『ギャンブル・スープ』をもしやもしや食べていた飛龍は、珍しく、答えるのを迷うような顔を見せた。

「ちよつとな。通りすがっただけだ。……緑麗こそ、なんでこんな所に居るんだ？」

「うーん、仕事というか、ボランテアというか……」

「まあ、いい。さっきのような敵がまた襲ってくるかもしれない。しばらく俺も一緒に居る」

「そ、そう……」

有難いと言えば有難いんだけど、力技の飛龍がパーティーに増えても、知性派が居ないんじや、この仕事は永久に終わらないような気がするんだよな……。

「ウキュー！」

と、不良ペットが頭上に舞い降りてきた。

「小龍、どこフラフラしてたんだ、お前は……。ん……？」

小龍は、その短い手で、自分の身体にかけている筒状のものを示した。

この子は、たまに、元帥のお使い仕事をしている。早い話が、伝書鳩だ。

天界といえど近代化された電子世界、携帯電話もPCもあるのに、こういう原始的な方法を使わなくちゃいけないときというものもあるらしい。

「……どれどれ」

小龍が差し出したその書簡入れを開けて、中の手紙を読んでみた。

てつきり元帥からかと思っただのに、字からしてそれは違うとすぐ分かった。



「フーム……」

その手紙をざっと読んでから、もう一度小龍を見る。

「陛下に直々に頼まれたの？ それとも、これは元帥経由？」

「くうー……？」

小龍に聞いても要領を得ないので、勝手に推測することにした。

元帥がこの手紙を小龍に持たせたのだとしたら、元帥の手紙も入っているはずだ。

ということは、やっぱ単独ラブレターか。

一月前――。

沙龍が火雲宮の玉座の間で秦帝に労いの言葉を賜った時、周囲の沙龍に対する視線は、はっきり二つに分けられるということが分かった。

簡単にいえば、歓迎する者、しない者、である。

天界は、移民フリーではない。むしろ、どちらかといえば選民主義で排他主義である。

だから、特例中の特例という形で天界住民となった沙龍に対して、奇異な視線が向けられるのは当然なのである。

沙龍は、歓迎しない者については、『襲ってきたら返り討ち』をモットーにしている。

それがいままでの沙龍のやり方であって、それは九雷とも意見が一致している。



しかし、『性格が悪い』と評判の九雷に至っては、『襲ってこなくてもわざわざ尻尾を出させて返り討ち』というのが正解だった。

敵が行動を起こしてから対応するのでは遅いというのは、どこのリーダーにも求められることだが、九雷の場合はそれが徹底していた。

当然、『この時』も、九雷はある程度の予測をしていたはずである。

謁見を終えた沙龍に、官僚風の男が近付く。宰相だった。

最初は世間話を装って、次第に、彼の目論見通りの話題へ。

『かつての将神の奇跡のような腕を見たいものですなあ』

それを周囲の要望ということにして、その実、『真偽を確かめさせろ』と言っているのは誰の目にも明らかである。

沙龍は、意外にも快諾した。

今後、こういう輩が出てこないように黙らせておくいい機会だ——、と思ったのである。

火雲宮内、天界軍の練兵場である。

しかし、そこで沙龍を待ち構えていたのは近衛府の面々で、本来、皇族の命令しか聞かないはずの彼らがなぜ宰相と結託しているのかというと、よくある癒着である。

「沙龍、断ってもいいんだぞ」

九雷はそう言ったが、沙龍はもうやる気まんまんだった。

「いや、やる。この際、徹底的に叩きのめす」

その宣言が聞こえたのか、宰相の中年男が怪訝そうな目を向ける。

だから、今度は、沙龍はわざと聞こえるように言った。

「元帥、殺してもいいのか？ ああ人数が多いと、手加減もできない」

「……と言ってるが、どうお答えすればよろしいか、宰相殿？」

「不慮の事故は、どちらにも可能性があるでしょう。しかし、随分、自信がおありのようで」

「なるほど、それは肯定と受け取る」

そう言って、一人、沙龍は練兵場に降りていった。

「九雷元帥、貴方には酷かもしれませんが、こうでもせぬと、周囲が納得しないのですよ」

「周囲が、ではなく、一部の神経症を患った官吏が、だろうがな」

「……」

「まあ、お前らが仕掛けたことだ。この際、どうなっても俺は知らんぞ」

「これは冷たいことを仰いますな。貴方があの地上人を保護されているのではないのですか」

「俺が言ってるのは、近衛の連中のことだ。馬鹿な真似をしたな、宰相……、沙龍が本気なら、本当に全員殺すぞ」

「……」

「万一、沙龍が慈悲をかけたとしても――。もう遅いな。追い落としたい相手の技量も読めないようじゃ、このまま宰相やってるのも辛いだろう。俺が引導渡してやる。明日から、もう朝見に出席する必要はないぞ、よかったな、宰相殿」

「……」

一方、沙龍が降り立った練兵場には天界軍の兵士もチラホラ居た。これは『見

届け役』という意味だ。

その中で、一人、沙龍の世話役を買って出た軍人が居た。

「緑麗様、武器はどうされます？ なんでも御用意致しますが」

「刃渡り六十センチくらい、片刃の剣はあるか？」

「と、仰いますと？」

「俗に言う日本刀ってやつだが、なければ近いやつでいい」

「いえ……、あると思います。ここには世界中の武器が収集されておりますから」

その男が兵に持ってこさせ、沙龍に渡したのは少し大きめの、反りのほとんどのない刀だった。

「鈍らではないみたいだけど、名刀ってほどでもないな。えっと……、士官さん？ 将校さんかな？」

「少尉です。自分がかつて、緑麗様の北方軍におりました、杜順と申します」  
なるほど、一般兵とは少し違う。

教養もありそうだし、そこそ腕のたちそうな物腰だ。

「杜順少尉、同じような刀があれば、何本か用意して欲しい。おそらく、これは二、三人斬れば折れるか、使い物にならなくなる。その都度、私に渡してくれると有難い。合図はする。……できるか？」

「分かりました！ お任せ下さい」

「よし、準備はおつけー……」

沙龍は、改めて、自分を叩きのめそうと待ち構えている近衛兵達を見渡した。

相手は十人ほど居た。

さすがに飛び道具を使う者は居なかったが、それでも全員が沙龍を殺す気で向かってきた。

こういう場合は、時間をかければかけるだけ不利というのを沙龍は知っている。

沙龍の教官をしていた董天は、よく、

『沙龍様、雑魚は一人一秒で倒して下さいね』

と、笑顔で冗談のように言っていた。

しかし、それは冗談でもなんでもなく、本当にそれくらいの勢いで倒していかないと、対集団戦ではこちらが疲弊するだけなのだ。

単純計算の上でも、実体験の上でも、沙龍はそれを嫌というほど叩き込まれているので、一人に対する一撃をミスれば、即ち自分の死である、と覚悟した。だから、急所だけを的確に突いて瞬殺した。

近衛の制服全員が石畳の上に伏すまでに一分もかからなかった。もはやこれは武道ではない。

『殺人技』である。

「……よくやった、ジュン。ナイス・アシスト賞をやるう」

「い、いえ！ お役に立てて光栄です！」

実際、沙龍が新しい刀を要求したのは一度だけだったが、それでも、そのアシストがなければ負けていたかもしれない。

「え、永眠させました？」

杜順が息を呑みながら聞いた。

「いや、全員生きてるはずだ。私は手加減はしてないが……。その頑丈な身体と、この刀が名刀でなかったことに感謝するんだな」

沙龍は、苦痛の呻き声をあげている足元の男にそう言い捨てた。

その一幕を、秦帝が見ていたのを、沙龍も、まして九雷も気付かなかった。

「慈悲というのは、力量がなければかけられないし、かけてはならぬものだと私は思う。緑麗はそれをよく知っているようだ」

秦帝は、背後に控える呉謙にそう言ったが、その言葉には多少の嫌味も混じっている。エリートの評れ高い近衛府が、これでは面目丸つぶれである。

「呉謙よ、そなたも思うところがあるだろう。しかし、誰が誰を責められる？先走った宰相は愚かではあったが、『黄龍』を憂いの種とみなしたに過ぎん」

「……」

「だが、その憂いも、摘めばいいというものでもない。私の立場で言う言葉ではないのかもしれないがな」

呉謙は、秦帝の言葉を聞きながらも、沙龍を労う九雷に視線を落としていた。



13 珍客は迷惑で有難い

ドクター天真の診療所兼自宅の一室で。

「俺が思うに、だ」

生ビールのジョッキを空けた陽輝が切り出した。

「秦ちゃん陛下は、沙龍に関心ありあり、だな」

「また、どっからそんなガセネタを……」

天真は、酔っ払いの話など真面目に聞いていない。昼間から押しかけてくる旧友に、これ以上、仕事の邪魔をされたくないの、適当に相手をしているだけである。自分は意中の人の仕事の邪魔をしておきながらの、この態度である。

「ガセじゃねえよ。俺は玄都で一部始終見てきたからな」

「太上老君が、またおふざけが過ぎただけでしょ」

「いや、ありや、庇い方が尋常じゃなかったぜ。変な噂が立つてもおかしかねえくらいにな」

「『変な噂』？」

「新帝様の正妃は地上出身の元将神か？　ってやつさ」

陽輝の戯言を、天真は「アホくさ……」と斬り捨てた。

「大体、秦様が正妃を娶られるのは、まだまだ先の話でしょうに。後宮にも恥ずかしくて行けないくらいの歳ですよ？」

「でもなー、火雲宮でも『元将神の措置には天帝の他意あり』って噂が小声で囁かれてるんだぜ？」

秦帝即位の折りに公布された事実によって、沙龍は玉帝殺しの罪を問われず、一般住民にとってはまさに天界を救ったヒロイン的存在になったのだが、真実を公布するかどうかは、秦帝、宰相、各長官などの出席した連日の会議で最後までもめたらしい。

最終的には、全ての事件の真相が記された玉皇大帝の遺書をなによりも尊重すべしとして、勅命が出されたのだが、どこを回って尾ひれがついたのか、秦帝が沙龍を救済したのはなにか色っぽい思惑があるのでは、という噂になってしまったのである。

「沙龍追放を強固に主張したのは元宰相だつて話だが、アイツも九雷に蹴落とされて、今頃きつと自棄酒食らつてるぜ」

天真は仕事の手を休めて、少しその話に真面目に付き合うことにした。

陽輝には茹でた枝豆を出してやって、自分はお茶の準備をする。

「しかし……、噂はどうあれ、お若いながらに聡明な秦様が、争いごとの原因を作るとも思えません。あの御方は、堅物で有名な晶都の教授陣が誉めちぎるほどの神童でしたからね」

天真が慣れぬ軍医生活を始めた頃、若き東宮は最年少で政治学の学位を取つたと聞いている。

秦帝は、天真の従兄弟にあたる。本来なら、普通の親王として、玉座とは無縁の生活を送るはずだったのを、天真が東宮を辞退したことで、政治の表舞台に立つことになった。急遽我が身に降つたその地位を、本人が内心喜んでいたので、天真も気にはしなかつただろう。政治は、やりたいものがやればいいのである。

しかし、根っから穏やかな性質を持つたあの若き天帝は、おそらく、玉座を望

んではいなかったのだと天真は思っている。

「真面目な奴こそ、目覚めちまったら、突っ走るんじゃないやねえの？」

「己を律してこそその知性であり理性ですよ」

「お前が言うかね、そのセリフ……」

枝豆を口にくわえたまま、陽輝はダルそうにテーブルに顎を寄せた。

「前にもあったんだよなー、先々代の時によー。お前も九雷も知らないだろうが

……」

時の天帝に見初められた緑麗が、近衛隊長に抜擢されたときの話である。

だが、その人事には、いずれ天帝が緑麗を後宮入りさせるといふ目的が見え隠れしていた。当時は事なきを得たが、それが三千年以上経って、また同じような問題に発展するのではないか、と陽輝は思っているのだ。

「全く、なんとかなんねえもんかにえ……」

陽輝はかなり酔っ払っているようだった。いまにも沈没しそうである。

「寝るんなら、そっちのソファで寝てくださいよ。そんな床の上じゃ、邪魔になるんだから」

天真が陽輝のふにやふにやの身体を起こすと、陽輝は自分からのっそりとソファアーに這い上がった。

「あ、そだ。それより、お前、解禁になったとはいえ、あんまり派手に崑崙に入りすんなよ？ 表向き、一般市民の行き来は自由になってねえんだから」

「分かってますよ」

と、真面目な顔で答えたが、その一瞬後に天真の陶醉が始まった。

「でも、命がけの恋つてのがまた、燃えるんですよね〜！ 嗚呼、夜露に濡れた薔薇のように冷たいあの微笑みが、私を狂わせてしまう——」

「勝手にやってる……」

北寒の地——という呼称がまさにピッタリな、天界北端の領土である。

この近辺には、街らしき街はないし、集落と言えるようなものもなかった。人が好んで住むような場所ではないのである。

だが、住めない、というわけではなかった。少し南に行けば軍施設もあるし、

工部府のスタッフがたまに調査に来ることもあった。

ただ、長年、この地の気脈を調整する者がおらず、荒れ放題になっていたの  
で、木佐が初めて鎮江楼に赴いたときは、いまよりももっと酷かった。

「また吹雪いてきたな……」

窓を叩く風に、木佐は憂鬱な顔をした。

木佐のこの一ヶ月の働きぶり、最悪の状態はなんとか脱したが、それでもまだ天候は不安定だった。たまに、とても外には居られないほどの吹雪になるときがある。この吹雪が難物で、木佐の仕事はなかなかはかどらないのだ。吐く息すら凍ってしまう、ブリザードである。

しかし、窓の外は暗い嵐でも、部屋の中は春の陽気くらいには暖かかった。この建物にある暖房器具といえ、旧時代の暖炉だけなのだが、これが意外に重宝する。

木佐は、しばらくここと帝都を往復する毎日を送っているが、別宅とも言えるこの『鎮江楼』の部屋の快適さはかなり気に入っていた。

そう。珍客が来なければ、の話だが。

「うまー！ この筍ご飯、めっちゃウマー！ おかわり！」

当然のように居座って、夕飯まで集っているのは、白帝白虎聖君だった。

木佐はいきなり鎮江楼に現れたこの同僚を、最初は仕事の話で来たのだろうと思いい、他人行儀に接していた。なにせまだ一回しか会っていないし、そのときだって、ろくに言葉を交わした記憶もない。

しかし、長年の旧友に対する態度で押し通す白帝君は、だらだらと鎮江楼に滞在して、いま、こうして夕飯を集っているのである。

「聞くのは三回目くらいになるが、一体、なにしに来たんだ、君は」

「だってー、任地にずっと引き籠もってるのもつままないしー、でも帝都に戻る  
と青龍の旦那が怒るしー、俺って左遷させられちゃったわけ？ なに、この可哀  
想な仕打ち」

「……」

「阿哥アーク（注1）はあの通り真面目に公務員してて相手してくんないしー、阿姐アージュは

旦那が猫っ可愛いがりしてるもんだから連れ出せないしー。玄ちゃんだけなのよ、俺の気持ち分かってくれるのは！」

「別に僕は暇でもないし、君の心情を推し量れるほどの付き合いもないんだが」「ヒドーイ。でも、それが玄ちゃんのだS愛だって、俺は知ってるから！」  
そう言いながらニコニコしてお茶碗を差し出す白帝君に、木佐はもうなにを言っても無駄だと悟った。

「今度から来る時は事前に言ってくれ。……はい、これで最後」と、茶碗に盛ったこの一杯で、お櫃は空になった。

白帝君がさつきからずっと絶賛し続けているこの筍ご飯は、以前の同居人の好物の一つでもあった。少し多めに炊いて冷凍しておこうと思っていたので、なんとか大飯食らいの胃袋を満たす分くらいはあった。白帝君にとってはラッキーである。

料理を作るのは、半分、木佐の趣味だった。以前は、毎日のように料理をしていたが、最近は忙しいのと、自分一人のために作るのが億劫になって、回数が減ってしまった。

しゃもじを持ったまま虚ろに溜息をつく木佐は、自分が疲れた顔をしていることに気付いていないようだ。



「んまんま……、玄ちゃん、いい奥さんになれるなー、美人だし」

「そりやどうも……」

「阿姐と一緒に暮らしてたんだろ？ 絶対、玄ちゃんの方がモテてたんじゃねえ？」

「まあ、そんなのはしよっちゅうだったな……」

「俺は絶対、女の子の方がいいけどー」

「馨は……」

「あん？」

「馨はどういうつもりで、こつちの世界を選んだんだらうな……」

思わず、そんな独り言のような言葉が出た。

なぜ、出会って間もないこんな脳天気男に、いまの自分の本音とも言える言葉を漏らしてしまったのか、木佐にもよく分からなかったが、多分、ここ数ヶ月の忙しさのせいで、急に変わってしまった環境を、いままで振り返る時間がなかったのだから。

そして、食卓に自分以外の誰かが居るといふ風景に、なにかが刺激されたのか

もしれない。

「つて、そりゃ……」

言いかけて、白帝君はやめた。

木佐の眩きが、答えを求めるものではないと分かったからだ。

案の定、木佐は自分の独り言のことなど忘れて、暗い窓の外を憂鬱そうに眺めている。

(うーん、と……)

白帝君は箸を置いて、「ご馳走様」と手を合わせた。

そして、しばらく、もくもくと夕飯の後片付けをして、それを終わると、木佐がパソコン仕事をするかたわらで、ひとりでなにか作業をしていた。

それから、急に「帰る」と言い出す。外はまだ嵐だし、なにもこんな夜中に帰らずとも——、と思うのだが、白帝君はもう玄関を開けていた。

「俺は間違っていないと思うぜ？」

「……？ なんの話だ？」

「いや……、うん、まあ、とにかく、玄ちゃんは間違っていないと思う」

読心したわけではないのだが、白帝君には木佐の心情が分かったのだろう。

そして、これは当人達にとっては深刻な話だとしても、それほど難しくないだろうと思うのだ。

「今度来る時はちゃんと電話するわ、じゃあな！」

「別に来いとは言っていないんだが……」

木佐はまた軽く溜息をついたが、玄関を開けたまま、白帝君の後姿を見送るところにした。

普通なら足取りもおぼつかないこのブリザードの中を、平然と歩いていく白帝君が、後ろ手に手を振る。

「ほー、腐っても四方将神だな。この吹雪の中を……」

「腐ってねえよ！」

遠くで怒る白帝君の声と共に、木佐の顔面になにかが当たった。

白帝君がなにかを投げつけたらしい。雪かと思ったが、違う。

「痛……、くはないか。なんだこれ……」

それを拾い上げると、てるてる坊主だった。

(注1) 白帝君は赤帝君のことを「阿哥<sup>アーゴ</sup> (お兄ちゃん)」、沙龍のことを「阿姐<sup>アーチエ</sup> (お姉ちゃん)」と呼ぶ。

14 沙龍と木佐のそれぞれ

あの後、何度か試してみたが、私が気配を消すと、あのゾンビ共が現れる。

五回やって五回ともそうだったのだから、多分これは偶然ではないのだろう。

つまり、奴らは『土行』が嫌いなのか——？

「はあ……」

地形が変わった森の一部は、砂漠のような大地になっていた。

私は溜息つきながら、なに食わぬ顔でロケットランチャーの弾丸を装填している飛龍を見つめた。

進展がないどころか、これでは「物理攻撃主体パーティー」で雑魚モンスターを退治して歩いているようなものである。

その雑魚モンスターがアイテムや金銭でも落としてくれればまだいいが、そんな愉快的な設定はない。

「あのさー、飛龍。昨夜も言ったけど、仕事内容は雑魚討伐じゃなくて、森の調

「査なんだよね」

「それは聞いた」

「だから、森がなくなっちゃったら、調査のしようがないんだよね」

「それも聞いた」

「……あ、そう」

「だが、森がなくなれば、仕事自体がなくなつて、緑麗も仕事しなくて済むんじゃないのか」

「そーゆう問題じゃないんだつてば」

ああ、知性派アシスタントが欲しい、と心底思った。

現在請け負っている『仕事』は、秦帝曰く『国家機密相当』なので、おおぴらに誰かに仕事内容を話して協力してもらおうわけにはいかない。

しかし、だからといってまるつきり一人でこの仕事に当たっているわけではなかった。

秦帝の配慮で、バックアップを担当してくれている機関もある。

それが、火雲宮の行政システムの一つ、『工部府』だった。ここは国土交通省

のようなもので、技術的な側面から天界の領土を管理している。担当者が気のないおっちゃんで、お役所仕事ながらも、資料の提出などはできる限りしてくれました。

「森の探索は一旦切り上げよう。こつちを入手する方が先決だな……」  
と、小龍が持ってきたラブレターをもう一度見て、地図と照らし合わせてみた。

「ここからなら、一日もかからないし」

しかし、その前に場所を移動する旨の連絡だけは入れておこうと、携帯電話を探す。

……くまなく探す。

が。

「あら……？　ないわ……？　おかしいわ……？」

まあ、一体どうしたことでしょう。

服のポケットやリュックの中まで探したけど、見つからない。

「ウーム、一番考えられるのは、さっきのゾンビと戦ってるときにポケットから

すっ飛んでいって、飛龍のロケットランチャーの前に塵となった、だな」

どうも携帯電話とは相性が悪いらしい。

そういえば、以前もキサさんによく怒られた。

『携帯を携帯してなきや意味ないだろう』

なんて、あの能面顔で……。

「……」

なんだこのアンニュイな気分は、と思つて、やっと気付いた。

いままで、私達はこんなに長く離れていたことがなかったんだ。

思えば出逢つて以来、一週間くらいは顔を見ないこともあったけど、それでも数ヶ月単位で離れたことはなかった。

「キュー!？」

私の肩に停まっていた小龍が急にビクつとなつて叫んだので、私の方がビクツクリした。

「な、なに、どしたの、小龍？」

「沙龍」



「え……っつ？」

急に、元帥の声が聞こえたので、振り返った。

「沙龍、ここだ」

「……!？」

小龍が喋ってる!? と思った〇・三秒後に、ガシツとその小さな身体を掴んで、目の高さに掲げた。

「元帥なの？ いま、どこに、どうやって——」

「俺はいま、水雲宮に戻っている。小龍の意識を借りてるので、あまり長くは話せないが……」

こんな高等テクが出来るんなら、最初から言つてよ。携帯要らないじゃん。

「長くは話せないって、どれくらい？」

「せいぜい、二、三分だな」

「分かった。……ごめん、私、携帯なくしちゃったみたいで」

「だからか。いや、無事を確認したかっただけだ。それと、用事はもう一つある。西華から『蟠桃会』の招待状が届いた」

「西華？ 蟠桃会？」

「西王母主催の園遊会のことだ。仙界、天界の主だった連中はみな集まる。一週間後だが、もしそれまで水雲宮に戻らないつもりなら、沙龍は、そこから直行しろ。場所は黒焰が知っている」

「え？ 私も行かなくちゃいけないの？」

「欠席してもいいが、それだと、各方面から睨まれるぞ」

「色々ややこしそうだね……、うん分かった、行くよ。でも、その前に私、行きたい所があつて……」

「どこだ？」

「うーん……」

と、一瞬迷ってしまった。

この情報をくれたのは秦帝個人で、それを言っているのか、分からなかったからだ。

この場合「秦帝が」「個人的に」というところにポイントがある。

しかし、私がこの世界で一番信頼している人に、隠しごとをするわけにはいか

ない。また、したくもなかった。

だから、漢字が読めないフリで誤魔化した。

「キンラントケツ……？」

「金鬘斗闕だって？ あそこがどういう場所か知ってるのか？」

「うん、大体知ってる。でも、行かないと多分私の仕事も終わらない」

「あそこになにがあるっていうんだ？」

「玉皇大帝のレポートは、ところどころ大事な部分が抜けてるんだ。秘密保持の意味もあって、バラけて保管したってことらしいんだけど。それで、その抜けてる部分の一部が金鬘斗闕にあるらしい」

「なるほど、最も信頼できる人物に預けたというわけか。しかし、あそこは男子禁制だ。霊獣とはいえ、黒焰も入れないぞ」

「そうなの？ ……分かった、じゃあ、自力で行くよ」

「そう簡単に行ける場所でもないんだが。まあ、お前なら大丈夫だろう」

「……？」

なんだろう。いまの含みのある言い方。

「じゃあ、行ってもいいんだね？」

「ああ、気を付けて行って来い。……だがな、沙龍」

「……なに？」

「仕事に夢中になって、俺を放っておくと、後が怖いぞ」

「え？ ……え？」

これは、冗談なんだろうか。

いや、冗談を言うような人じゃないから、多分、本音なんだろうけど、こういうことを口にする人だとは思わなかった。

もしかして、怒ってるのか……？

確かに、ちよつと好き放題やってるかな、とは思ってるし、ここ数日連絡もサボっていたんだけど……。

“毎日連絡して来い”

とは言わなかったけど、実は元帥的にはそれくらい当然で、やっぱ怒っていると……？

だとしたら、ヤヴァイ。

極甘な恋人が怒ったときの対処方法なんて、私は知らない。

「む、夢中になってないし、放ってるつもりもないけど……」

「フ、冗談だ。では、西華で逢おう」

そ、それなら、最初から冗談ぽく言って欲しい……。

沙龍との通話を終えると、九雷は来客に向き直った。

「……ということだが、お前は どうする？ 真武君」

「僕も、西王母には借りがありますから、勿論行きますよ」

最高神以外は事実上欠席不可の園遊会である。

四方将神といえど、欠席は許されていないのだ。

「本来は、そんなに身構えるような会でもないんだが、今回は秦帝即位後初ということもあって、野次馬も多いだろう」

「おまけに、この無茶な話ですからね……」

木佐は久しぶりの水雲宮のテラスに立って、コーヒーを飲んでいた。

曹昌から、自分の留守中に沙龍が訪ねて来たと聞いて、水雲宮にやって来たのである。

しかし、肝心の沙龍はおらず、その保護者と鉢合わせた。

九雷は、いい機会だ、と勤務中の赤帝君も水雲宮に呼びつけ、二人に玄都での話をしたのだ。

太上老君に内々に取り付けた、とある件について、である。

「西華に四神が揃うのは実に三千年ぶりだな……」

赤帝君は、すぐに戻るつもりなのか、椅子に座らず、ドアを背にしている。

「白帝君はちゃんと来るんですか？」

あのいい加減な男のことだから、本来欠席不可の会だとしても、気軽にサボりそうだと木佐は思った。

「沙龍が連れて来ることになるだろう。金鑿斗闕から西華に向かうには、あの西域を通り抜けなければ辿り着けない」

「それならいいんですが……、しかし、太上老君はいいとしても、泰山府君の方は随分無茶な要求しますね？ これも僕らの仕事の一環、ということになるんで

すか？」

木佐は、九雷がまとめた概要を読みながら仕事口調で言う。

「報酬は出ないがな」

と、九雷は苦笑した。

「しかし、九雷元帥。四神府として、泰山府の実験に協力するのは構わないが、これでは緑麗様を騙していることにならないか？」

赤帝君が非難の声色をにじませて言った。

「それが問題あるのか？」

「ないというなら、私はあなたの一切を疑うが？」

「……」

その険悪な空気に、木佐は黙った。

互いの性格からしても、仲良くなれる二人でないのはなんとなく分かるが、それでなくとも、この二人には長年の確執めいたものがあるらしく、白帝君などはもう諦めているらしい。

「しかも、この実験の成否は緑麗様の行動一つにかかっている。まるで、博打

だ。緑麗様がなにもしないなら泰山府君ががっかりするだけだろうが、もし失敗すれば、仙界の恨みを買って、各地で被害も出るかもしれないというのに」

「結果が読めないのなら、確かにそれは博打だ。だが、俺は博打をするつもりはないぞ、赤帝。お前は、自信がないからそう言うのか？ もしそうだとしたら、『南』は代わりに奏欽殿そうきんにでも頼むことにしよう」

「……」

赤帝君は、表情こそ変えなかったが、九雷の言葉に怒ったのが木佐には分かった。

「それとも、自分以外を信頼してないからそう言うのか？ だとしたら、『俺達』のどこに不安要素があるのか、教えてもらおうじゃないか」

ますます険悪になった空気をなんとかするのは自分しか居ない、という損な性分で、木佐は口を挟んだ。

「四神相応之地——」

「……？」

「西王母がかの地を自分の王国に選んだのは、つまり、そういうことでは？ 帝



都の東西南北を模した地形ならば、僕らの力が裏切られることもないでしょう。違いますか？」

「……そうだな」

赤帝君も木佐の遠まわしの説得に、少し力を抜いたが、

「私はこれで失礼する。仕事に戻る」

そう言っつて、出て行ってしまった。

残された木佐は、ホツとするような、今後の厄介事の種類が分かったような、そんな心境である。

九雷は気にもしていない様子だった。いつものことなのだろう。

「なんでわざわざ挑発するようなことを言うんです？」

木佐は、九雷のことをそれほど苦手にはしていない。

彼の言動には共感できる部分もあるからだ。

「さあ……。面白いからかな」

「……」

こういう一面を見ると、また認識を新たにするのだが。

西部劇に出てきそうな断崖絶壁の手前で、ひとまずパーティーを解散させた。

「ありがとう、黒焰。ここまででいいよ。元帥の所に戻って」

「御意。どうかお気を付け下さい、緑麗様」

「飛龍もね。ここから先は男子禁制らしいから」

「……分かった」

しぶしぶ頷く飛龍は、黒焰虎とは反対方向に飛んでいった。

そして、最後に残ったのは、肩に乗せているペットである。

「小龍……、お前は……」

「そういや、この子は『どっち』なんだろう？」

両手に持って、逆さにしてみた。

「ムキュ!？」

逆さ状態が辛いのか、小龍は多少暴れているが、私は我が目を疑いながらも、

じっくり確認した。

「……ない」

「ぐる〜」

「『どっち』もない。なに、この子、無性……？」

霊獣にはちゃんと性別があるという。

天界の龍族だって、龍の遺伝子を持っているだけで、人型の方が本来の姿だ、と飛龍が言っていた。

ということは、小龍は霊獣でも龍族でもないってこと？ 龍族の亜種？

それにしたって、性別がない生物というのは、単細胞生物くらいしか居ない。

「ぐえっ……」

「……ああ、ごめんごめん」

真っ青になった小龍を慌てて元に戻してあげた。

この子は普通に食事もあるし、グータラ眠るから、ロボットってわけでもなさそうだけど、正体不明のままじゃ、なにかあったとき困る。

今度、ドクターにでも聞いておこう。

「無性……ってことは男子じゃないんだから、一緒に連れてってでもいいってことだよな。よし、小龍。お姫様に会いに行くぞ——」

「うきゅー」

『お姫様』という言葉が分かったのか、小龍は照れるようにニコニコしている。

そして、改めて、怖いほどお約束な断崖絶壁を見上げた。

地図上では、この崖の、雲のかかった見えない部分に『金鑾斗闕』があるらしい。

ということとは、もうこの一帯は『仙界エリア』で、私は境界越えをした覚えはないのだが、万が一、居るのか居ないのか分からない巡査さんとかに問い詰められても、私は工部府発行の仮IDを持っているので、違反キツプ切られることもないだろう。

「さて——と」

ロープウェイもヘリポートもないし、どうやら、崖をよじ登る以外に、金鑾斗闕に行く道はないらしい。

でも、そんな悠長なことやっつけられっか。

『これ』は久しぶりだ。

蝕まれた身体では撃つことのできなかつた、風林直伝の『泥酔拳』最終奥義。黄龍の力を借りて、自己流に昇華させたこの技の威力は、日本のこじんまりした家屋の一つくらいなら簡単に破壊できる。

この一撃を、あの遙か上空の、雲の辺りを目掛けて撃てば、嫌でもそこから人が出てくる——ことを祈ろう。

そして、その人達があまり好戦的でないことを祈ろう。

「……よし」

身体を巡る全ての『氣』を拳に集中させ、いざ、第一歩を踏み出し——。

「秘拳ッ、——ほげッ！」

そのとき、痛烈な一撃が私の後頭部を襲った。

「待たんかいッ！ このドあふお——ッ！」

打撃ヒット、——65536°。

沙龍ハ力尽キタ。

「い、痛かった……。ものすごく痛かった……。死ぬかと思った」

ズキズキする後頭部をさすりながら、大地の上に胡坐をかいて、九玄娘々を見上げる。

が、なんとなくそれだけのことをした自覚もあつたし、九玄娘々の恐ろしいまでに吊り上がった目を見ると、文句は言えなかつた。

更に、娘々の手にした一トンハンマーがドスつと地上に置かれたとき、その重さの真実味が嫌というほどあつたので、これで叩かれるのは二度とゴメンだと思つた。

「全く——、金鬘斗闕に必殺技を叩き込もうとするとは、なんちゅー無謀な。一体、なんの恨みがあつてそんな真似を」

「いや、恨みとかじゃなくて。沙龍チャンの必殺技で金鬘斗闕の一角が破壊、その犯人を捕らえるべく宮殿から人が出てくる、沙龍捕まる、金鬘斗闕に連れていかれる、絶壁登らず楽しんで主とご対面、事情を話して万事オツケー！ ……って

筋書きだったんだけど。……ダメ？」

「くくくくッ！ 本当に行き当たりバッタリだな、お前は！」

「す、すみません。……にしても、もう少し手加減してくれても……」

と、たんこぶになつてる後頭部をもう一度触ってみた。

あ、さつきより大きくなつてる。

「バカモノ。本当にやってたら、いくらお前とはいえ、りゆうきつ竜吉 公主様に殺されてたぞ。私に感謝しろ」

「……はあ」

「それで？ 金鬘斗闕になんの用があるんだ、沙龍」

娘々が差し伸べた手を取って立ち上がると、娘々の隣ではあの綺麗な青鸞が羽根を休めてくつろいでいた。

そういや、この前、似ても似つかない鸞にムカついたことを思い出したぞ。名前を聞いておくのを忘れたのが、なんとも心残りだ。

「あー、ちよつと、竜吉公主に挨拶でも、と」

「……？」

金鑾斗闕に住んでいる仙女様の名前が竜吉公主。

その竜吉公主が玉皇大帝の妹で、『昊ちゃんレポート』の一部を預かっているはずだ——と教えてくれたのが秦帝である。

更に、緑麗はこの公主と知り合いだったらしいから、私が挨拶ぐらいしてもおかしくないはず……なんだけど、九玄娘々は、いま一瞬、妙な顔をした。

「……お前が？」

「う、うん？　なんかおかしい？」

「いや……、自分から行く、と言うなら、まあ連れて行ってやらんでもないが……」

「んじや、お願いします」

「そうか……。しかし、この崖は実は見せ掛けでな。実際の金鑾斗闕は更に遙か上空にある。結構、道のりは長いぞ？」

「まあ、行かなきゃいけないことに変わりはないわけだから、頼むよ、娘々」  
「分かった。なら、青鸞の後ろに乗れ」

と、娘々が言うので、初体験の鸞の騎乗に子供のようにワクワクしながら、乗



り込んだ。

「なにが嬉しいんだ？」

「鸞に乗るの、初めてなんだ。それに美女とタンデムって嬉しくないはずないじゃん」

「……。沙龍、一つ聞くが、お前、別に両刀じゃないよな？」

「う？ うん、多分、『そのケ』はないはずだけど……？」

そんな会話の中、すいすいと上昇していく青鸞がずっと黙ったままなので、聞いてみた。

「この子は喋らないのかー」

「いや、人見知りか激しいんだ。知らない奴の前ではほとんど口を開かない」

「ふーん……。私もやっぱ自分の霊獣、欲しいなー」

天界に住んでみて、そう思うようになった。

徒歩で行ける距離は高が知れてる。水雲宮Ⅱ帝都間だって、歩けば二時間はかかる。

黒焰虎は元帥の霊獣だから、そんなにしょっちゅう私が個人的に使うわけには

いけないし、陽輝大将が使ってるようなバイクは五行稼動らしく、私には動かせない。

「お前には飛龍が居るだろう」

「飛龍は霊獣じゃないじゃん……」

一時間くらい、そんな他愛のない話をしながら上昇して、そろそろかな、と思ったので聞いてみた。

「で、あとどれくらい？ もう見える？」

「いや、まだ十分の一くらいだ」

えっと……、十分の一デスカ……？

つうことは、あと最低でも九時間この状態デスカ……？

「あ、あの……、娘々？ トイレ休憩とか、ハラヘツタ場合とかはどうすればよろしいんで？」

恐る恐る聞くと、娘々が笑った。

「そう言うだろうと思ったよ。だから、結構遠いぞ、と念を押しただろう」

「『結構』ね……、うん」

天仙界住民達の、程度を表す言葉の早見表でも作つところかな……。

結局、半分ほど昇った所で、休憩することにした。

丁度良い大きさの岩棚があつて、ここでなら一泊くらいはできそうだった。

私の体内時間ではそろそろ夜も更けてる時間で、眠気もほんのり感じてきている。

「疲れたのなら、数時間眠っていいぞ。別に私も急ぐ用事はない」

娘々がそう言うってくれるので、遠慮なく横になった。

が、いざ寝ようとして眠れるものでもない。

岩を背に、スキットルの中身をチビチビと呑んでいる娘々の綺麗な鼻筋を、なんとなく眺めていた。

「そういえば、前にさ……」

ずっと聞こうと思っていたことがある。

娘々がたまに見せる、優しくも悲しげな瞳と、あのととき言った言葉。

『今も昔も、私はお前に災いしかもたらすことができぬ。……許せ』

あれがずっと謎だった。

九玄娘々と緑麗は、一緒に居た時間こそそんなに長いわけじゃないが、親友同士だったはずだ。

なのに、『災い』という言葉が出てこなければならぬような、なにかがあつたんだらうか……？

「そうだな、そろそろ潮時かもしれん……」

毛布を身体の周囲に引きよせて半分起き上がった。

娘々の昔話を聞くために。

三千年前の金鬘斗闕で、竜吉公主は激怒していた。

天仙界を俄かに騒然とさせた『将神決起』の第一報は、竜吉公主にとっては寝耳に水だったのである。

噂話くらいは流れてきても、天仙界の中央で起こっている内部事情など、やんごとなき公主様は知る由もない。

しかし、九天玄女はある程度知っていたはずだ。

それに対して、怒っているのが半分ある。

「なぜじゃ……ッ!? なぜ兄上と緑麗様が争わねばならぬ!?!」

気性の激しさでは玉帝に勝るとも劣らぬこの公主の前に、若き九玄が一人、片膝をついている。

周囲には多くの侍女達が控えているが、竜吉公主の怒りに触れるのを恐れて誰も近付かない。

「心中、お察し申し上げますが、玉帝陛下の為政に崑崙の仙道達が不満を抱いているのも事実です」

型通りの九玄の態度に、竜吉公主はそばにあった花瓶を投げつける。それは、九玄の額の横に当たった。

「黙れ、九玄！ そなたになにが分かる！」

周囲の侍女達が更に怯える中、それでも九玄は姿勢を崩さず、流れた血もぬぐわずにいる。

「現在、将神は杏林会の手引きにて、崑崙に潜伏しております。このままでは、天仙界の全面的な戦争になるは必須。それを阻止するためにも、私は将神捕縛に向かいます」

「なんじゃと……っ!？」

今度は、台座ごと投げつけてきそうな公主に、九玄は言い足した。

「西王母様の命ですので」

「……もう、遅いというのかつ。母上は、緑麗様を兄上に引き渡すおつもりか！」

「それが、いまとなつては最良の道かと……」

「なんと……、愚かな仙道どもめがつ……。天界内の争いであれば、まだ緑麗様を救える余地があつたものを……」

「いえ、一旦、叛旗を翻したのならば、崑崙の仙道がなにをしようと、将神の罪は明白。私は、ここを戦場にせぬために、尽力致すまで——」

「明白、か——。謀反は第一級の罪……、なんとということ……」

竜吉公主は椅子に沈み込むように、崩れた。

公主にとっては、最愛の二人が殺しあうことになったのだ。

激怒の末の、放心である。

「九玄……、ではせめて、そなたは見届けて参れ。そなたの目でこの無意味な争いの顛末をな……」

「御意——」

九玄は、竜吉公主が慕っているその二人に会ったことはない。

一人は天界に住んでいる者ですらその大多数は顔を拝んだことはないはずだ。

天帝陛下に拝謁できる者はごくわずかである。

仙界の住民では、玉皇大帝に会ったことのある者など、西王母と竜吉公主くらいしか居ないだろう。

そして、もう一人は、最高神に次ぐ『一級神』にランクされている将神である。こちらにも滅多に会えるような人物ではない。

そんな、天界のトップに居る二人が戦争を始めたというのである。多くの血が流れるであろうことは、このとき、九天玄女も覚悟はしていた。

「しかしな、実際に会ってみた将神は、拍子抜けするほどに緊張感のない奴だった。私の気負いは、全て殺がれたよ。杏林会のアジトで、奴らときたら、宴会して麻雀してただけだったからな」

フツツと笑う九玄娘々は、その当時の風景を思い出したのだろう。

娘々は、緑麗の話をするときは、いつもこんな顔をする。

苦笑気味に、もうどうしてくれよう、というような顔だ。

「でも、実は、それが緑麗の本当にやりたいことだったのかもしれない」



「麻雀が？」

「いや、そういう、ごく当たり前の日常が、ってことだ。緑麗は最初から血が流れることを望んでなかったし、本当に、自分が人生楽しむことしか考えてなかったような気がする。その脳天気にあてられて、私は緑麗を捕縛しに行ったというのに、逆に感化されてしまって、しばらくはわけの分からぬような楽しい日々を過ごしてしまったよ」

「へえ……」

「徹マンして、酒呑んで、温泉に浸かって……、本当に、崑崙になにに來たんだろうな、あいつは。とはいえ、私も私だ。己の職務を忘れて、一緒になって遊んでたわけだからな」

「ふーん」

「緑麗には三人の従者というか、元部下が居た。軍籍を捨ててまで緑麗についてきたわけだから、きつと相当慕ってるんだろうな、と最初は思ったんだが……」

「違うの？」

「緑麗の普段の生活無能っぷりを見てると、なるほど、と分かったよ。あいつは

世話を焼く者が居ないと食事すらしないんだ。酒呑んでばっかで。きつとあの三人も、それを見捨てられず、崑崙までついてきたんだろうなー」

そんな娘々の話を聞きながら、私はそこまで無能じゃないぞ、と思った。

お腹がすけば缶詰くらい食べるし、パンツくらいは自分で洗う。

「その三人は、緑麗とは長い付き合いだったらしい。なんでも、緑麗が北方軍大将を務めていた頃からの部下だったそうだ」

「……私、もしかしたら、そのうちの一人に会ったことあるかもしれない」

「フム？」

「あ、いや、いいんだ。娘々の話の続きを聞きたい」

娘々は、バーボンの入ったスキットルをまた一口呑んで、口を拭った。その仕事草がやけに色っぽい。

そして、またポツポツと話し始める。

「私が緑麗を止める立場から、協力する立場になってしまったのは、結局、緑麗に惹かれてしまったからだ。そして、なによりも知りたかった。緑麗が一体、なにを望んで、なんのために、なにをしようとしているのか——。だが、結局、最

後までそれを知ることにはなかった」

『最後』。それは、つまり、『緑麗の最期』だ。

いまは、私も九玄娘々も一通り知っている、緑麗の『本意』。

緑麗は本当なら決起などしたくなかったのだ。それは、間違いない。

しかし、麒麟を確実に倒すために、玉帝と腹を合わせて、仕方なく本気の芝居をすることになったのである。

だから、それを誰にも告げることができなかった。

「ただ、当時うすうす感じていたのは、緑麗は、本音の部分では天界も仙界もどうでもよかったんだろう、ということだな。緑麗が大切にしていたのは、そこに生きている自分の友人と情人だけだったんじゃないか——」

「ああ、そうだね。それはそうかもしれない……」

私は、玉帝と見えたとき、一度だけ緑麗の記憶を自分のものとして再現されたことがある。

あのとときの奇妙な感覚は、なんとも言い難い。

覚えていない頃の自分が映っている大昔のビデオを見ているような、酔っ払っ

て記憶が飛んでるときの言動を見せつけられているような、でも、確かに自分だと分かるような、そんな感じである。

そして、そのとき分かったのは、おそらく、緑麗の本音中の本音で、これは多分、娘々も知らない。

娘々が言ってるように、天仙界云々よりも、恋人や親友の住む世界を護りたかっただけ、というのも本音の一つだ。

でも、そのもっと奥の部分には緑麗の暗いエゴがあるのだ。

緑麗自身は気付いていなかったのかもしれない、本音中の本音。

それが、私には分かる。

「まあ、確かに、カッ飛んでるよね、あの人は」

と、人事のように言った。

「お前も負けてないと思うが……」

「いや、私は小市民だよ」

だから、私には分かるのだ。緑麗が、地上への転生を自ら望んでいたという、本音中の本音が。

娘々の昔語りは、しばらくは楽しい話が続いたが、段々と表情が陰しくなつて、問題の箇所へと近付いていく。

いままでの優しい思い出語りが一変して、後悔と苦痛だけの話へ。

「そうこうしているうちに、私は崑崙の防衛隊長の任を解かれた。西王母様から見放されたんだ。でも、その実、西王母様は、私の枷を外してくれたのかもしれないとも思っている。……そして、私は緑麗の叛乱軍に参戦した」

「やっぱり。一緒に戦ったんだね」

最初に崑崙の屋敷で話してくれたときは、はっきり教えてくれなかったけど、きつとそうなんだろうと思っていた。

この二人にはガテン系の友情がよく似合う。

「私は、緑麗を勝たせるためだけに戦った。天界軍の将兵達を何人斬ったのかも覚えていない。しかし、いまにして思えば、緑麗はそんな私を苦々しく思っていたに違いない。なにせ、あいつはこの戦いを早く終わらせたかったのだからな」

「……」

「そして、最後の戦いを前にして、私は、暴れるだけ暴れて討ち死にするつもり

だった。しかし、その前に私の命運は尽きたのだ」

天界軍の特殊任務作戦部隊、通称「特務」が九玄の所在をつきとめたのは、タイムリミットぎりぎりだった。

このときに九玄が捕まらなければ、翌日、叛乱軍は火雲宮へ総力戦となる特攻を掛ける計画であったのだ。

官軍の総大将を務める九雷は当然、緑麗が決起した経緯を知っている。本人に告げられたからだ。

なのに、九雷が緑麗を討つ側に回ったのは、その謀反を事前にやめさせることが出来なかったので、せめて投降させようと思ったからである。

それも、執念で、である。

戦死は許さない。だから、その前に必ず緑麗の居場所をつきとめなければならぬ。

それが、九雷の思いだった。

勿論、このときの九玄はそんなことは知らない。

だから、九玄は、自白剤の打たれた状態で初めて見た倣岸なこの男を、その後もずっと好きにはなれないのだ。

「緑麗はどこに居る？ と、聞いても答えぬだろうな。しかし、一つ教えてやろう。貴女が黙秘を続ける限り、緑麗は苦悩し続ける」

「どういう意味だ？」

「このバカげた闘いを終わらせたいのなら、俺の言うことを聞いた方がいいということだ。いま現在、飛び火している戦闘は、緑麗の思惑外で起こっているからな」

「……」

「崑崙の防衛隊長自らが将神の謀叛に参加するとはな。これが露見すれば、崑崙もさすがに終わりだ」

「私に、緑麗を売れ、と言うのか」

九玄が覚えているのは、九雷の冷えた言葉だけである。

意識朦朧とする中、満足に動くこともできない。

「そう聞こえたか？」

「……」

「ならば、選んでくれ、九玄殿。貴女の賢明な判断で、無駄な犠牲も減るし、崑崙も助かるだろう」

「私に、崑崙と緑麗の命を天秤にかけさせる気か」

「普通なら、貴女は緑麗を売ったりはしないだろうが……」

「“普通なら”？」

つまり、薬を打たれていなければの話か、と九玄は思った。

が、それは違う。

『この叛乱が茶番でなければ』という意味である。

しかし、九雷もまた、九玄に真実を告げることはできないので、代わりに、言葉巧みに落とすしかない。

「俺には緑麗がいま考えていることは分かる。緑麗は、戦いが長引くことを望んでいない。もう、終わらせてやれ、九玄殿。貴女の決断で、緑麗を救えるはずだ」



「私が……緑麗を、救える……？」

「貴女が護りたいものは、武人としての誇りか？ それとも、緑麗の志か？」

「私が……、護りたいのは……」

「薬漬けにされて、まともな思考ができていなかったとはいえ、私はその九雷元帥の言葉に陥落した。当時、緑麗は帝都の北側、つまり火雲宮奥殿の裏側に当たる山腹に隠れていた。その場所を告げてしまったんだ。そして、緑麗はその後すぐに赤帝君に身柄を拘束されたと聞いた」

九玄娘々は敵の手に落ちて、緑麗を売った。

そのたった一行で済まされる行動が、彼女の三千年の後悔の原因であり、私を見るたびにたまに見せる憂いの瞳の理由なのか。

決して忘れることのできない、取り消すことのできない、自分の犯した罪。

「私は、武人として一番恥ずべきことをして、そのせいで失いたくないものを失った。これほど、間抜けで不幸な話はないだろう……」

「娘々……」

「これで分かっただろう、沙龍。あのとき、お前の命運を決めてしまったのは私だ」

あのときはああするより仕方がなかった、早く忘れた方がいい、とおそらく色んな人に言われ続け、それでもきつと忘れたくなかったんだろう。

それは、きつとこの人が、緑麗のことが好きだったからなんだ。

多分……、ただ、それだけなんだ。

「もし、あのとき、私が黙秘を続けていれば、違った結果になっただろう。緑麗は死なずに済んだかもしれない……」

「でも、それじゃ……」

麒麟は倒せず、最悪の結果になったんじゃ……？　と思っただけど、それを言うてもしようがないと思った。

こういうのは理屈じゃないし、娘々が三千年間後悔の日々を送ってきた事実が消えるわけでもない。

「だから、もし、もう一度、お前に会えるなら、この罪を裁いてもらおうと思っ

ていた……」

なんてストイックな、と言いかけて、それもやめた。

かける言葉が見つからない。

「思っていたんだがな、沙龍！」

「え……？」

よく見れば、娘々の目が据わっている。

あ、スキットル、空になってますね。

しかも、これ、確か三本目くらいですね。

「よく考えてみりや、お前に騙されてたのは私じゃねーか。言えない事情があつたにせよ、麒麟と黄龍を騙すため!?! なんだそりや!?! 奴らはそんなに賢しいのか!?!」

「い、いや、それを私に言われても……」

「それに、腑に落ちない点が一つある。九雷元帥はおそらく、大体の真相を知っていたんだ。陽輝大将もな。つまり、緑麗は、あの二人にだけは真実を話していた——。なのに、なぜ私には話してくれなかったんだ!?!」

「う、うーん？ と、それはよく分かんないけど、真実を知る人が増えたら、それだけリスクが増える……ってことなんじゃないの？ 神獣がどこまで敏いのか分からないけど……」

「大体、おかしいぞ、お前は。聖魔剣だって、フツー、あんな気軽に己の命綱を人に預けるか!? しかも、まるつきり手入れがなっちゃいないし……」  
「なんだか、だんだんクダ巻きモードになってきた。」

「それに、人が国士であがるうってときに、お前ときたら、ピンフであがりやーがって！ 舐めとんのか！」

話がどんどんズレてくし……、ダメだ、こりや完全に酔っ払いだわ。

「い、いや、だから、それを私に言われても……、でもさ、娘々？」

「……なんだっ!？」

「緑麗として発言するなら、確かに私こそ、多くの人を欺き、多くの血を流させた張本人だと思う。結果、麒麟は倒せたかもしれないけど、果たして、それが最良の方法だったのかは分からない」

「……」

「そして、沙龍として発言するなら、私もまた、緑麗と玉帝に欺かれた一人だ。ムカつくような呪いをかけられ、失った物も決して少なくはなかった」

「……」

「それでも、私は誰も恨んではないよ。どころか、結構感謝している。おかげでいま、世界は消滅してないし、私達は五体満足でここに居る」

「……」

「だったら、後は人生楽しむだけじゃないの？ ……って陽輝大将も言っただよ」

「……ぐう」

「緑麗の分と、みんなが負った疵の分を……、これから……」

一緒に楽しもうよ。

と、眠ってしまった娘々に言ったが、多分聞こえてないだろう。

翌朝、やけにサツパリした顔の九玄娘々に叩き起こされ、少しゲンナリする数時間のドライブで、やっと目的地に辿り着いた。

娘々が趣味で取りつけたという派手な音のクラクションを鳴らしながら、金鑾斗闕の門扉に乗り付けると、そこにはズラッと女官を従えた女性が立っている。

「竜吉公主様、御自らのお出迎えだ。心せよ、沙龍」

娘々が、ソツと耳打ちしてくれた。

事前に九玄娘々が連絡でも入れてくれたんだろうか。それとも、このクラスの公主様になると、周囲で起こっていることくらいお見通しなんだろうか。

えーと、『初次見面（初めまして）』じゃ失礼になるのか？

なんて考えたけど、しばらく口あけたまま、馬鹿面晒してしまった。

「……」

なんつーか、あまりの美女ぶりに、声も出ない。

九玄娘々に最初に会ったときも同じような状態になったけど、こっちはタイプがまるで違う。

噂に名高い『純血の天女』そのもので、深窓のお姫様を絵に描いたような――。

「ご苦労であった、九玄」

「御意」

「お待ちしております。わらわの緑麗様――」

そう言うと、竜吉公主は大輪の牡丹のような微笑を見せた。

これは、さすがに眼福で……。

ん……？

ちよつと待てよ？

「『わらわの』ってどういう意味？」

隣の九玄娘々に小声で聞く。

「『わらわ』（注1）というのは、高貴な女性の第一人称で、『の』は所有を表す助詞……だな」

「いや、そういう生真面目なボケじゃなくて……」

そうこうしているうちに、小柄な（といっても私よりは背は高かったけど）竜吉公主様が、その白い手を伸ばして、私に抱きついてきた。

「ラテン系挨拶……？」

これまた九玄娘々に小声で聞くと、娘々は苦笑していた。

なるほど……。

元帥がやけに強調して『お前なら』大丈夫だろう、と言った意味が良く分かった。

金鑾斗闕到着後、すぐに宴の席に連れて行かれての、大判振る舞い。

豪華な料理が目の前に並べられ、鯛やヒラメ……じゃなかった、美姫達の舞い踊りを見せられ、かたわらには張りつかんばかりの竜吉公主様が御自らお酌を――

「お会いしようございましたわ、緑麗様」



このキラキラうるるんの瞳は、明らかに恋する女性のもので、間違ってもガテン系の友情の眼差しではない。

さすが、あの玉皇大帝の御妹。兄はアレで、妹はコレなのね……。

同じ血を分けたドクターが、非常にまともに思える……。

「わらわがこの三千年の間、どんな想いでいたか。胸の張り裂けそうな——」

「胸焼けしそうな、の間違いでは？ 酒浸りだったんだし」

「やっと天界にお戻りになったと聞いて、お待ちしておりましたのに、ここには

一向にお顔を見せに来て下さらぬし——」

「やっぱ来たくなかったんじゃ？」

「もうわらわのことなど、忘れておしまいになったのかと——」

「まあ、記憶がないんだから、忘れてたってことになるわな」

「……」

「……」

「……」

「ええい、やかましいぞ、九玄！ さつきからわざと聞こえるように独り言を言

うでない！」

竜吉公主様が、そばにあった皿だの酒甕だのを娘々に投げつけるが、九玄娘々も慣れたもの。それをヒョイヒョイかわしている。

「ささ、緑麗様、もっとお召し上がりになって」

と、竜吉公主が勧める仙酒を手で制して、そろそろ本題に入らねば、と話を切り出した。

「あのですね、公主様。このようなもてなしをして頂けるのは非常に有難いのですが、私は遊びに来たわけではなく……」

「……？」

「ここに保管されているはずの書類を一時、お貸し願えないかと」

「ああ……、もしかして、兄上が押し付けていった、あれのことかしら」

公主が目をクルッと動かしながら言った。

「多分、そうです」

「いつか自費出版するつもりなんだけど、臣下に見られると恥ずかしいからって言って置いていった『恨みつらみは百倍に―夜桜必殺シリーズ激闘編―』？」



「そんなことは承知の上。わらわとて、世情は知っております。兄上の冥福はもう充分祈ったゆえ……」

(ぶつちやけ、死んだ兄貴はどうでもいい、と)

「あゝ……、し、しかしですね、いまの私は、自分で言うのも情けない、こんなミニマムサイズでして」

「そのような些細なこと……。わらわは外見など気にさせぬ」

(いや、大いに気にしてくれ。頼む)

「わらわは身も心も、緑麗様のもの。どうか想いを遂げさせては——」  
と、いきなり押し倒された。

「わあああゝッ！ 待って、頼む！ タイム！ ……娘々！」  
すがる思いで九玄娘々を見ると、

「……頑張れ、沙龍」

(こ、こいつくくッ、なに一人で刺身つまみながら酒呑んだよ！)

「緑麗様……」

「わあああゝ、クラ——」

「……」

しまった……。

『九雷元帥の名前は絶対に出さないこと』

娘々にそう釘を刺されてたんだっけ。

「クラ……?」

「い、いや、クラゲが食べたい」

「クラ……?」

「だ、だめ? えーと、じゃあ、クライアントがせっついてきて、時間があんまりないんで……」

「クライ……?」

(だっ、だめだ! 墓穴掘った!)

「いま、なんと仰いました? 緑麗様——」

「い、いや……」

「もしや……、わらわが死ぬほど大嫌いな、あの、尊大にして執念深く、嫌味で傲慢で腹黒で、人を超くバカにしまくった、憎つくき無礼者の男の名前を：

……？」

「あ、あわわッ、違ッ」

（う、うわあ、相当嫌ってるわけですね……。なんか、その形容詞、全部当たってる気もするけど……）

「ク、クライシス・マネージメントって言葉があるんですが、まあ、要するに『危機管理』ってやつですね」

「それが……なにか……？」

「災害に対する組織の管理対策といましようか……。実は、私、ここへ来る前に金鑿斗闕の危機管理体制が万全かどうか、秦帝直々に調査依頼を承りまして、もし不備があれば、火雲宮の費用で最新警備システムの導入を検討するとの：

……」

「こんなえー加減な嘘ついて、しかも秦ちゃん陛下の名前まで出して、不敬罪とか詐欺罪にならないだろうか、私……。」

「まあ、そんなお話が？ 確かに、ここは旧式の建築物が多く残っていて、オール電化も行き渡っていないのですが……」

(ホッ……、元に戻った)

竜吉公主が、ここ仙界の領土内にある金鬘斗闕に住んでいるのは元々は玉皇大帝の指示で、それまでは、西王母が天界を出奔して仙界を作った後も、公主の方はしばらく火雲宮で暮らしていたという。

しかし、求婚者の数があまりにも多く、その求婚者同士が足の引っ張り合いをするので、火雲宮内でも問題となり、悩んだ玉皇大帝がしばらく仙界で暮らしてくれ、と頼んだらしい。

その後は、この宮殿が気に入ったのか、竜吉公主はここから動かないが、金鬘斗闕の建物と敷地に対しては、そういう理由で天界の行政が未だに費用の面倒を見ている。

だから、私が苦し紛れに言ったことも、あながち間違っただけかもしれないかもしれない。

「あまりお酒は呑まなくなっただけですか？ 緑麗様のために瑤池（注2）のプー

ルを満たせるほど用意しましたのに、さつきからあまり進んでないようで」

「アルコールは好きですが、ここの酒豪達と比べると、『好き』のうちに入らないんじゃないかと……」

と、さつきから一人でどんどん酒瓶を空けている九玄娘々を見る。

陽輝大将も一人にしてたら相当空にする方だけど、娘々も負けてないな……。そうだ。こうなったら――。

「公主様、今夜は女三人で、じっくり、呑み明かしましょう！」

（娘々、付き合え！ つーか、付き合ってくれ！ 頼む！）

と、涙目で懇願したら、娘々がグフフ、と笑った。

よかった……。ここんところ、陽輝大将と一緒に呑み明かして、肝臓鍛えてて本当によかった……。

なんとか竜吉公主を酔い潰し、娘々に案内してもらった客室に逃げ込んだ。

「人が悪いよ、娘々。こうなることが分かってて、なにも言ってくれないし」



「すまん。だが、公主様も、本気で困らせたかったわけではないのだ。それは察して欲しい」

「……そうなの？」

「あの御方は、この金鬘斗闕に事実上幽閉されているようなもの。誰かを恋い慕うくらいは、自由にさせてあげたいものだが……。こればかりはな」

「“幽閉”？ 行こうと思えばどこにでも行けるんじゃないや……？」

「純粹なロケーションの問題が一つある。往復二十時間の道のりを毎日する気力があればいいが、もしあったとしても長続きはしないだろう」

「確かに」

「それに、いまとなつては、『竜吉公主』はもう仙界の一員とみなされているから、天界に戻ることはできまい。頼るべき玉皇大帝は居ないし、本人も戻るつもりはないのだろうが」

「フム……」

「かといって、仙界では、元天界住民ということ、孤立気味なんだ。未だに熱心な天界側の求婚者も居て、金鬘斗闕にのぼってこようとする冒険野郎も居るん

だが……」

ああ、だから金鬘斗闕はこんな場所にあるわけか。

「そういうのが、崑崙の仙道達にしてみれば、どっちつかずで面白くないんだろ」

「神仙も色々大変だな」

「公主様は真性なんだ。一途に『緑麗様』を想い続けている。その一途さがかつ飛び過ぎてるのが問題なんだが、当時、緑麗も仕方なく、一度だけ相手をしたことがあるんだそうだ」

「そ、そう……。私は多分無理だな……」

「しかし、この恋慕の想いというものだけは、どうしようもないな。いくら修行を積んで、長き時を生きても――。逆に、長い時を生きているからこそ、諦めもつかぬのかもしれない」

それは、娘々自身のことを言っているようにも聞こえた。

だからというわけでもないが、聞いてみた。

「娘々は？ ドクターはどうなの？ 熱心に通ってるって話だけど」

「天真大夫か？ うーむ……、どうもあの手のナルちゃんはなく……」

「ふむ……。九玄小姐さんは、医者嫌い、と」

「嫌いってわけじゃないんだが……。ああ、インテリは結構好きだぞ。男の知性は色気に通じる」

「ホホウ。なるほど。だから、キサさんなのか」

「それもなあ……。考えたんだが、やっぱ不毛だよな……」

「まあ、キサさんの場合も真性だからなあ……。もういつそ、新しい恋を見つかるのだ！ 姐さん！」

「ウーム……」

そんなガールズ・トークをひとりきりして、夜も更けていった。

(注1) わらわ……厳密には武家の女性が用いたとされる。『高貴な女性が使う』というのはいここでのフィクション。

(注2) 瑤池……元は天界の楽園を意味するが、ここでは西王母の住む西華の地にあ

る池のこと。

翌朝、私はあまり寝ていなかったが、念願の書類を手に入れると、二日酔いのフラフラ状態の竜吉公主に別れを告げた。

「お世話になりました。このレポートは大切にお預かりします」

「緑麗様、これに懲りずにまたいらして下さい。わらわも、日々、緑麗様の御酒にお付き合いできるよう、鍛えてお待ちしております……。ウプ。九玄、後は任せただぞ。緑麗様をお送りしてたもれ……」

「御意」

そうして、またフラフラと歩いて行く竜吉公主は痛々しいが、九玄娘娘は、いつものことだと言わんばかりに肩をすくめる。

「行くぞ、沙龍」

「ふわーい」

青鸞のドライブも二回目となれば慣れたもので、私も九玄娘娘も青鸞の上で

ぐーすか寝ていて、気付いたら地上に着いていた。

青鸞が静かに怒っていたのは言うまでもない。

大きな伸びをしながら、身体をほぐし、次の旅程に備える。

「ここから西華に行くには、真っ直ぐ西？」

その方角を指して聞いた。

「そうだ。西の砂漠を一つ越えることになる。蟠桃会にはまだ少し早いけど、お前の次の目的地が西華だというのなら、ついでに送っていくが？」

「いや、いい。一人で行くよ」

「……？ 徒歩で行くのは大変だぞ？ 装備は大丈夫なのか？」

「うん、多分大丈夫」

不審な顔を見せる九玄娘々に、なんと説明すべきか。

「……実は、元帥とこの先で逢引の約束をしている」

「なるほど……」

と、この嘘で納得してくれたようだ。

風が強くなってきたので天を仰いだ。

西の砂漠特有といわれている強風である。

ここは、砂漠といっても、灼熱の太陽が降り注ぐ熱砂ではなく、寒気団の襲う大地である。

「……砂嵐でも来そうだな」

マントにスツポリと身を包んでフードを目深にかぶり、黙々と進んだ。

(ま、砂嵐で済めばいいけど)

幸い、私は砂漠でのサバイバル術は大体知ってるし、子供の頃、一人でこんな荒地に放り出されたことも何回かある。

ありとあらゆる生き延びる術を全て詰め込むような教育を受け、出来上がったのは、こんな可愛げのない百四十五センチ少年体型(まだ根に持っている)だ。

結局、村の連中も、上海の『蒼龍会』も、私に同じことを要求した。

『黄龍を飼い続けること』――。

それに尽きる。

だから、『保持者はなんとしても生き延びること』——。  
それが第一使命だった。

私が死んだらこの神獣はどうなるんだ、と聞いたことがある。

董天は、「次の保持者の魂魄に宿ることになるでしょう」とあっさり言っていたが、『次の保持者候補』はいまのところいない。

保持者は、血と遺伝子で決まる。

甲斐弥太郎の血と遺伝子を持った子供に受け継がれるのだ。

しかし、甲斐家の者全てにその可能性があるかという点、違うらしい。

事実、偃月は『キャリアー』であつても、『候補者』には成り得ない、と聞いた。

保持者がいない場合、黄龍は地上を彷徨い、次の保持者が出現するまでどこかの『龍穴』で待機することになるそうだ。

実際、今までにもそういう期間はあつたらしい。

これは風林の与太話なので、当時はあまり信用していなかったが、あの爺々が崑崙の道士だったと聞いてからは、その話も本当かもしれないと思うようになった。



た。

代々の黄龍の保持者を見守り、監視してきた風林なら、実際に見届けてきたのかもしれない。

『龍穴』で待機している黄龍は無害だという。

ハンドラーなくしては稼動しない機械のようだ。

なら、ずっとその状態の方がいいような気もするが、保持者の命を犠牲にしても黄龍の恩恵にあやかりたいと思う者達は居なくならないので、この連鎖は止まらない。

『呪われた保持者を作りたくないのなら、子供を作らなければいい』

それも一つの選択肢だ。

私の父、甲斐弥太郎も一時期はそう思っていたらしい。

が、『真の保持者』をずっと待っていた風林にそそのかされ、結局は子供を作ることになった——というわけだ。

『真の保持者』が、唯一、その連鎖を断ち切ることができる、といわれてきたからである。

それは、結果を見れば真実であったといえる。

私は、代々の保持者にかけられた短命という呪縛からは逃れられたのだから。

(そろそろか……)

砂漠の風景が少し変わった。

身を隠す岩棚もあるし、なにかが現れるとしたら、このような場所しかない。いや、誰かが仕掛けてくるとしたら——といった方がいい。

『黒の森』の第二回調査の辺りから、ずっと感じていた気配。

神は気配を持たないというが、私も数ヶ月を天界で過ごし、だいぶ慣れてきた。

人の発する『気配』や『殺気』といったものが、究極的には『波』だと言うなら、確かに神々はそれを持っていない。

彼らの場合は、完全にニュートラルなのだ。周囲の空気の影響を受けないし、また与えてもいない。

しかし、だからこそ、そこに違和感がある。

大気の中にポツンと穴があいているような、そういう感覚である。

(さて、鬼が出るか、蛇が出るか——)

火雲宮の諸事情を考えれば、自分の行動は監視されていてもおかしくはない。実際に仕掛けてくるかどうかは半信半疑だったが、予想通りの制服が目に入ったときには、アタックチャンスくらい欲しいもんだと思った。

しかし、今回は霊獣なし、ペットなし、ガテン系の友人なし、の文字通り一人きりだ。小龍はさっきまでは一緒だったのだが、元帥に呼ばれたようで、どこぞへと行ってしまった。

自信があつての単独行動だが、もし、やり合うことになったら苦戦は必須だな、と思った。

「やはり、お前か、呉謙隊長」

金鑾斗闕から数キロ歩いた所で現れたのは、近衛府のリーダーにして、なにやら厄介な匂いのする男だった。

どうやら向こうも単独行動のようだ。

「このような場所を選んで頂いたご配慮には恐れ入ります」

「別に配慮をしたわけじゃない。仕方なくだ。……話があるなら聞こう」

そう言いながらも、私はマントの下で聖魔剣に手をかけていた。

この前、火雲宮の練兵場でKOした近衛兵達とは、格が数段違うはずだ。一瞬たりとも気は抜けない。

「緑麗様、どうか、地上へとお帰り下さることはできませんでしょうか」

呉謙は、礼儀正しく、帽子を取ってそう言った。

その帽子を小脇に抱え、軍人特有の直立不動で距離を取ったまま立っている。

「お前の望みはそれか。なぜだ？」

「貴女に野心がないのは充分分かっていふつもりです。が、貴女が黄龍をその身に抱えている限り、杞憂はついて回る」

「そういうことか……」

「自覚しておいでなら、尚更ではないでしょうか」

「杞憂が杞憂で終わるのなら、問題はあるまい？」

「そうは参りません。貴女のそばに四神が控えれば、貴女の力は陛下をも凌ぐことになる。それは、誰も望んでいませんよ。おそらく、貴女自身もね」

「その理屈は分かりすぎるほど分かるんだが……。だったら、説得や懐柔なら、

もつと愛想だけよくて弱々しい官吏でもよこしてくれ」

「私では、“愛想”が悪すぎですか？」

と薄く笑う呉謙は、やはり脅しに来たのだ。

「ポイントはそこじゃない。“弱々しい”の部分だ」

「……」

「といっても、いまのところ、お前が単独犯なのか、外れクジ引かされただけなのか、私には分からないんで、なんとも言い様がないんだがな」

「緑麗様、これは私の個人的なお願いです。私は平穏な天界の治世を望んでいるだけです」

「そのためなら、心配材料を全て摘み取るのが許される、という理屈は、私は嫌いでね」

「お帰り頂くことはできないのですか？」

「できないな。残念ながら」

「なぜです？ 貴女には前世の記憶もないのに、生まれ育った世界を捨ててまで

……。ここでは争いの種を撒くだけなのですよ、貴女の存在は」

「うるせえなあ……」

と、そのとき、不意に近くの岩場から声がした。

「……？」

気付かなかった。

呉謙隊長の気配らしきものは分かったのに、こちらには全然気付かなかった。

「阿姐が嫌だっつってんだから、しよーがねえだろう。アンタが無理強いできる問題でもねえと思うんだが？」

暗い砂の風景に浮かび上がるような銀髪の白帝白虎聖君が現れた。

「白帝君……、なんでここに？」

誰かに言われて来たとか？

まさかね。

「いや、こんな僻地に阿姐が来るとは思わなかったんだけどな、『氣』を感じたんで迎えに来た。俺の任地、結構近くなのヨ」

まだ数回しか会ってないのに、この若者は最初からこんな調子で接してくる。

「白帝殿、邪魔をしないで頂きたい。私は緑麗様にお話をしているのです」

「だーからー、その話は終わりだ。どこまでいったって平行線だろが？ それとも、なにか？ 話が着かなきゃ、腕ずくか？ だったら、俺が相手になるぜ？」  
そういうストレートな展開に持っていくわけね……。

「呉謙隊長。ここはお引取り願おう。私も、この『弟々』に暴れられて、砂塗れにはなりたくない」

「分かりました。ですがお忘れなきよう。貴女の周囲にこうやって力が集まる限り、この話もついて回るのですよ」

「確かにな……。望むと望むまいに関わらず、か」

霊獣もペットも友人もいなくて、今度こそ一人かと思った矢先の事態だ。

「あとをつけたことはお詫びします。では——」

背を向けて去っていく呉謙を、しばらく眺めていた。

「で、ナニモン？」

白帝君が同じくその後姿を見ながら聞いてくる。

お前は……、あれが誰かも分からず喧嘩売ろうとしたんかい……。

軽く溜息つきながらも、やっとな聖魔剣の柄から手を離した。

「近衛の隊長。まあ、今日はアルバイト……だと思っけど」

「命拾いしたな」

「どっちが？」

「そりゃ、向こうさんがな」

白帝君の自信たつぷりの物言いに、短く笑った。

「しかし、阿姐はなんでここに？」

「ああ、仕事。金鑿斗闕の帰り」

「ホー、いいねえ！ 俺も一度は覗いてみてえもんだ。禁断の女の園だもんなあ

」

「ドリームはいいとして。近所なら、しばらくお前んとこに世話になりたいんだが。蟠桃会まではまだ時間があるんだろ？」

「そりゃ、構わねえけどよ。青龍の旦那が恠気起こさねえか？」

「なにも同じ床で寝るわけじゃあるまいし」

「俺は大歓迎だけど♪」

「……」



疲れた目で睨んだら、素直に引き下がった。

「すいません、冗談です」

どうやら、緑麗と白帝君ってのはこういう力関係らしい。

天界は狭いと誰かが言ってたけど、私に言わせれば、結構広い。

帝都からだいぶ離れたこの西域の砂漠の街も、一応、天界の領土に属しているらしい。

もう少し西に行けば西華だと白帝君が教えてくれた。西王母が普段住んでいるところである。

西王母というのは、名前こそよく聞くが、私は会ったことはない。

元は天界人で、かなりの実力者の奥さんだったらしいが、その旦那と喧嘩別れして、西華に引き籠もり、仙界を作ったという話だ。

つまり、仙界の大ボスである。

その大ボスの主催する『蟠桃会』とは、天界仙界の有名人達が一堂に会する園遊会で、要するに『皆仲良くしましょね』という趣旨のドンチャン騒ぎだ。

欠席不可、というが、それを拒否できるのが、天界では『最高神』と言われて

いる四名だけという話だから、天仙界の力関係もだいぶ分かってきたというものの。

開け放った窓から、乾いた風が吹いてきていた。

オアシスを中心にして栄えているこの街は、白帝君の故郷からも近い、彼にとつては『俺の庭みたいなもの』だそうだ。

普段、この地域に天界軍が駐留することはない。

仙界との境界近辺なので、表立って事を構えたくないという天界側の政策らしい。

秦帝が即位した折、赤帝君と白帝君は、改めて四神府に配属されることになった。

要は、今まで世間から隠れていたのが公に戻ったってだけなんだろうけど。

四神府の仕事は、実態は国土保全だ、と赤帝君は言っていた。

四方将神にしかできない、五行の流れを正し、調整することがメインだそう

で、だから、軍事に積極的に携わる義務はないのだが、その国土を脅かす存在が昔は跋扈していたそうで、それを撃退するために、緑麗や四方将神達が闘ってい

たらしい。

いまは異民族神魔も大人しくしているのか、四方将神達も本来の仕事に戻っている。

白帝君がこの街に居るのも、街の駐在さんという意味以上のものはなく、まあ、言ってしまうえば閑職だ。

だから、いま、ここで呑気に仕事と称して遊んでいる白帝君も、街の人達にとっては、なにかあったときは頼りになる、ありがたい護り神様ってことなんだろう。

「ちよつと休憩……」

私は、この街に数日逗留し、竜吉公主から預かったレポートを読み解いていた。

しかし、相変わらず知性派アシスタントはいないので、仕事はなかなか進まない。

難解なレポートを脇にして、窓から街の通りを眺めれば、例の護り神様が粋な改造軍服を着て、道往く妙齡の女性をナンパしていた。

青龍の旦那に左遷された、とボヤいてたけど、結構、楽しんでるじゃないか。あの若者は、一見した限りではとても四方将神には見えないけど、まあ、街の人達には概ね好かれてるみたいだから、問題ないんだろうな。アレでも。

とりあえず、当面の問題は二つ。

一つは、難解なこの『昊ちゃんレポート補完バージョン』だ。

これは、水雲宮に運ばれてきたレポートとは全く違う言語で書かれてあって、分かる範囲で翻訳してみると、どうやら内容もかなり別物って気がする。

でも、この補完バージョンには、私が一番知りたかった、神獣と保持者の関係についての記述があった。

一度『融合』してしまっただ神獣の力というのは、その保持者の肉体ではなく、魂魄に刻まれるものらしい。

だから、玉帝は、緑麗の身体から魂魄を取り出し、その上で、黄龍を切り離すということをした。

それは、天帝のみが行える、まさに『神業』だという。

つまり、例え天帝といえど、保持者が生きてままの状態で、神獣の力だけを切

り離すことはできないわけだ。

しかし、もし、別の方法があるのなら——。

呉謙隊長や元宰相の心配はなくなることになる。

緑麗も、どちらかというところを望んでいた。彼女は、この力を、あるべき場所に返したいと願っていた。

あるべき場所。それがどこなのか、私は知らないけど。

私だって、呉謙隊長が言っていたことは尤もだろうと思う。

『貴女の周囲に力が集まる限り——』

この身に抱えた力のせいで四神は集まるし、元将神という肩書きのせいでそれを懐かしむ人達が集まる。

それが、時の権力者や側近達にとって目障りにしかならないことも分かるし、私自身も歓迎していない。

しかし——。

それじゃ、大人しく地上に戻りますってわけにはいかないのだよ。

その理由が、誰に非難されようとも、鼻で笑われようとも、こればかりは譲れない。

我侭？ 自分勝手？ 大いに結構。

どうせ、私の寿命はあと五、六十年だ。神様達にとっちゃ、瞬きするような時間だろう。それぐらいの間、放っておいてくれ。

そして、ささやかにして切実な私のもう一つの問題。

三年間一緒に暮らしたあの親友は、一体どういうつもりでこの世界を選んだのか。

キサさんの天界での役割を考えれば、私なんかよりもずっと必要とされる人で、歓迎される人であるのは分かるけど、本人が滅私奉公する人じゃないってのは私が一番よく知ってる。

じゃあ、なんのため？ と言えば、答えはきつと一つしかない。

でも、『私のためかもしれない』というその答えは、実は私のためにも、キサさんのためにもなっていないんじゃないかと思うのだ。

じゃあ、どうすればいい？

私の、『このままじゃいけない感』は、どうしたら解決するんだろう。分からないんだよ、キサさん。どうすれば一番いいのか。

色ボケした私の頭では。

「ありやりや」

白帝君は深夜遅くに帰宅したが、沙龍の使っている客室にまだ明かりが点いていたので、寄ってみた。

「阿姐、風邪ひくぞー？」

沙龍は、机に突っ伏したまま、寝息をたてていた。

散乱する書類に埋もれているので、仕事の途中の一休みだろうが、毛布を肩にかけてやっても起きる気配はない。

その時、窓をこつこつと叩く音がした。

「キュウ〜」



小龍が開けてくれ、と窓を叩いている。

「お？」

白帝君は、窓を開けて、その小さな龍を招き入れてやった。

すると、小龍は手紙の入った筒入れを沙龍ではなく、白帝君に示す。

「なんだよ？ 俺宛てか？ …… ったく、おめーの主人はどっちだ」

白帝君は、それが九雷からの手紙だろうと分かっていたので、そう言った。

この手紙の内容も大体分かっている。

ちゃんと蟠桃会に来いという念押しだろう。果たして、それは当たっていた

が、手紙の後半には、今年は少し変わった催しが増加されるという旨が書かれてあった。

「まあ、いいんだけどよ、それは……」

沙龍の机は、学生が語学の勉強をしているような感じになっている。

おそらく、彼女が分からずに放棄したような古代文字の一文を、白帝君は代わりに翻訳してやった。

『方法は一つある。それを保持者が望めばの話だが』

白帝君は、白い大虎に姿を変え、天を駆けていた。

他の四方将神達はほとんどこの形態を取らない。まず、木佐はできないし、青龍である九雷も元々は龍族とは無関係なので、やはりできないという方が正しい。

赤帝君の場合は、周囲数キロを瞬時に焼き尽くすという朱雀の姿になるのは、最終手段だと思っているので、よっぽどのことがない限り、ならないだろう。

だが、白帝君だけは面白がってよくやっているのだ。

「この方向オンチが！ 遅れたらどーすんだよ！」

白帝君の背中に乗っている私は、さっきから怒っている。

西華までの道のりは任せると言うので、任せていたら、結果、さんざん迷っ

て、日も暮れかけた頃、やっとそれらしきルートに乗ったところなのだ。

蟠桃会は明日からだだが、一般招待客は今日の前夜祭までに集合しなければなら  
ないので、急いでいるというのに。

「別にいいだろ、ちよつとぐらい。大体、将神が一般招待客ってのが間違ってる  
ぜ。俺らだってVIPなのによー」

「元だ、元」

「大して変わんねえだろ」

「私はそうゆーの、嫌いなんだ」

「阿姐、変なトコで律儀だなー」

「い・い・か・ら、急げっての。誰のせいで遅刻しそうになってんだよ——  
うおッ!？」

そのとき、いきなり突風が吹き上げて、私は危うく白帝君から落ちそうになっ  
た。

物凄いスピードで斜め下から飛んできたものが、さらに上昇していくのが目の  
端に映った。

「あ——危ねえだろーがッ、くおらッ、そこの暴走族ッ！」  
思わず叫ぶと、その飛行物体が滞空して振り向いた。

「……緑麗？ なにやってんだ？」

見れば、馴染みの飛行少年だった。

「あれ、飛龍!? なにって、西華に向かう途中で……、もしかして、飛龍も？」  
「ああ」

そっか、四海龍王もVIP扱いというから、当然、そのご子息も招待されるわけね。

「……チツ、敖開か」

なぜか、白帝君が舌打ちした。

それが聞こえたのか、飛龍も、ボソつと言い返す。

「緑麗、ソイツに乗っていても、永遠に目的地には着かないぞ。俺に乗り換えろ」

「ほー……？ ガキがナマ言ってるじゃねえか」

なにやら、険悪なムード……なんだけど、なにこれなにこれ、もしかして――

「なんだ、白虎。俺とやる気か？」

「……やらいでかッ！」

やっぱし……っ！

力押しな二人の、最悪な取り合わせってやつじゃん！

「先手必勝ッ！ くらえッ！」

「や、やめろ……ッ！ 二人とも……ッ！」

西華——。

蟠桃会の前夜祭の準備が行われている屋外会場である。

ところどころに提灯が吊るされ、既に寛いでいる招待客や、給仕に忙しく立ち回る侍女達が居る。その中で、いち早く呑み始めた陽輝は、もうだいたいぶいい気分になっていた。今も、盟友にそれを窘められて、「固いこと言うなって……」などと言っていたところである。

しかし、その陽輝も、『蟠桃会中は私闘は厳禁』という最低限のルールくらいは守っていた。

『みんな仲良くしましょうね』というのがメインの目的の園遊会なので、その最低限のルールを破るような者が居たとしたら、それぞれの上司や上官から殺されても文句は言えないだろう。

その重大性を認識している陽輝は、持っていた杯を思わず、ポロリと落とした。

「おい、九雷、上を見ろ。俺はナクンか嫌な予感がするぜ」

「予感……、というか、既に始まってるな……」

同じ会場、少し離れた場所で、赤帝君は頭を抱えていた。

「聖霄と敖開様か……。選りに選って……」

「白帝君に乗ってるのは——馨か!？」

木佐は、5・0の視力でそれが分かった。

もう辺りはだいぶ暗くなっている、他の招待客達は気付いていない者も多いが、天仙界一和やかな会が始まろうとしている上空で、天仙界一派手な喧嘩が繰り広げられているのである。

赤帝君でなくとも、頭を抱えなくなるというものだ。

時折、飛龍の放ったロケット弾か、金磚きんせん（※弾を撃ちだすタイプの寶貝）が、花火のような軌跡を描いていた。

「一緒に来てくれ、真武君！ あれを止めなければ！」

「止めるって、どうやって——」

「それは、いまから考える！」

赤帝君が愛刀『紅蓮』を抜こうとしたとき、やや上空から声がかかった。

「待て、赤帝」

黒焰虎に乗った九雷である。

「お前の技では沙龍まで巻き込む。白帝を抑えてくれるだけでいい」

「九雷元帥!? ……分かった。しかし、敖開様は——」

と、赤帝君が言ったとき、



「飛龍は私に任せられよ！ 伊達に長年、保護者をしているわけではない」  
その場に駆けつけた九天玄女が、いち早く青鸞に乗り込んでいた。

「あああゝゝゝ、なじよしてこうなるのゝゝゝ」  
ジェットコースターに乗ったような感覚で、時々、火花かレーザーみたいなものが頭の上を掠めていく。

まあ、綺麗な花火ゝ、とか言ったりや幸せなんだろうけど、きつとあれに当たったら一発で死ねる。

「やめろっちゅーのにッ！ お前らゝッ！」

頭に血が昇って暴れまくってる二人に、私の声は届かない。だから、なす術もなくこうして白帝君の背中にしがみついているんだけど――。

「ぐえ――ッ！」

いきなり、垂直降下するなあ！

「ぎえ――ッ！」

そして、回転なんかするなあ！

よ、酔う……。これは確実に悪酔いする。

「やめろ、飛龍！ 私まで殺す気か……ッ！」

その叫び声がやっと聞こえたのか、我に返った飛龍が攻撃を一旦停止した。しかし、それを機に、白帝君が体勢を立て直し、飛龍に突進していく。

「だから、お前もやめろと言うのに、白帝君……ッ！」

もう泣きたくなる気分で叫んでると、目の端にフツと黒いものがよぎった。かなり大きなものだ。

「……？」

あと数分で完全に日が落ちそうな、夕闇の赤黒い空をバックに、その黒いものはもう一度見えた。

二人は熱くなっていて気付いていないようだ。

「緑麗、ソイツから降りろ！ 俺が不利だ！」

「フン、今頃気付いたか、バカめ！」

「いや、降りろって言っても、駅はない……」

と思ったけど、気が変わった。

もうこんなハチャメチャな喧嘩には付き合っではいられない。

「分かった！ いま降りるから、あとは存分に二人でやってくれ！」

「え？」

この高さである。私は飛べないわけだから、なにもせずにいると人体で一番重いものが下になる。

頭ごとまっ逆さまにならないように、なんとか姿勢を制御しながら――。

「わわわ！ 阿ー姐ー！」

白帝君の泣きそうな、パニックってる声が聞こえるが、まあ、そう心配すんな。

ドサツ

と、音がして、それなりにダメージは受けたかもしれないが、見事にその落下ダメージを殺すように動いてくれたのは黒焰虎で、さらに私の身体を空中キヤツチしてくれたのは元帥である。

「謝々」

「沙龍は回収した！ 赤帝、九玄殿！」

元帥が叫ぶと、呆然と滞空していた飛龍には動きを封じる縄状の光が幾重にも巻きつけられ、白帝君の周囲には炎の壁ができた。

「なッ……!?!」

「ゲッ、阿哥ッ!?!」

あつという間に二人を拘束した、九玄娘々と赤帝君の手際は鮮やかとしか言いようがない。

「さすが、保護者達」

そして、改めて見上げると、元帥は安堵の溜息をついていた。

「無茶をする……。俺が受け止めるという確信はあつたのか？」

「あつたよ」

絶対だね。

かくして、お騒がせの二人はそれぞれの『保護者』にきついお仕置きを受けることになった。

「今日という今日は、堪忍袋の緒が切れたぞ、聖霄……」

四年に一度くらいしかこんな顔をしないのではないかと思われる顔で、赤帝君は、白帝君の前に立っている。

「だってよお……、あのガキが喧嘩ふっかけてくつから」

ドガツ

愛の鉄拳なのか、怒りの鉄拳なのか、白帝君が地面にめり込む。

「飛龍……。私の屋敷では多少暴れてもいいが、ここでは絶対に暴れるなど言うてあつたよな……？」

九玄娘々は、般若のように恐ろしい顔で、縛り上げた飛龍の胸倉を掴んでいく。

「忘れた」

バキ——ツ

や、やっぱ多少は口ぞえしておこうかな。

「待って、娘々、赤帝君。止められなかった私も悪いんだ。そんなに叱らなくて  
も……」

そう言うと、二人が同時に物凄い顔で振り向いた。

「う……（怖い）」

「緑麗様……、このバカの不始末は一度や二度ではありません。今日こそこの体に分からせなければ」

「沙龍、甘やかしてもタメにならんぞ。躰とはこうして体に叩き込むものなのだ」

「はあ……」

そして、説教と制裁は続く――。

21 前夜祭の正しい過ごし方

天仙界のメイン・イベントの一つ、『蟠桃会』を明日に控えた西華の宮殿前では、賑やかな前夜祭が始まっていた。

無法者二名による暴走行為は、九玄娘々の奔走により、なんとか表沙汰にならずに済んだらしい。

といっても、あれだけ派手に暴れれば、隠しようもない。あちこちの酒宴の席では、その話題が酒の肴となり、陽気な笑い声と共に尾ひれのついた武勇伝が聞こえてくる。火事と喧嘩の話題はどこに行ってもいいネタになるらしい。

私は、その会場の人の波の中を、一人で歩いていた。

嬌声をした方を見ると、包帯をぐるぐる巻きにした白帝君が、得意気な顔をして呑んでいる。両脇に綺麗な女性を侍らせ、『本日の主役』の襁までかけて、どうやらちつとも懲りてないようだが、あのヤンチャ坊主は人から無条件で愛される特質のようなものがあるらしい。

(赤帝君の気苦労が知れるな……)

ちなみに、飛龍はというと、未だに木に吊るされたままになっていて、その木の根元には『猛獣、仕置き中』と書かれた立て札がある。

「よ、沙龍」

陽輝大将の声に振り向けば、周囲の騒がしさとはちよつと違つた、大人な雰囲気の中のテーブルがあつた。

「ドクターに娘々、赤帝君まで……。なんか珍しい取り合わせだね」

四名の美男美女が(いや、一名はそうでもなかった)、見事にこの風景に華を咲かせている。

「お前も、一緒に呑まないか？ 金鬘斗闕での勝負はついてないぞ」

と、九玄娘々がニヤリと笑つて言う。

「いや、最近、呑み過ぎだし……。今日はアルコールはいい……」

とりあえず、足早に逃げた。



しかし、結局、一回りして、同じ場所に戻ってきてしまった。

「ほぐへー、おごひえふえ！」

頭上にぶら下がっている飛龍が、猿轡の下からなにやら叫んでいる。

「もー、しよーがないなあ……」

多分、九玄娘々は、わざとこんな人目につきやすい所に吊るしたんだろう。と  
いうことは、それほど怒ってはいないってことか。

「ホラ」

ロープを外すと、飛龍はそのまま落下した。

ついでに、身体を拘束している縄と、猿轡も外してやった。

「た、助かった……！ 多謝、緑麗！」

娘々と飛龍は、私から見れば、ほとんど親子関係だ。

こういう場面で甘やかしてしまう私は、娘々には遠く及ばない。

「コレ、食べる……？」

と、重箱を見せる。宴会からくすねてきた料理である。腹を空かしているであろう飛龍のために、詰めて貰ったのだ。

「食べるぞ！」

目を輝かせ、ふがふが言いながら料理を頬張り始めた飛龍の隣に、私も腰を降ろした。

前夜祭会場は自由な雰囲気、ゴザを広げて花見酒してる人も居れば、陽輝大將達みたいに、テーブル席で飲み食いしてるグループもある。

色んな屋台も出ているし、カウンター席もあったりする。

「はあ、なんかもお、どつと疲れたな……」

溜息とともに、思わず素直な感想が零れた。

そこに、探し人がやっと現れた。

## 【ケース1 友達以上】

「相変わらずのトラブル・メーカーぶりだな」

「キサさん……」

着ているものがいつもとはまるつきり違うんで、別人のようだ。四神府の制服とはちよつと違うみたいだけど、これが『黒帝玄武佑君』の正装なんだろうか。

真つ黒な直衣がよくお似合いで、それに比べて私ときたら、旅装のままだから、小汚い中学生にしか見えないだろうな。

「……ング……フガ」

隣で食べ物詰め込んでいる飛龍は、我関せずだ。

「よかったら、どうぞ……」

と、隣を指す。別にゴザもひいてないし、地べたまんまなんだけど。

しかし、キサさんは、そこら辺は気にせず腰を下ろした。

「久しぶり……だよね？ 元気だった？」

なんでギクシヤク感が漂うのかイマイチ分からないけど、とにかく会話は続けなければ。

「まあね。馨も忙しそうだな。仕事は順調なのか？」

「うん、なんとかね。色んな人に助けて貰ってるよ」

「そうか」

キサさんは、いつもと変わらない。きつと、この微妙な空気を漂わせてるのは私の方なのだ。

端から見れば、三人でピクニック状態。お姉ちゃんとお兄ちゃんに囲まれて、ご満悦の欠食児童って感じか。

「モギユ……、フング……ングッ!？」

「飛龍、ゆつくり食えと——」

案の定、食べ物を咽に詰まらせそうになっている飛龍に、キサさんが無言で自分のペットボトルを差し出す。

飛龍は、同じく無言でそれをひったくると、ゴクゴクと飲んだ。

「……ふは」

そして、無言で突っ返す。この二人、いつからこういう関係になったんだ。

「ねえ、キサさん……」

「なんだ？」

と言われると、言葉に詰まる。

「いや、いい……。なんか、話すことが色々あるような気がするんだけど、いま

はまだ上手く言えない気がする」

「……」

キサさん特有の静かな『間』だ。別に言葉がなくても、こうして隣に居れば、お互いの思っていることは大体伝わる。例えば、呼吸の仕方とか、視線の移し方とか、そんなちよつとしたことで、伝わる。

「馨の考えてることは、分かってるよ。多分、全部」

「うん、私も、キサさんがなにを言いたいのか分かってる、と思う」

「まあ、いままで、こんなに離れたことがなかったから、色々あるのはしょうがないよな」

「うん……」

「僕もうまくは説明できないけど、いや、多分、できるけど……。馨が変な気を遣う必要はないよって、それだけは言っておきたかったんだ」

「……」

私がなんと言おうか迷っていると、キサさんが、突然、苦笑した。

「確かに、少し雰囲気がおかしいな。これは僕達の空気じゃない。少し、時間を

置こうか」

「そだね……」

なんとなく、ずつとうつむき加減に、自分の汚れた靴を眺めていた。

「馨——」

と、促されて顔を上げると、キサさんが視線でなにかを示している。

「あ……」

そこには、少し離れた所で、こちらを見ている恋人の姿があった。

しかし、私はすぐには動けず、その躊躇を読み取ったのか、キサさんが言ってくれた。

「この場合の、正しい選択は？」

「うん……。続きはまた今度ね。……おやすみ」

それが正しいのかどうかというより、そうしなきゃいけないことや、そうしたいと望んでしまう自分が少し寂しかった。

「玄武は、緑麗と喧嘩してるのか？」

料理を全て平らげた飛龍が、ポツコリと膨らんだお腹をさすりながら言った。

「……そういうわけじゃないんだ」

「どうして緑麗をあつ男のところに行かせたんだ？」

飛龍は、視線の先に居る九雷のことを言っている。

「それが、馨の望みだからな」

「だが、さつき、緑麗は迷っていたぞ」

「迷っていたんじゃないかと、少し戸惑っていただけさ。自分の優先順位が変わってしまったことに」

「お前の言うことは時々難しく分らないぞ。偃月といい、お前といい……。なに言ってるのか分かるのは九玄くらいだ」

「それは九玄さんが、君の頭に合わせてくれてるからだろ」

「なるほど」

「納得するなよ……」

飛龍の視線は、ずっと、宴会会場の片隅の二人に向けられている。

沙龍を九雷のもとに行かせたことにはまだ納得してない、という感じだ。

「……俺は昔からあの男が嫌いだ」

と、飛龍は、九雷のことを言った。

しかし、その群青色の瞳に現れた感情は、憎悪や嫉妬といったものではない。

単なる『嫌い』だ。

「だが——」

今度は、その九雷に微笑んでいる沙龍に視線を移した。

途端に、飛龍の表情が和らぐ。

「俺は、あの男と居るときの緑麗は好きだ。緑麗は、あいつの前でしかあの顔を

しないが、すごく嬉しそうだ」

「……」

結局、自分も飛龍と同じなんだろう、と木佐は思った。



【ケース3 恋人以上】

VIP席のようなテラスの、さらに特等席のような匂いのする腕の中で、しばらく花火を見ていた。

蟠桃会の前夜祭には必ず打ち上げられる名物だそうだ。

「いいのか……？ 親友を放っておいて」

そんな心にもないこと言っちゃって。私が『こっち』に来るの、分かってたくせに。

「……これ、なんの香り？」

直衣から直接してくる、この爽やかな香りが、鼻腔をくすぐる。

「さあ……、茉莉まったり（注1）じゃないか」

「ああ、お茶にもある……」

久しぶりに安心したら、眠たくなってきた。そういえば、もういい時間だ。階下で聞こえる賑わいも、だいぶ終息してきたようだ。

「キサさんには、私が突き放されてるような気がする……」  
随分経ってから、さっきの元帥の問いに答えた。

「お前がそう感じているのなら、真武君にもなにか思うところがあるんだろう」

「そうかもね……」

「しかし、お前の恋人は大変だな。親友から、ペットから、信望者から、全員に恨まれて、全員に勝ち抜いて、お前を取り上げなければ、こうして独占もさせて貰えない」

「そんなに人気者でもないけどね。……あ、でも、心配性の軍人さんにはちよつと人気があるみたい」

遠まわしに呉謙隊長のことを仄めかしたら、少し固い返事が返ってきた。

「ああ、分かってる」

そっか。まあ、そうなんだろうな。

じゃあ、もう物騒な話はしないでおこーう。

「ずっと……このままで居たいな……」

半分寝入ってしまったし、もうそんな意識の中で呟いた。

それは、勿論、言葉通りの意味だけど。

「沙龍……？」

「なんでもない……」

長生きしたいわけでも、不老不死になりたいわけでもない。

ただ、同じ時間を生きられないのが少し悲しいだけ。

#### 【ケース4 恋人未満】

寝所まで九玄を送り届けた天真は、スチャット咽元に突きつけられた鋭利な刃物にも動じなかった。

いや、動じないふりを一生懸命した。

「天真大夫は、なにか武芸をされているのか？」

にっこり笑みを浮かべながら、そう聞く九玄は、この武器を引っ込める気はない。

正確には武器ではなく、装飾用の簪かんざし。なのだが、九玄ほどの使い手ならば当然、これで人は殺せる。

「いいえ、これといってなにも。色男には力も金もありませんよ」

天真はなるべく自分の首の下を見ないように、すつとぼけてそう答えた。

「自分で言うか。では、命知らずなのか？」

「まさか。結構人生楽しんでるつもりなんですが……」

天真の片手は九玄の腰を抱いているが、それ以上は、頸動脈切られそうなので近付けない。

そろそろ命の危険を感じてもいいかもしれない。

だが、天真は、抱き寄せた九玄を離すつもりはなかった。

「なら、一歩後退して、後の人生を楽しむことをお奨めしよう」

大抵の男なら、ここで諦めるのである。

九玄も、そう高をくくっていた。

しかし、天真はしぶとかった。

「……なぜ、離れない？」

「そうですね。貴女が本気で私を殺す気がないことが分かるからです」

「殺さないまでも、ねじ伏せることはできる」

「では、なぜそうしないのです？」

「そうだな、この前、沙龍に言われたからかもしれない」

「なにをです……？」

九玄は簪を引っ込めたが、おふざけはここまでだと言わんばかりに、自分から身体を引いた。

こうなつては、もう天真も冗談の延長では口説けない。

空になった腕を虚しく降ろすだけだ。

「新しい恋を見つけるとさ……」

「……なんか、ちよつと腹立ちますね」

「なんでだ？」

「だって、この前、私だって同じこと言ったのに。貴女ときたら、女友達の言うことは素直に聞くんですか」

「付き合いの長さが違うんだ」

「それは、おかしいですよ。少なくとも、昔の緑麗と今の公主（注2）は別人です」

「天界住民なのにそう見ているのは、貴方だけだ、天真大夫」

「だって、それじゃ、公主が可哀想じゃないですか」

「“可哀想”？」

九玄は、不思議な顔をした。

「そうですよ。前世の記憶の有無に関わらず、転生すればそこからは別の人生です。昔の面影を重ねられては、今を生きている公主や真武君達は、やるせないでしょうね。現に、貴女だって、そう思う部分があるから、今の真武君には多少遠慮しているんでしょう？」

「なら……、それを一番に言うべきは私ではなく、九雷元帥なのではないか」

「九雷は……、そうですね。そうかもしれませんが……」

天真は、水雲宮に拉致されたときの沙龍の苦悩を見ているので、つい沙龍の味方をしてしまう。

しかし、それをいま、口説いている真つ最中の女性に言うべきではなかった、

と反省した。しかも、責めるような口調で、一体、自分はなにをしているんだ、と思う。

「すみません。ちよつと大人気ないことを言ってしまった」

「いや、いいんだ。そういう素の部分を見せてくれないから、いままで躊躇してたんだ」

九玄は、意外にも素直に微笑んでいた。

「え……？」

そして、天真にとってはさらに驚くような一瞬があった。

九玄が、長い睫を伏せて、唇を重ねてきたのだ。

「おやすみなさい」

目の前で閉じられてしまったドアは、多分、もう開かないだろう。

(しまった……。堪能する余裕が全然なかった……)

天真が軽く後悔したのは言うまでもない。

(注1) 「茉莉<sup>まつり</sup>」は漢名。茉莉花Ⅱジャスミンのこと。

(注2) 天真は沙龍のことを『公主』と呼ぶが、これは単に「お嬢さん」的なノリで言っているだけ。



「皆様、遠い所をお集まり頂き、西華の主として御礼申し上げます。誠心誠意、おもてなし致しますので、どうかこの宴を心ゆくまでお楽しみ下さい」

西王母の一声で、蟠桃会の本番は厳かに始まった。

庶民的だった前夜祭とは一転して、明るい太陽の下、いかにも貴人達の華やかな宴といった感じだ。

いわゆる『主賓席』には、私の知った顔も何人か居た。

秦帝と、そのもてなし係である竜吉公主。そして、それぞれの背後に控える呉謙隊長と九玄娘々である。

「ま、こんな雰囲気も最初のうちだけだ。酒が回ってくりや、嫌でも騒がしくなる」

陽輝大将が手酌で呑みながら言った。

「なんか、玄都以来、呑んでる姿しか見てない気がするけど……。その呑みっぷ

りは、尊敬に値するよ」

私達は桃花の木の下、二人で座り込んでいる。

一応、テーブル席も薦められたのだが、断ったのだ。

私も陽輝大将も主賓じゃないし、VIPでもないので、こんな感じでいいのだらう。

「いいか、沙龍。ここでは絶対騒ぎを起こすなよ？ 政治的にビミョク々な場

所だからな」

「私がいつ騒ぎを起こしたよ」

「八景宮での一件を忘れたのか？」

「あれは……まあ……」

と、言葉を濁す。

私だって、日々新しい環境に慣れるべく、色々やってるし、それなりに気苦労もあるんだ。少しは大目に見てくれたの。

「でも、私、イマイチ分かってないんだけど、こうやって宴に参加してればいいだけ？」

「多分な」

「多分って……」

この大将はえー加減なことしか言わないのであまりアテにはしてないのだが、そういえば一番アテになる御仁はどこへ行ったのやら。

キサさんも居ない。

「沙龍、来たぜ——」

と、陽輝大将が立ち上がったので、私もつられた。

西王母が、二人の侍女を引き連れて、こちらに近付いてくる。

「お招き有難う御座います。王母様」

さつきまで胡座をかいて、気だるそうに酒を呑んでいた中年が、どこにも隙のない、バリバリの天界軍大将となる一瞬だ。この人も、プロだな。

「陽輝大将、楽しんで頂いてますか？」

私の感覚で言えば、四十代か五十代くらいのその御婦人は、穏やかな口調で言った。

「はい。西華秘蔵の仙酒を頂けるのは、この機会だけですのぞ」

「ええ、好きなだけ召しあがって下さい」

そして、緊張の一瞬。

「お久しぶりですね、緑麗」

「いえ、初めまして、とご挨拶させて頂くことを御赦し下さい。昔語りができぬ身の上です」

私だって、今日は総重量十キロとは言わないが、五キロくらいの衣装を着せられているし、それなりの礼儀は知っている。

ちゃんと挨拶くらいしちやるわい。

「そう……。でも、それは大した障害にはならないようね。貴方達二人がこうやって一緒に居るところを見ると」

そう言って微笑む西王母に、思わずホツとした。よかった。フツーの人だ。

会う人会う人、一癖も二癖もあるこの世界だし、なによりあの竜吉公主の母親だから、相当覚悟はしていたんだけど……。

「貴女には迷惑をかけっぱなしで、仙界の盟主としては、心苦しいばかりです」

「迷惑……？　いえ、そのようなことはありませんが」

まあ、娘さんにはこの前ちよつと迷惑かけられた気もしないではないが。

「仙道の存在意義は、そもそも、争い事を起こさず、心穏やかにあることと私は思っています。なのに、なぜ崑崙に武力があるのか、矛盾だとは思いませんか？」

急に、西王母がそんなことを言い出す。

桃林の清談でもしようってか。

「いえ、それが永世中立国というものですから」

「そうね。ならば、武力を持ちながら、今も昔も、貴女に協力することはできなかった私達を、貴女は許してくださるかしら？」

西王母はなにを言いたいんだろう……？

隣の陽輝大将をチラッと見たが、無表情のままだった。

「現世に限って言えば、私は仙界に貸し借りはありませんから、助力を請える身分ではないと思っています」

「……」

西王母は、しばしなにか考えている風だった。

「誤解しないで頂きたいのだけど、緑麗。貴女が麒麟を打倒したことは、仙界の者として、みな喜ばしく思っています」

「はあ……」

「だけど、お分かりかしら？ いまとなっては、その麒麟が消滅したことが、新たな争いの素になってしうまうことを」

「……！」

それまで穏やかだった西王母の表情が、途端に『政治家の顔』となる。

やっぱ、この人も普通の人じゃない。そりゃ、仙界の盟主様だ。分かつちやるけど……。

「貴女は、それをどうお考えなのかしら？」

陽輝大将がなにか言いかけたのを、私は手で制した。

「私の身に宿るこの力が、争いの素となるなら、喜んで放棄致しましょう。しかし、残念ながら、その方法はいまのところありません」

まずは野心のないことをアピールする。

「私は水雲宮で毎日釣りでもして過ごしますよ」

そして、田舎に帰る気はないとはつきり主張しておく。

「では、邪よこしまな求婚者や、心配性な野次馬にはどう対処を？」

なんだよ、妙に絡むな……。

大体、なんで西王母がそんなことを気にするわけ？

仙界はこの際、関係ないんじゃない？……？

「よこしまだろうが、たてしまだろうが、最愛の恋人が既に居ますので、全てお断りです」

「貴女は昔から、自分の欲するところを理解しているのですね。それはとても素敵なこと。だけど、残念なことに、その方法では解決できない部分もあるので「す」

「……それは？」

ちよつとウンザリ。

早く終わらないかなー。この無駄な問答。

「貴女が無位無官の自由な身のままでは、いつまで経っても求婚者は落ち着かないし、野次馬も減らないということですよ」

西王母はさつきから例え話をしているのだ。

この場合の求婚者というのは、黄龍の力を利用したい人達で、野次馬というのは、肯定・否定を問わず、黄龍に興味のある官吏や閣僚のことだ。

さらに暴利をむさぼるパラッチとか、水雲宮から私を追い出したい地上げ屋とかも加えていい。

「それを鎮めるためにも、せめて将神の再任命は受けた方が、貴女のためだと思います。でなければ、貴女自身が欲する平穩を保つのは難しいかもしれませんね」

「……」

さすがに、返答につまるな。

陽輝大将を見ると、「テキストに答えておけ」とその目が言っている。

「王母様、少し、時間を頂けますか？」

「そうですね。いますぐというわけにもいかないでしょう。この蟠桃会が終わるまで十日あります。それまでに貴女の答えを聞かせて頂けると、嬉しいわ」

十日もあんのか!? リオのカーニバルだって、せいぜい三日だぞ？



まったく、ここの住民達はスケールが違うワ。

「分かりました。蟠桃会が終わるまでにはお返事致します」

「うーん……」

普通の中年のオッサンに戻った陽輝大将が唸った。

「なにあれ、どういうこと？ 西王母は、陛下になにか頼まれたのか？」

「それは考えられるな。あのオバ……いや、姐さんは、元は皇族でね。秦ちゃん陛下にとっては、遠戚になる。お前を役職に就けようと企んでる陛下にしてみりゃ、どんな手段でも使ってみようってことかもな」

「うーん……」

今度は私が唸ってしまった。

確かに陛下には二度の謁見でも『将神になってくれ』と言われた。

それを二回とも断って、この話は立ち消えたかと思っていたのに、そう思っていたのは私だけだったのか。

「私を将神にしたって、火雲宮側にメリットはないんじゃない？　ただ、監視下に置きたいってこと？」

「陛下にしてみりゃ、監視というより、なるべく自分の近くに置いておきたいってことじゃねーの？」

「……モノズキな」

「だよなあ」

「いや、お前が言うなよ」

と気さくにど突いた。

まったく、元帥はどこに行ったんだらう。蟠桃会初日だったのに。

西華逗留、三日目。

実はこのお祭り騒ぎの中、私は用意して貰った部屋で一人、仕事の続きをしいたりする。基本的には、毎日自由に遊んでいいらしいんだけど、昼夜問わず繰り返し広げられている宴会に積極的に参加する気にはなれなかった。私が、というよりも、私の肝臓が。

玉皇大帝は語学にも相当明るかったのか、『補完バージョン』のレポートで使われているのはどこぞの古代文字で、さらにそれも一種類ではない。私は中国語なら大抵どこの地方の言葉でも分かるが、現代で使われているものに限るので、この暗号解読は考古学の初心者が翻訳作業をするようなものである。

「…………ふう」

本当は、考えなければならぬことは色々ある。

『将神の再任要請』は、この世界で暮らしていく上では避けられないことなん

だろうか。

秦ちゃん陛下ならなんとか押し通せそうな気がするが、あのオツカサンに言われてしまったては、それなりの理由を提示しないと逃げられそうにない。

上大夫達の間では、未だに『黄龍の処遇』について意見が分かれているようで、となれば、陛下は私を将神にすることで、その問題が解決できると考えているんだろう。

(でも……、周囲が望むままに緑麗と同じことをやってしまえば、私がここに居る意味なんて、ない……)

一服しながら窓辺に立って、大きな月を見上げていたら、

「阿姐！ 呑みに行こうぜ！」

窓からひよっこり顔を出したのは白帝君だった。

「どこ行ってたの？ 初日から居なかつたけど」

「ああ、ちよいと結界張りにな」

「結界？ なんの？」

「んー？ ……厄除け？」

「なんだ、その半疑問形な回答は」

「まー、仕事だし。阿姐にはつまんねー話だって」

そう。脳天気な顔して、結構、腹芸もするんだよな、この『弟々』は。本当の弟々に通じる部分がある。

「おーい、阿姐？」

いまだって、姉弟のように接してはいるけど、彼だって本当は世間的にはお偉いはずの白虎聖君様で、黄龍のオプションの方に用があるのは当然と言えば当然なんだけど。

「もしもーし？」

といっても、私は私で一期一会のこの縁を大事にするしかない……よなあ。

「あのさ、白帝君」

「それだ」

「どれだよ？」

「いやー、なんか阿姐にそう呼ばれるのって、硬すぎてさー。できたら、もっとくだけて呼んでくれない？」

「以前の私はどう呼んでたの？」

「いや、前と同じにしてくれって意味じゃなくて、いまの阿姐がいいと思う感じ  
で」

あ、そうか。私がこの人に感じる親近感って、ここか、と思った。

「うん、まあ、それは追々ね。とりあえずはさ……」

「……？」

「呑みに行こう！」

「そう来なくっちゃな！」

白帝君の手を借りて、窓から外に出ると、今度は赤帝君にバツタリ出くわした。

「緑麗様、窓は出入りするものではないのですが……」

軽く頭を抱える赤帝君。そして、キツと厳しい視線が白帝君の方に向けられる。

「聖霄、緑麗様はお仕事中ではないのか？ それでなくとも、妙齢の女性をこのような時間に連れ出すなど、あまり褒められた行為じゃない。しかも……」

お小言が始まりそうな（いや、もう始まつてる）様子に、私と白帝君は、笑つて誤魔化し体勢に入る。

「まーまー、そう細かいこと言わずに、赤帝君」

「そうそう、蟠桃会中にそんな固いこと言うのは阿哥だけ」

「しかしですね……」

「いまから呑みに行くんだ。『阿哥』も一緒に行こう」

と、思いつきで誘ってみたが、赤帝君は少し困った顔をする。

「いえ、私は……」

「そーだそーだ！ タダ酒が呑めるのに呑まないのはお酒に失礼だぞ！」

「え！ 期間中ってタダ酒なの!？」

「ありや？ 知らなかったのか？ 費用は全部西王母持ちだぜ。太っ腹だろ？」

「そうか！ なら尚更だ！ 呑みに行こう！ 赤帝君！」

わいわい二方向から言われて、さすがの赤帝君も苦笑した。

「しかしですね……」

断りきれずに困っているというより、これは迷っている顔だな。

「迷った時は、直感！ 行きたいか、行きたくないか、さあ、どっちだ？」  
強引に誘うと、赤帝君が観念したように笑った。

「分かりました。お供します」



蟠桃会は無礼講——ということになっているけど、さすがにこの人は一市民が気軽に話していいような人じゃない。

しかも、私ときたら、聖霄と阿哥と三人で呑みまくった帰りなので、かなりまともじゃない。

まあ、まともじゃないからこそ、こうして話していられるんだけど……。

「月が綺麗であろう？」

「そうですね……」

かなり怪しい足取りで部屋に戻ろうとした途中、渡り廊下で呼び止められ、気付けば、若き天帝様と一緒にお月見をしていた。

「お一人なんですか……？」

と、酔った頭で、あの近衛の隊長を探したが、人影はなかった。

「いつも臣下が傍に居ては窒息するからな」

まあ、そりやそうだろうけど……。

「では、こんな酔っ払いがそばに居るのは論外ですね。お暇を——」

「緑麗、よいのだ。そなたは臣下ではない」

なんだよ、引き止めるなよ。

「私はそなたを臣下にしたいわけではないのだ。それを、勘違いしないで欲しい」

「はあ……」

「天界を救ってくれたそなたには、望むままの自由を与えてやりたい。それは、私の義務であり、そなたの権利でもあると思っている。だが、そのためには、どうしても代償が要るのだ、緑麗」

“代償”——。

そういえば、『昊ちゃんレポート補完バージョン』にも似たような言葉が出てきた。

『代償を払う覚悟があるのなら、全ての物事に不可能はない』

そんな内容だった。なにせ、古代文字なので大意しか要約できなかつたけど。

「この蟠桃会は、無礼講だ。なにか思うところがあれば、遠慮なく言って欲しい。それに、この場のことは、私の胸にしまっておこう」

秦帝は、見た目にはまだ高校生くらいにしか見えない。

でも、陽輝大将が教えてくれた話では、大体見た目年齢≡精神年齢だと考えていいらしい。

ということとは、この若き統治者も、本当ならまだ学校行って、ワクドキの恋愛したり、夜遊びを怒られたりしているような歳なんだろう。

なのに、東宮として英才教育を受け、色んな知識を詰め込まれて、狸のような官僚達を相手にしなきゃいけないなくなって、気の毒といえは気の毒だよな。

「では、一つだけ。私は多くを望んではいません」

「そうであろうな……。だが、それは私も同じこと。私もまた多くを望んではない」

「……」

「緑麗」

「ハイ……？」

「そなたをそばで見たいと願うのは、我俣だろうか？」

「……」

なんだか、いま、サラッと妙なことを言われた気もするんだが……。

「それだけの願いも叶わぬほど、火雲宮の玉座とは自由のないものだろうか」  
酔っ払いに言う台詞か？ いや、酔っ払いだから言うのか？

「城内で囁かれている噂を知っているか？ 緑麗」

「いえ……」

「先帝は将神に嫉妬して流刑にしたが、新帝は元帥に嫉妬しそうだ、とな」

自嘲気味に笑う秦ちゃん陛下が、いよいよ真剣なのが分かった。

が、私にどうしろと？

「火のない所に噂は立たない、とはよく言ったものよ。隠しているつもりでも、  
こういう想いは露見してしまうのだな。私の未熟さ故か」

そういうえば、思い出したぞ……。

玄都で、陽輝大将がポロツと言っていた台詞。

『九雷がちよつと不機嫌面してたのと同関係あるかもな』

なるほど、あれはこういう意味だったのか……。

元帥の場合は、嫉妬ではなく、『面倒事を増やしやがって』という意味が大きいのかもしれないけど。

でも、秦ちゃん陛下の肩を持つわけじゃないけど、人の想いは責められはしない。

私が周囲の迷惑顧みずに、本来居てはいけない場所に居座っているのも、結局はその『想ひ』故、だ。

たまたま、私は切ない想ひはせずに済んだけど、ままたま片恋の方がきつと、世の中多い。

「陛下、あの、ですね……、私は……」

あ、呂律が回らない。

「困らせたか。すまぬ。……だが、最初に言った通り、この場のことは、あの月しか知らぬ。そなたも忘れよ」

「はあ……」

確かに、忘れた方がいいかもしれない。

なにより、一過性の可能性が高いぞ、それは。

ベンツが通れそうな広い廊下だというのに、色んな所にぶつかりながら、なんとかフカフカベッドのある自分の客室へ辿り着こうと頑張った。

私の部屋は、確か、この先の角を曲がって、左側だったはずなんだが……、あれ、間違えたかな。入り待ちのファンがわんさか待ってる。

「千百番代だな……。なんのヨーダ、ダーシユベーター」

自分が言った冗談が最高に受けて、笑った。

そういえば、この黒い甲冑は、あの悪の権化みたいだな。

「うひゃひゃひゃひゃ……。それをいうなら、千客万来ッ！」

いや、マジでもう可笑しくって、笑い死にしそう。腰も立たなくなかって、いつの間にか座り込んでるし。

「この酔っ払いが……」

そんな、冴えたお馴染みの声が聞こえた。

「あ、きひやひやくん、どしたの〜？」

とりあえず、天ちゃんの前ではなんとか普通に喋ったが、テンション的にはこんな感じなのだ。

部屋の前まで来たら、なぜかこの悪の権化達が居て――。

そしたら、いつの間にかキサさんも居て――。

多分、その後ろには、背の高い恋人も居る。

「ねえ、私、キサさんの気持ちを置いてってるのかな……？」

「なに言ってるんだ？」

「いいの。オヤスミ……」

もう、面倒だから、この二人に全部任せちゃおう。

「待て、まだ寝るな、馨」

木佐は、一文字助宗<sup>すけむね</sup>を抜いて、襲ってきた甲冑の一撃を受け止め、弾いたが、横目で確認した沙龍はもう人割くらいは眠っていた。

「ムリ……、もう動けまひえん」

「聞きたいことは山程あるんだぞ。赤帝君は一緒じゃなかったのか？　なんだ、この鉄人18号みたいのは！」

廊下に設置されたチェストの上に甲冑が傾れ込み、その重みで派手に一角が崩れたが、木佐はさらにもう一撃を入れていた。

「阿哥は……知らにやい……。そいつは、多分、私の猛烈なファン……」

「構わないさ。見当はついてる」

ふにやふにやの沙龍の身体を掬い上げたのは九雷だった。

すると、沈没寸前の沙龍が急にデレデレになった。

「元帥、オカエリ……」

すぐそばで、かなり派手な音がしているというのに、こいつとききたら、この危



機能的状況を分ってんのか？——と木佐は苛立った。しかし、良心的に解釈するならば、沙龍のこれは自分や九雷への信頼、ということになる。

「真武君、丁度いい。試してみるか？」

「そうですね……。馨を頼みます」

本体の動きはそれほど早くはないが、無言の甲冑が繰り出す腕力のみでの攻撃には相当のパワーがある。

このままでも倒せないことはないだろうが、木佐も自分の本当の力というものを見てみたかったので、教わった通りに自分の『水行』全てを解放した。

沙龍の見た黒い甲冑というのは、紛れもなく『敵』だった。

しかし、『わんさか』というのは酔っ払いの見間違いであって、実際に木佐と九雷が遭遇したのは一体だけである。

追い払った、という形になったが、あまりに呆気なかった。

「邪魔が入れば即退散という手はずだった、って感じですね」

木佐は、一文字助宗を納めて言った。

「稼動実験か、脅しになれば上々くらいのつもりだろう」

「脅し……には成り得ていない気もしますが」

そう言つてのける木佐に、九雷も短く笑つた。

「しかし……」

木佐は九雷が肩に担いでいる沙龍を見て、呆れた。もう完全に眠っているようだ。

「危機感薄れたんじゃないか、こいつ。いまだって、僕達が来なければどうするつもりだったんだ」

「赤帝がなんとかしただろう。俺達が来たので、奴は向こうを追つたようだが」

「そういう問題じゃないですよ。一人で寝こけて、どうぞ命を狙つて下さいって言つてるようなもんだ」

「そう言うな、真武君。『危機感が薄れた』のだとしたら、沙龍にとってはそれは悪いことじゃない」

「え……?」

「違うか？」

「……」

違わないが、木佐は少々複雑な心情で九雷の言葉を聞いていた。

「今日はもう遅い。明日、打ち合わせの席を設けよう。追って連絡する」

「分かりました」

「身体の調子はどうだ？」

と、九雷が聞いてくるので、木佐は少し驚いた。

「さあ……。まだなんとも言えませんね。いまのところ、特にどうということはないですが」

「長時間、五行のフル稼働をさせると、慣れていないうちはかなり消耗するはずだ」

「ええ、気をつけます」

九雷が自分を気遣うのは、おそらく、沙龍の存在があつてのことだろうが、それにしても、他人を気に掛けるような人にはあまり見えないのだが。

もしかしたら、見せているほどに無関心ではないのかもしれない、と木佐は

思  
っ  
た。  
。

朝——だと思う。いや、昼かな。

「ううう、呑み過ぎた」

ベッドの上でのそのそと動いたが、まだ起き上がれそうになかった。

またしても二日酔いだ。なんだか、ここんとこずつとアルコール漬けで、いま、火を近付けられたら、簡単に引火するんじゃないだろうか。

こんなんでいいのか、我が天界ライフ（ここは仙界だけ）。

「薬……」

確か、ベッド脇のテーブルの引き出しに酔い覚ましの薬があったはず。

ヤク中のように、「クスリ、クスリ」と言いながら、手探りでそれを探す。

「大丈夫か？ 沙龍」

「あんまし……。 謝謝」

元帥がコップに入った水を渡してくれた。ついでに、探していた酔い覚ましの

薬も、引き出しから取り出してくれたみたいだ。

これは優れものの薬で、ホントによく効くんだ。神様達は、折角のアルコールが抜けるのを嫌うとかで、あんまり飲まないらしいんだけど。なんと言うか、豪気だよな……。

「……ング」

しかも、即効性があるので、一分も我慢してれば、この朦朧とした感じもスッキリしてくる。

「……ふう」

と、スッキリしたところで。

「……え？　ちよつと、待って——」

なんで元帥がここに？　初日からずっと居なかったのに。

「いつ帰ってたの？」

「昨夜な。覚えてないのか？　随分と楽しそうだったが」

「えッ……？」

き、記憶飛んでる……？

え、えーと、昨夜は白帝君と赤帝君とかなり弾けて呑んだのは覚えている。

その後――。

その後……。

その後？

ヤバイ。記憶がふっ飛んでる。

「あ、あのー、元帥閣下。昨夜の顛末を教えて頂けると有難いんですがー……」

「顛末もなにも、教えるようなことはないぞ。俺が戻ってきたとき、お前が部屋の前で沈没していた。それだけだ」

「……それだけ？」

「ああ」

「ホントにそれだけ？」

「……敢えて言うなら、一つあるか」

と、なぜか意地悪な微笑みを浮かべていらっしやるので、恐る恐る聞いた。

「な、なに……？」

「昨夜のお前は随分積極的だつ――」

ボフツ

思わず枕をぶつけてしまった……。この天界軍総司令を勤める御方に。

「それは聞きたくないです」

もう放っておこう。朝っぱらからこんな極甘モードに付き合えるほどの余裕はない。

やたら豪華な天蓋付きベッドから這い出して、着替えを始める。勿論、屏風の裏で、だ。

「あ、そうだ、元帥。いままでどこ行ってたの？　もしかして、またどこか行っちゃおう？」

「いや、今日は近辺には居る。挨拶回りくらいはするが」

ム、前半の質問をはぐらかしたな。

「そう……。初日に西王母に、『とりあえず面倒回避のために将神になっとけ』って言われたよ」

「西王母が？　また、随分と陛下もあせってるな」

フーム。これだけ言えば、それだけ分かるってところがすごい。



「で、なんて答えたんだ？」

「答えに窮したんで、引き伸ばした。蟠桃会が終わるまでには、はつきりさせないといけないみたいで……」

いつも水雲宮で着付けてくれる悠花がここには居ないので、この難解な着物も自分で着なくてはならないのだが、なんで帯が三つも四つもあるんだよ。

ええい、分からないじゃないか。

「沙龍、それについては、心配するな」

ん？ この帯？ でも、こつちをこう結ぶと、こつちが余るんだよ……。

「いいから、引き伸ばしておけ」

私が奮闘していると、元帥が屏風の上から顔を出す。

ちよつと、まだ着替えてるんですけど……、覗かないですよ。

「え？ 伸ばして結ぶの？」

「……そうじゃない」

と、見かねた元帥が笑って、着付け教室の先生のように帯を綺麗に結んでくれた。

「外野がなにを言おうと気にするな。したくないことをする必要はない」  
急に耳元で言われたので、心臓飛び出るかと思った。

「私のしたいようにしていいってこと？」

「そうだな」

「……分かった」

じゃあ、今日は仕事サボって、遊ぶか。

三日前の蟠桃会初日、予てからの打ち合わせ通り、西華の四方数キロの地点に、それぞれの四方将神達が降り立っていた。

目的は、一つ。西華を囲むようにして『四方結界』を張り、最適な五行フィールドを作るためである。

それが泰山府の要請の一つでもあって、『実験』の下地となるものだ。

しかし、木佐は生身の人間であり、玄武の真の力を解放する術を知らない。そのため、他の四方将神達が一瞬で済むことも、木佐の場合は二日かかった。九

雷は、自主的にそれを手伝ったのだ。

木佐にしてみればそれも意外なことだったが、彼がこの実験に協力している目的を考えればそれも当然か、と思った。

そうして、赤帝君と白帝君の方が早く帰還するであろうと踏んだ九雷は、彼らに沙龍の護衛を頼んでいたのである。四方将神がそばに居ない隙について、『敵』が動く恐れがあったからだ。

窓の外に広がる桃花を眺めながら、赤帝君は多少の感慨を持ってこの場に同席していた。

この四人が志を同じくして、一堂に会するのは、実に何千年ぶりなのだ。もつとも、赤帝君が懐かしく思い出した昔の記憶の中に、今、この場を仕切る九雷は居ない。

「……その交換条件で、太上老君の同意は取り付けた。問題は、泰山府君の方だ  
が——」

九雷が、改めてその件について説明した。

四方将神という立場は皆同じだが、軍部の階級があるので、自然と、こういった場面では九雷がまとめ役になるのだろう。

各々の性格もある。

赤帝君は自ら進んで上に立つタイプではないし、白帝君はどこまでも自由人だし、木佐は新参者であるという自覚もあって、控えめだ。

「しかし……、緑麗様の意思もあるだろう。仮に泰山府君が百パーセント保障したとしても、これでは騙しているようなものだ」

赤帝君が、当初から抱いていた懸念を呟く。

「例えそうであれ、最終的に沙龍が納得すれば問題はないだろう」

「いや、馨は薄々気付いてると思いますよ。ただ、なにも動かないのは、貴方を信頼して完全に任せているからだと思う」

木佐がそう言うと、九雷は元より、赤帝君が微妙に顔をしかめた。

「実験内容を、か？」

「いや、具体的な内容までは分かってないと思うが、この蟠桃会の裏に流れてい

る空気というか、その気配には気付いてるはずだと思う」

「だよな。昨夜だって、甲冑ロボが潜んでるのに気付いてたから、天ちゃんに大人しく口説かれてたんだと俺も思うぜ」

と、白帝君が昨夜の一幕を思い出して言った。

「は……？」

木佐が素っ頓狂な声で聞き返した。

「馨が？」

「ああ、俺と阿哥には気付いてなかったと思うが。天ちゃんはマジだったぜ」

「なんとも物好きなの……」

言ってからしまった、と思った。その『物好き』がこの場に居るのだ。

「……」

「……」

「……あ、いや、それで？」

「まあ、天ちゃんのはかない初恋はどうでもいいんだ。問題はアツチだろ」

「結局、生け捕りにできたのか？」

九雷が腕組みをしたまま白帝君に聞いた。

「いや、それがよ……。旦那の言う通り、『人形』だった。甲冑の中身はカラ。しかも、自爆しやがったぜ」

「証拠隠滅のためだろうが、あのような精密機器を造れる組織は限られてる。南方軍の研究施設か、崑崙の科学技術室だ」

昨夜、白帝君と一緒に甲冑を追った赤帝君が、苦々しく言った。

「……どっちなんです？」

木佐は、赤帝君と九雷の両方に聞いた。先に答えたのは九雷である。

「可能性としてはどちらもありうる。だが、崑崙側は動機が弱いな……」

「ラボ（注1）だろう。敖丁（こうてい）が居ない今、実権は先代が握っている」

赤帝君はそう断言した。

「……しかし、どっちにしろ、しばらくは仕掛けてこないだろう。ただでさえ、出所が露見すれば玉碎覚悟の蟠桃会中で、数日中にはあの二人も顔を出さだろうからな」

そんな密談の中で、木佐は、人事のように思っていた。

まったく馨も大変だな。どこに行っても騒ぎの中心になってしまいうらしい――と。

コーヒ―を淹れて、一服して。

でも、結局、昨夜の奇行は、なに一つ思い出せなかった。

嗚呼、またしても酒に吞まれてしまった……と、溜息をついたところへ、

「阿姐！ 呑みに行こうぜ！」

ヒョッコリと窓から顔を出すのは、昨夜（多分）酒に吞まれなかった若き白帝白虎聖君。

「昨日のビデオ・テープ回してんじやないんだから……」

台詞も角度もなにもかも同じじゃないか。

違うのは、夜空と昼空の違いだけ。

「……」

でも、私は実は知っている。

この『弟々』が、私の護衛係なのだということ。

「行かないのか？」

「私はしばらく酒は控える。お前達に付き合っただら、身がもたん」

「そっか。じゃあ、どっか遊びに行こうぜ？ 折角の有休だもんよ」

「遊びについて？ 例えば？」

「そうだな。釣り？ ゲーセン？ あ、ドライブでもいいぜ」

「ドライブは絶対却下……」

方向音痴のくせにいい度胸だな。お前は。

(注1) ラボ……天界四方軍の一つ、南方軍の研究施設の総称。



数日、白帝君と遊び歩いて、最後は麻雀に行き着いた。

「呑む・打つ・買うは、男の甲斐性ってね。俺を入ると後悔するぜえ？」などと、ヤル気マンマンの陽輝大将。

「赤帝君は？」

と、キサさんは、いつものように攻撃的な捨て牌を切っている。

「阿哥は博打は嫌いなんだ。堅物だからな」

答えるのは白帝君。

かなり玄人の手つきだ。

「うん、そんな感じだワ……」

はてさて、どこまで地上の麻雀が神様達に通用するのやら。

一人でカモられるのが嫌だったので、キサさんを誘ったわけだけど、やっぱり私のギクシヤク感は変わらない。

(……うーむ)

とりあえず、上海で教わった通りの打ち方で、手だけ動かして、私はボーツと色々なことを考えていた。というか、ほとんどずっと牌は見えていなかった。

(『変な気を遣うな』って言ってもねえ……)

はい、そうですね、と脳天気にくくぬく過ごしてたら、私はきつと天罰が当たるとは思わないだろうか。

大体、日本を出てきたのだから、全て私の都合なのだ。

キサさんは東京で大学を中退し、恋人が居たのをあっさり捨てて、私に付き合う形で中国に来たわけである。

しかも、『あっさり』というのはあくまでキサさんの説明の仕方であって、私が見る限りではそんなに『あっさり』したものでもなかったような気がする。

特に、お相手の美青年は、繊細そうな善人だったから、キサさんにフラれて自棄になってるかもしれない。

キサさんも、多分、『借金取りに追われて日本に居られなくなった』とか、そういう説明をしたんだろうし。そんな理由で別れることに納得できる恋人もそう

そう居ないだろう。

常日頃から、私はキサさんの恋人陣にはよく思われていなかった。

それは逆も然りで、私の付き合った人はみな、キサさんのことをよく思っていなかった。

そりや、恋人の同居人を快く思わないのは分かるけど、百パーセント同性感覚だというのを分かってくれない人達はたまに嫉妬に怒り狂って、修羅場になったことも一度や二度じゃなかった。私にしてみれば馬鹿馬鹿しいことこの上ない。

「沙龍……」

しかし、それを考えると、なぜかキサさんのことを気に入っているらしい元帥はやっぱり特別だと思うのだ。

元帥の懐が大きいのか、それとも、『気に入っている』には、別の意味もあるのか、それを考えるとちよつとゾツとするけど、確か元帥は『両刀』というよりは、『男も抱ける』という程度らしいので、そこら辺は気にしないようにしよう。キサさんが恋のライバルになってしまったら、私は戦う前に白旗確実だ。

「馨……」

いや、そんなことはどうでもよかった。

まあ、この美人のことだから、その気になれば恋人の一人や二人、すぐできるだろうけど、この人の行動は恋愛によっては左右されない。

例えば、どんなに最愛の恋人が『会いたい』と拗ねても、仕事の依頼がくればクライアントの方を愛するような人だ。

「阿姐……」

いつの間にか考え事も脱線気味に、延々と答えが出ないループの中に居たらしい。

「エッ……、あ？ なになに……？」

無欲で打ってたら、いつの間にかバカ勝ちしていた。

上海のあの老先生は正しいな。

“勝つと思うな、思えば負けよ”、と誰かも歌っていた。

「お前、強すぎだろ……、一体誰に習ったんだよ」

陽輝大将はもうやめた、と言わんばかりに雀卓に脚をのつけた。

「ああ、上海に居たちよつと変わり者の老人で……」

その人の一番弟子だった人が、私の初恋の人である。

「それって……」

と白帝君がなにか言いかけたとき、

「おお、ここに居るではないか。なんじゃ、道君（※太上道君のこと）みたいなことしおって、お前さんがた」

見たことのある爺様が、見たことのない爺様を連れて現れた。

「た——、太上老君!？」

さすがの無法者大将も、最高神の登場に、雀卓にのっけていた脚を引っ込め、立ち上がる。

「いやー、久しぶりに来たら、迷ってしもうた。地獄の大王はアテにならないのう」

太上老君が言った『地獄の大王』とは、泰山府君のことだった。

なにやら超偉い爺様二人が一緒にご登場という、なんとも歓迎したくない場面

だが、そこに仙界の大ボスたるオツカサンも集合し、それだけで凄まじい妖気が漂ってきた。

さらに、桃園で迷子になったハタ迷惑な老人二人の搜索で元帥までもが登場。

(……なにかあるの?)

と、目で問うと、彼は意味深な微笑を浮かべた。

「太上老君に泰山府君。ようこそ西華へ。長年、ご招待していますのに、いつもご欠席で、悲しく思っておりますわ」

と、演技派の西王母。

「まあ、年寄りに長旅はキツイのじゃ、許されよ」

太上老君がそう言えば、

「にしては、随分精力的にやつとるようじゃのう、お主。結婚するとか言ってたのは、いつものジョークか」

泰山府君が言い返す。

「おお、そうそう。それで思い出したわい。王母殿、誰に頼まれたか知らんが、その娘ツ子は儂がプロポーズしてあるので、宮仕えにしてくれるな」

「……」

あれ？ それって、もしかして、私のこと……か？

「おい、……沙龍、沙龍！」

と、陽輝大将に小声で袖を引つ張られ、桃花の木の裏側に連れて行かれた。

「ナニナニ？ なんなの、あの妖怪大戦争は」

「あの三人はな、いわば『三竦み』なんだよ」

「はあ？」

「つまりな。西王母は、太上老君に弱くて、泰山府君に強い。太上老君は、泰山府君に弱くて、西王母に強い。泰山府君は、西王母に弱くて、太上老君に強い。

……以上、覚えたか？」

「いや、ムリ」

「気合で覚えろ。とにかく、滅多に揃わない三人が揃っちゃった。これは絶対なにかあるぜ」

「元帥が連れて来たんじゃないの……？」

「とにかく、この力関係だけは覚えておけ。いいな？」

と、コソコソ話が終わって、三大魔物抗争の現場に戻る。

「とうとうことでじゃな、緑麗」

途端に太上老君に名指しされた。

「は、はい……？」

「俺からの提案なんじゃがのう。お主も元将神。戦って勝ち取るというココロイキを理解してくれると思うのじゃ」

「勝ち取る？ なにを……？」

話が全然見えない……。

元帥が、私を含めこの場に居るみんなに、その太上老君の趣旨を説明してくれた。

「蟠桃会最終日に武闘大会を催し、そこでの勝者に各々の望むものを進呈するという企画だ」

「ぶ、武闘大会……？」

「左様！ 単純明快に、己の欲するものは、戦って勝ち取る！ これが、そもそも原始の生き物の姿勢よ！」



「……」

また、このジジイ、なにを言い出すんだ。

「私も、その趣旨には概ね賛成致しますけど、宜しいのですか？ そんな大それたことを……」

西王母は言うほど心配はしていないようだ。

「別に構わぬよ。秦も許可したし。どこからも文句を言われる筋合いはないぞ」

「まあ、蟠桃会の趣旨には符合するわな。要はお祭り騒ぎにして、強引に政治問題も片付けようということじゃろ？」

そして、泰山府君は結構フレキシブルだ。

「勝ち取ったものの効力は、儂らと秦の四人で保証すればよい。大抵は、それでカバーできよう」

「『勝ち取る』ってのは、なにを、なんです？」

よく分からなかったので、聞いてみた。

「それは勝った者による。つまりじゃ、お主は、将神の肩書きなど要らぬ、自由な身分を手に入りたい」

「まあ、そうです」

「ここらへんが、やっぱ凄い。」

「そんなこと、この爺様に言った覚えはないのに。」

「しかし、秦は、お主を将神にしたい。あわよくば嫁にしたい」

「――」

いや、それはちよつと段階的にかなりすつ飛ばしてる気もするし、こんな面前で言うようなことでも――、と思つたけど、面々を見回してみると、別に誰も驚いてはいない。

なるほど、すでにそれは暗黙の了解事項なのか。

「そして、王母殿は、天仙界のこの微妙な関係をリセットして恒久的平和を願つておる」

「……」

「そうだ、腹黒政治家ではあるけど、西王母の目的は結局そういうことだ。」

「それらの願いを、武闘大会の優勝者一人が叶えられるという、ドリームチャンスじゃ。反対する者もおらんじやる。で、儂は、公衆の面前でお主にプロポーズ」

した身だからな。建前では、儂が勝ったら、儂と結婚して貰うことになる」

「は、はいいい……っ!？」

「建前では、と言うたじやろう。最後まで聞け。儂も、この年で参加するのはキツイのでな。儂の名代として九雷に出てもらうことにした。それならば、問題あるまい？　つまり、九雷が勝ったら、お主は九雷と結婚せい」

「は、はあ……」

なにその強引な理屈。

いや、まあ、この爺様と結婚するよりは遥かにいいんだけど……、いや、よくない！

だって、だって——。

「では、私の名代は九玄に勤めて貰いましょう」

早くも乗り気な西王母。

「一般参加はありますか？　太上老君」

あ、陽輝大将のこの顔は……。

面白そうじゃねえか（俺もまぜろよ）、って顔だ。

「ありありじゃ。しかし、各々『希望優勝賞品』は事前に申告して貰う。場合によつては儂がハネるがな」

「その判断基準は？」

「心配するな。『公序良俗』に反しない限り、許可しよう」

「陽輝よ、なら、ワシの代理として出てくれるか？　ワシも数合わせで出場せねばならんのだが、正直、直接参加は面倒でろう。希望賞品はお前さんの好きにしてよいから」

泰山府君先生がついでのように言う。名誉や賞品は本当にどうでもいいって感じだな。

「いいでしょう。お名前を借ります」

「緑麗、お主もよいな？」

太上老君が念を押す。

「……ってことは、私が、自由気ままに平穏に暮らしたいなら、戦って勝ち取れ、と？」

「そういうことじゃ。別にお主が自ら出場せんでも、誰か代わりの者を立ててもよ

いぞ。但し、さつき言った確定メンバーはもう駄目じゃ。早い者勝ちじゃからのう」

「しかし……」

「秦が勝ってもよいのか？」

「それは困る！」

「ならば、お主も出場せい」

「分かりましたよ……」

「では、開催は蟠桃会最終日ということ。なんだか、ワクワクしますわね。そうだわ、観客席の設置の手配とかもしなければ……っ」

このオツカサン、馬券握り締めて叫ぶタイプか。

しかし、とんでもないことになったなー。

「ン……？　ちよつと待って下さいよ？　例えば、一般参加の『温泉旅行』所望の人が勝った場合は？　将神の任命云々の問題解決にはならないじゃないですか」

「単なるイベントじゃからのう。別にそれはそれでよいではないか」

「……」

なんだか、段々分かってきたぞ……。

こここの住人達の思考パターンってものが。

蟠桃会の開催されている会場の端っこで、顔をつき合わせて話す三人組が居た。招待客ではないのだが、今の上司の護衛ということで来ている。

「で、お変わりはなかったのか？」

「しかし、いいなあ……。俺も緑麗様にお会いしたかったのに、なんでお前だけ……」

「泣くな、チョーサク、今の緑麗様は、昔のご記憶がないのだ。俺のことだって忘れてた」

そう言うのは、杜順少尉である。数ヶ月前に、沙龍が火雲宮に呼び出され、悪質な『テスト』を受けたとき、そのアシストをした、あの軍人だった。

「しかし、正直、驚いた。緑麗様の戦闘能力は、ちっとも変わってない。物理的な力は以前に比べれば、遥かに下回っているのかもしれないが、なんと言うかあの気迫がまるで同じなんだ」

それを間近で見ていた杜順（通称ジュン）は、戦慄すら覚えた。

情けをかけてはいけななのが戦場の常とはいえ、あのとときの沙龍は、確かに全員殺すつもりだったのだろう。

「あつという間に、十人の近衛兵を倒しちまった。宰相殿が選びに選んだ精鋭達だったんだが……」

なぜ、一介の少尉であるジュンがそこまで内情に詳しいのか、なぜ『偶然』あの場に居たのか、それは、彼らの今の上司がそう手配をしたからである。

「ということは、緑麗様、ひよつとするとひよつとするかもしれないな」

同僚の蒋爾（通称シヨージ）が赤鉛筆を取り出して言った。

「しかし、緑麗様のハンデを考えれば、やはり九雷元帥が妥当じゃないか？」

と、三人組の最後の一人、趙作（通称チヨースク）が、言った。

彼らは、かつては、緑麗が北方軍大将であった折に、大将付きの副官をしていた三人であった。いまは、表向き『琥珀宮駐屯兵』となっているが、その実態は西海龍王敖閏の私兵のようなものだった。

「あれ？ ……杜順少尉？」



そこへ、タイミングよく通りかかったのは、散歩中の沙龍であった。小龍を肩に乗せ、一人でこの長閑な桃園を散策している、という感じだ。

「ハッ、緑麗様ッ！」

「あの時は有難う。おかげで助かったよ」

「勿体ないお言葉、光栄でありますッ！」

ジュンはバネのように立ち上がって、最敬礼をする。

同じく、立ち上がったショージとチョーサクが、沙龍を取り囲んだ。

「緑麗様！ お会いしたかったです！」

「御懐かしゅう御座います！」

むせび泣く大の男二人。

「え？ ちよ、ちよっと待って、この二人は誰？」

ジュンが軽く説明すると、沙龍は納得した。

「……といっても、悪いんだけど、覚えてはいないんだ。ごめんね」

「いえ！ それは当然であります。我々は、こうして再びお会いできただけで

も！」

「なんだか、お変わりになられました……？　いえ、お姿ではなく……」

チヨースクが不思議そうに言うのには、それなりの理由がある。

かつての緑麗は、彼らにとつて、『脳天気で放っておけない上官』であると共に『一番怖い人』でもあったからだ。

「こう申し上げては失礼かもしれませんが、お優しくなられたというか……」

「あなた達から見た緑麗って、どんな人だったの？」

「と、仰られても、一言では申し上げられません……」

「いや、それをなんとか一言で」

「勿論、尊敬する上官であります！」

チヨースクは、当り障りのないことを言う。

「いや、もっと掘り下げていいから。それに、どちらかと言うと、賞賛じゃない方を聞きたい」

「はあ、そうですね……、なら……、酒乱童子？」

「それを言うなら酒呑童子では……。ジュンは？」

「……絶対無敵破壊神？」

「ロボットものかい……。ショージは？」

「……お前の酒は俺の酒？」

「なるほど、なんとなく、分かってきた……。…」

沙龍は、三人が囲んでいた紙片に気付いた。

「それよりも、気になることやってるね。……。どれどれ」

それは、先ほど号外で出された武闘大会のお知らせだが、出場者のところに赤鉛筆で倍率が書き込まれている。要するに下馬評だった。

当然のように、今大会の裏では、賭博が行われているようだ。

「このDHってのはなに？ designated hitter (指名打者) ？」

「いえ、dark horseの略です。緑麗様も、真武君も以前のお姿ではないので、未知数ということだ」

「全体評はどんな感じ？ 忌憚のない意見が聞きたい」

「そうですね、今のところ、一番人気は九雷元帥閣下です。しかし、天帝陛下も御自らご出場されるとかで、ちよつと分かりませんね。あの御方は、『天帝』の特権をお持ちですから」

	名（代理出場）	希望賞品	倍率
1	太上老君（九雷）	緑麗との結婚	1.5
2	泰山府君（陽輝）	仙酒の輸入解禁	2
3	西王母（九天玄女）	天仙界平等条約締結	2.2
4	秦帝	緑麗の将神着任	1.7

以上、最高神三名及び、主催者による内訳。  
尚、この四名により各自の優勝賞品の効力は永久に保証される。

5	緑麗	あらゆる辞令の拒否権	DH
6	燃燈道人	三界の完全不干渉	1.8
7	赤帝君	四神府予算増加	2.6
8	白帝君	有給休暇一年分	3.7
9	真武君	高級有田焼和食器セット	DH
10	清虚道德真君	徒弟制度廃止	2.5
11	敖閼	この大会を毎年主催しろ	5.5
12	太乙真人	最新式フットバス	5.5
13	普賢真人	Wカップ観戦チケット	4.7
14	西海龍王	南の島リゾート生活	3.1
15	北斗星君	クールベッパーのクーポン券	2.4

※以上、エントリー順。出場者受付中。

「天帝の特権って？」

「ご存知ないんですか？ 天帝陛下は、ただ一人、五行の全ての力を自由に行使できる御方です。やはり一行マイスター（注1）では敵いません」

だとしたら、トーナメントでは会いたくない相手だな、と沙龍は思った。

「燃燈道人と陽輝大将も五指に入ってますね。まあ、ここらへんは順当ではないかと」

「その燃燈って何者？ 娘々よりも評価が高いってことは、かなりの達人？」

「我々はあまり知りませんが、燃燈道人は、九玄殿と崑崙の双壁を成す武人と言われています。人望も高いそうですよ」

「ふーん……。飛龍の評価が低いのはなんで？」

「えーと、敖開様のことですね？ 確かに、あの少年の力とスピードは天界随一なのですが、なにぶんそれが生かしきれていないので……」

「なるほど。聖霄も同じ理由でこの倍率か……。まだ締め切られてないんでしょ？ 増える可能性は？」

「そうそう 錚々たるメンバーですからね。ここに割って入ろうという御方は、もういない

んじゃないですか？」

「うーん、もう一人割って入ってきそうな予感もあるが……」

沙龍が思い浮かべたのは、あの近衛の軍人である。

「しかし、我々は勿論、緑麗様を応援しておりますッ！　どうか、見事優勝を勝ち取って下さい！」

ジュンが顔を紅潮させながら言ったが、沙龍は冷ややかにその手元を見ていた。

「アンタ、それ、『九雷元帥』の券を握り締めて言うセリフじゃないんじゃないの……？」

(注1) 一行マイスター……自身の属性行を最高位まで極めた者のことを言う。四方将神は当然、全員が『一行マイスター』である。

自分を含め、周りの方々は忘れていかもしいれないが、私には仕事があったのだ。

遊び呆けてるわけにもいかず、今日は一日、部屋に籠ってデスクワークをしていたのだが、夕方になって飽きたので、日課になりつつある散歩に出てみた。

当然、蟠桃会開催中のいまは、あちこちで酒宴が繰り広げられている。その脇を通ると、何人もの知らない人達に声を掛けられ、期待してますだの、頑張ってくださいだの言われる。私が、かつての将神の生まれ変わりであるということのみんな知っているらしい。そして、数日後に行われる『武闘大会』に出場するとうことも。

いまや蟠桃会の酒宴の話題は、専ら、その『武闘大会』だ。  
(まったく……)

このなし崩しの、お祭り騒ぎ的展開はなんなんだ。

私はこれでも色々考えなきやいけないことがあるというのに、いつの間にか一部の方達の優勝賞品にされ、武闘大会の出場も勝手に決められ、この騒ぎの中心に居る。

人間としての寿命を、ベタ惚れしちやった恋人と平穩に（ラブラブに）過ごすつもりだったのが、どこをどうしたらこうなるんだ、まったく——。と、ちよつとトゲトゲしながら桃木の枝をくぐると、その先に、私の知り合いの中でも一番雅な天界人を発見した。

（あ、ドクターだ）

そういえば、ドクターには聞きたいことがあつたような気がする、と思つて、近付こうとしたが、やめた。ドクターの隣には九玄娘々が居たからだ。

（デ、デート？ かな？）

美男美女で絵になる二人だが、娘々は半分仕事モードな顔をしていた。

（うーむ……）

気になるところだけど、やっぱ覗き見は良くないよな。

心の中で「頑張れ、ドクター」とエールを送るだけにして踵を返したとき、



「これはこれは、緑麗チャン——」

こんな幻想チャイナな桃林にあまりにもそぐわない、洋風の格好をしたオジサマが、ニコニコしながら近付いて来た。

緑麗の昔の知り合いなんだろうけど……、紫のスーツに、黒シャツに、ゴールドのネックレスだとう？

せめてもの救いは、その顔が濃いラテン系ではなかったことくらいか。

「転生後も、お美しい。一瞬、桃花の精が舞い降りたのかと思いましたよ」

しかし、セリフは思いつきりラテン系だ……。

「貴女が天界に戻ってこられたと聞いて、お会いできるのを楽しみにしてました」

「……?」

誰なんだろう、この人。

醸し出す雰囲気は『La vie en rose』って感じだけど、いま、一瞬、ピリっと空気が震えた。ちよつと只者じゃない気がする。

「ウチの愚息もご迷惑をおかけしているみたいで、申し訳ない」

「息子……？ えつと……？」

と、この顔に似てる知人を必死に脳内検索してみたが、ヒット数0。困惑顔をしてみせると、やっと気付いてくれた。

「ああ、そうでした。貴女には昔の記憶がないんですね。——では、初めまして。敖開のパパです♪」

「は……？ せ、西海龍王殿、ですか？」

こ、こんな、ダンディエスト中年が!?

しかも、飛龍とは全然似てないし！

「いまは勘当しているんですがね——。あ、そうそう、緑麗ちゃん」

「は、はい？」

「武闘大会、出るんだって？」

「はあ、まあ成り行きで……」

「まったく、陛下も酷なことするねえ。こんないたいけな女の子を無粋な闘いの場に引っ張り出そうってんだから。いくら神童でも、女性を大切にできなきや、為政者失格よー？」

おっとお……、さすが龍王様。

冗談だとしても、天帝陛下のことをこんな風に堂々と批判できる人ってのはそういない。

龍王というのは第一位の官位であり、本人が行政上・軍事上の役職を兼任してない限り、かなり好き勝手やっていいという話なので、このオジサマの悠然たる言動はそこらへんから来ているのかもしれない。

「まあ、それはいいとして。せっかくの蟠桃会です。どう？　一緒に、僕の霊獣でドライブでも♪」

「えーと……」

その格好を裏切らない言動ではあるんだが……。どうしたもんか、と考えあぐねていたら、

ボボボボ……

と、馴染みの音がすぐ後ろに聞こえる。

これは、風火輪の作動音。

なんか、私のすぐ背後に居るんだけど……多分……飛龍が……。

「親父——」

「おや、僕ちゃん、久しぶり」

「緑麗に触るな。殺すぞ」

「親の権威も地に落ちたと見えるねえ……。僕ちゃんに、パパが殺せるかなあ？」

カチーン……

あ……。飛龍が切れたかも。

「……やってやる！ 覚悟しろッ！」

早業で構えた飛龍の金磚が至近距離で光を放ったが、西海龍王は何事もなかったかのように手にした扇でそれを弾いていた。さすがだ。

しかし、あれ？ 確か、蟠桃会中、武器の所持は禁止、とかだったような……。

ジャキン！ ドカーンッ！

風流な桃林が、途端に修羅場の親子喧嘩の場となる。

嗚呼、もう、静かに悩むこともできないわけね……。

「沙龍、そこを退け——ッ！」

「はう!？」

今度は、九玄娘々の叫び声がして、反射的に身体を伏せた。

しかし……!!

「にや、娘々!? んげッ! そ、それは……!!」

「あの親子を止める方法はコレしかないのだ!」

娘々が振りかざす巨大ハンマーが、桃の木を抉っては、倒している。

「飛龍、やめんか、貴様——ッ! 西海龍王殿ッ、御免ッ!」

「あ、九玄チャン——」

なんか、大変そうって言うか、楽しそうって言うか……?」

「……はあ」

大体分ってきたぞ。

仙界の仙道達も、天界の神様達も、要は、みんな『破茶目茶』なのだ。

そんでもって、みんな、それを結構楽しんでるんだよな。

もう、放っておこう。さ、仕事、仕事——。

「お前、余裕だな。明後日は武闘大会だぜ？」

デスクワーク中の私に、陽輝大将が差し入れを持って来てくれた。

その肉まんを頬張りながら、私もちよつと一休み。

「いまさら一日二日休業したところで高が知れてる。そう言う陽輝大将こそ」

「まあ、俺は別になにがなんでも優勝しなきゃいけないわけでもねえし」

この人が泰山府君の代理になったのも、単なる成り行きだ。

(あ——！)

急に思い出した。

泰山府君って、私を蘇生してくれたとかいう神様じゃん！

この前会ったのに、お礼を言うの忘れてたよ。

「そーいや、お前、真武君と喧嘩でもしてんのか？」

「え？ そんな風に見えた？」

「ちよつとな」

「あゝ、喧嘩じゃないんだけど……」

「なんだよ？」

と、このオツサン顔を見てると、話してみたくなるから不思議だ。

「ドクターあたりになんか言わせると『幸せ怖い病』ってところかな……」

「なんだそりゃ？」

「私だけが変わっちゃったみたい。でも、キサさんは変わってないもんだから、どうやって接したらいいのかわかなくてのが急に分からなくなっちゃって」

最近の私の苦悩を説明したら、一言で済まされた。

「お前って、バカだったんだなあ……」

「ム……、なにその物凄い感嘆の仕方」

「バカだろ？ そんなの、簡単な解決法があるじゃねえか」

「なにに？」

「こつちで真武君に恋人作ってやれ。それで解決する」

「はあ、と仰いまして。キサさんの場合、ちよつと事情が特殊っつーか」

「ああ、アレだろ？ 結構、多いんだぜ、ここの連中は。そこらへん、リベラル

な奴が多いからな」

「ホー……」

と、陽輝大将をジッと見つめていると、

「待て、沙龍。俺は違う」

「だろうとは思ったけど」

「まあ、真武君のことは任せとけ。俺がなんとかしてやる」

「……頼むよ」

なんか頼もしいと言うか、単に面白がってるだけと言うか。

この人も、『破茶目茶』なんだよな、結局……。

「そういや、奴も出場するんだってな。今度の武闘大会」

「なんだよね、これが。キサさんもなに考えてんだか……」

キサさんのことだから、えー加減な理由で面白がって挙手をしたとは思えない。絶対、なにかあるな。

そうこうしているうちに、蟠桃会最終日、そして武闘大会開催日となった――



朝一の鳥のさえずりを聞くのは久しぶりだった。緊張してるのか、えらい早く目が覚めてしまったけど、まだベッドから出たくなかったのでウトウトしていた。

今日は例の武闘大会が開催される。

ふざけた優勝賞品を希望している方々は別にして、この大会は、優勝する人によつて、この後の展開が大きく変わる。超主観で言えば、一番いいのは私が優勝すること、一番最悪なのは秦帝が優勝することだ。

(だけど、勝てる気が全然しないってのが、めっちゃめっちゃ情けない……)

以前は、どんな強敵が現れたって、負ける気がしなかった。客観的に見て負ける闘いだろうが、数値の上で敵が勝つていようが、最後には私が勝つ、といつも思っていた。実際、私はそうやって勝ち続けてきたのだ。

だけど、それは結局、井の中の蛙——地上世界での話だった。

神様達は、強い。

ヒラやザコはいいとしても、大将クラスの神様には、私ははっきり言って太刀打ちできないだろう。

以前、陽輝大将と仕合った時だって、彼は仙界の境界内で充分に力が発揮できないにも関わらず、遊んでいた。

それに、いまひとつモチベーションが上がらない理由として “お遊びだから” っていうのがある。

いままで、私は命賭けでない『本気の闘い』なんてしたことがない。こういうお祭りのイベントに、どういう位置付けで参加したらいいのか、正直言っ分らないのだ。

にしても、殊、天界に来てからは、初めてのことばかりで戸惑う。

環境がどうの、というだけではなく、いままでの自分じゃない自分とか、らしくない自分に。

『これ』もその一つ。

例えば、こんな風に、初めて見る恋人の寝顔を、こんなにも幸せな切ない気分

で眺めている自分とか。

そんな些細なことに、本当はすごく戸惑っている。

「……沙龍？」

起こさないよう、細心の注意を払っていたつもりだったのに、私の視線を察したのか、恋人が目を覚ました。

「残念……。もう起きちゃった」

「……？」

「なんでもない。おはよ」

「珍しいな。お前が先に起きているなんて。よく眠れなかったのか？」

「そうでもないよ」

「進退が懸かっているとはいえ、所詮お遊びだ。そう身構えることもない」

これは自信に裏打ちされた言葉か……。いまの私には言えないな。

「うん……」

「だが、お前を闘わせるのは、これで最後にしたいな」

「私は、別に、闘うのは嫌いじゃないよ」

というよりも、好き嫌い以前の問題だったのかもしれないけど。

「護られるだけは嫌か？」

「分からない……けど、貴方に護られるのは悪くないと思う」

そう言うと、元帥が微笑んだ。

「ん……？ 違うな。貴方以外には護られたくはないってのが本音かな」

「沙龍。俺がここ数日、正確に言うと数ヶ月だが、なにをしていたのか、分かるか？」

おっと、ようやくそのお話ですか？

「……推測では色々」

「構わない。聞かせてくれ」

「多分、遡るのは新帝即位の前後で、『元将神』の処遇について上で揉めたのが始まり。原因は簡単。麒麟が滅ぼされ、残った黄龍の力が一般人の自由になるのは、為政者達にとっては色々不都合だから。だけど、天帝を始めとする大半は、問題無しと判断した。にも関わらず、神獣の脅威を拭いきれない一派が事を起こそうとした」

つまり『元将神』の排除だ。彼らはまず、その人物が本物かどうか嫌疑をかけて、追放しようとした。

が、その目論見は失敗して、首謀者の一人である宰相は、失脚した。というか、させられた。

「でも、敵はまだ残ってる。本当の黒幕は用心深く、姿を現さないし、尻尾もつかませない。だから、それを炙り出して、できれば一網打尽にしようと考えてる人が隣に居る……。そんな感じ？」

「上出来だ。だが、お前の読み方には、大事なことが抜けている」

「大事なこと……？」

なにか読み誤ったことがあるんだろうか？

「ヨシ！」

キュツと帯を締めて、気持ちを引き締めた。

この日のために、元帥はいわゆる『戦闘服』を色々用意してくれたんだけど、

やっぱり鎧とか鎖帷子は着ける気がしない。

せめて私の一番の長所であるスピードは殺さないようにしないといけないので、この軽装の拳法着にした。こんなん着てたら、自分が日本人であることを忘れそうだけど、まあ、いいさ。私は中国生まれ、中国育ちの無国籍。

「沙龍、支度は済んだか？」

「うん、お待たせっ!？」

部屋を出ると、黒装束の元帥閣下が、長剣を片手に立っておられた。

「カ……ッ」

叫びそうになって、ハッと口を押さえた。

「……どうかしたのか？」

「あ、わ、いや、なんでもな……」

くはないけど、いま、上海のテレビ塔の天辺まで吹っ飛びそうになった。

正装の軍服も、いつもの略装もカッコイイんだけど、今日は格別だ。

スラリとした長身。衣装と同じ、見事な黒髪。そして、私を見つめるその漆黒の深い瞳に私はなす術もなく、魅了されてしまう。

闇の帝王か、アンタは。

「沙龍……？」

「あ、いや……。カキ氷が食べたくなっただけ」

「……？」

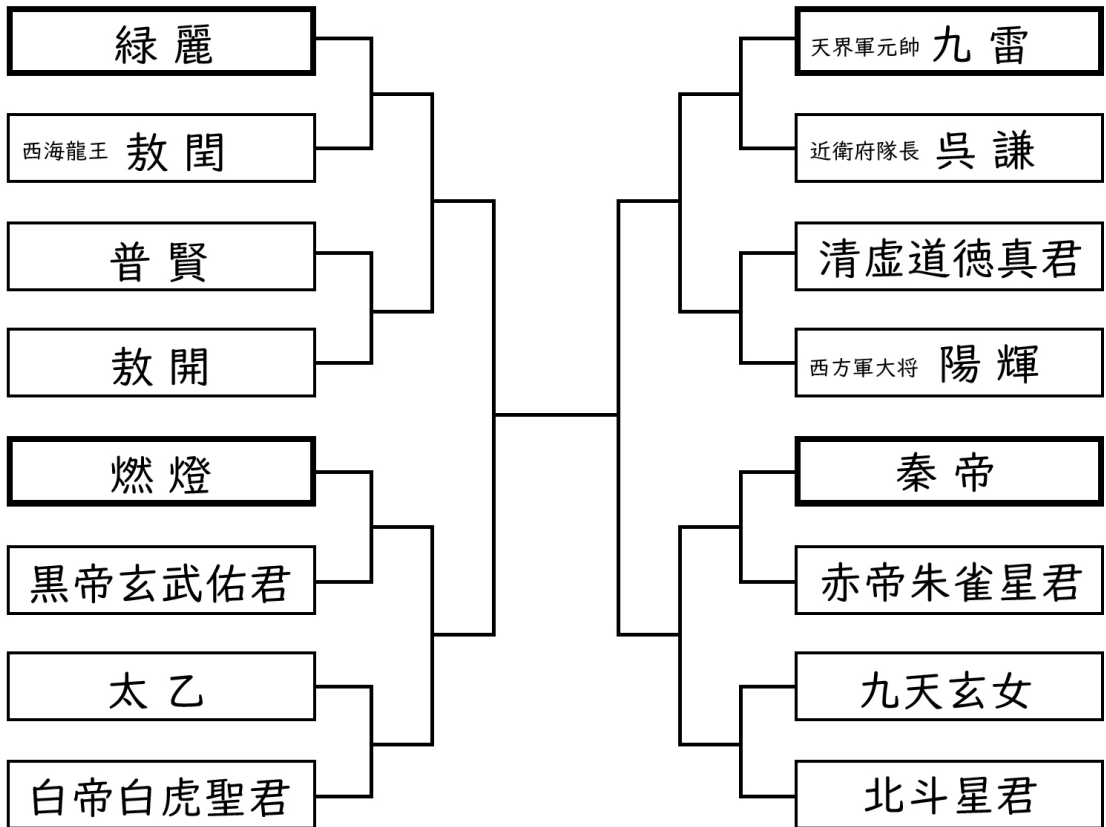
会場に着いてみると、既にお祭り騒ぎだった。出店は並んでいるし、前座らしき歌謡ショーまでやっている。

出場者の控え室に行くと、どうやら私達が最後だったらしい。

「……揃ったようじゃな。では、儂から簡単に今日の大会について説明をしよう」

太上老君が、壇上に上がった。

「ルールは『不殺』のみ、戦闘方法及び勝敗の判定方法、制限時間の有無などは両者の協議により決定となる。協議に決着が付かなかった場合や、特に両者からの希望や提案がなければ、大会本部長たる儂が決めるということにする」





そのいい加減な発言に、誰も意見することなく、トーナメント表が貼り出された。

よく見れば、私がシード選手になっている。

なんで？　と思ひ、壇上の太上老君を見ると、それを察してくれたのか、

「玉帝とお主が命を賭して護った世界じゃ。それくらいの特権を与えても良いと思うてな」

そう仰るので、お言葉に甘えることにした。

とはいっても、シードがあつてもなくても変わらないんじゃないか、これ。

順当に勝ち抜いたとしたって、凄い面々と闘わなくちゃいけない。

「一回戦は、飛龍のパパかあ……」

あのダンディなオジサマは『面白そうだから参加した』系だな。

しかし、冗談で参加した挙句、手を抜きそうな人に負けるわけにはいかないじゃないか。

「俺は清虚の兄ちゃんか……」

横で渋い顔の陽輝大将が呟いている。

「沙龍」

と、元帥が差し出したのは、（出店で買ってきたであろう）カキ氷である。

「……。謝謝」

ここらへんは絶対天然だろうな。

「どうやら、久しぶりにお前とやり合うことになりそうだな？」

トーナメント表を確認した元帥が、陽輝大将に言った。

「庚にやられんなよ？」

「誰に言っている」

「ああ？ そりゃー、まー、誰かさんが来てから、毎晩体力使い果たして、まともにも闘えそうにない元帥閣下に」

「そう言うお前こそ、アルコール漬けで足元が怪しいぞ。道德真人の仙術に耐えられるのか？」

「あんな若造、俺の敵じゃねえよ」

「無理をするなよ。もう若くないんだからな。素直に世代交代するのも手だ」

「言ってる、青二才」

「……」

メロン味のカキ氷をシャクシャク食べながら、頭上で交わされる二人の毒舌合戦に思わず笑ってしまった。

『庚』って、呉謙隊長のことだよな。

フーン……。やっぱりギリギリになってエントリーしたのか。あ、そう。フーン……。

「沙龍、西海龍王は『金行』と『水行』の二行のマイスター（注1）だ。五行術中心の戦闘をする気なら、気を付けろよ」

と、元帥が忠告してくれた。

「二行って……。しかもマイスターって……。つ、つまり、白帝君とキサさんの二人を相手にしなきゃいけないようなもん？」

「五行に限ってはそういうことになるが、実際はお前の闘い方次第だろう」

「うーん……」

「あの冗談で生きてるようなオッサンが、本気で闘うとは思えねえが……」  
陽輝大将がそう言うが、私から見れば、貴方も変わりありません。

「前途多難だな。……まあ、でもなんとかなるでしょ」  
勝てるでしょ、という意味ではなく。  
勝つ気だから、という意味だ。

(注1) 二行マイスター……通常、一人の属性行は一つだが、達人になるともう一行追加できる。さらに、その使える行をそれぞれ極めた者が『二行(人)によってはそれ以上)マイスター』となる。

『願いつてのは、自分で叶えることに意味があるんだ。カミサマにやってもらっちゃ、誰の人生か分からん』

まだ、彼が敵か味方か分からなかった頃、そう言った覚えがある。  
今や、最愛の恋人となった、この人に。

場面は少し遡って、数時間前の話。

「大事なのは、お前の願いを叶えることだ」

「私の……願い？」

それがなんなのか、この人は分っているとしても言うんだろうか。

確かに、官位も役職も要らないというのは、私の望みではあるけど、それはお願いして叶えてもらうようなものじゃない。

「俺が叶えるわけじゃない。ハンデを多少軽くしてやるだけだ」

「ハンデは、確かにあるけど……」

人間の身体というハンデ。生きてきた時間の圧倒的短さというハンデ、だ。

「でも、一体、どうやって？」

「西華は元々四神相応の地。お前にはそれだけで有利な場となる。まして、四神が揃えば言うまでもない」

具体的になにをしたのか、ということは後で白帝君あたりに聞いておこう。この前、チラッとそんなこと言ってたし。

「つまり、私が武闘大会で楽に勝ち進めるようなシチュエーションを作ってくれた……ってこと？」

同じじゃないか、と思った。最後のローソクを立てる部分だけを残して、ケーキを下地から全部作ってくれたようなもんだ。ローソクを立てるくらいなら幼児にだってできる。

終始眉間にしわを寄せていた私に、元帥は最後には溜息ついた。

「それですら不満か」

「そうじゃない。慣れてないんだ、こういうの」

「俺はお前を護ってやると言った。望む物全てを与えてやる、と」  
そうだったね。

「だが、お前ほど欲のない人間もそういない」

そうでもない。こんな強欲な奴は居ないと思うときもあるよ。

「だから、せめてお前が望む自由を、お前が勝ち取るために、他の懸念事項を一切排除するのが俺の仕事だと、最近気付いた」

以上、今朝のピロー・トーク全容。

恋人に感謝すべきか、余計なことをと非難すべきか。以前の私なら、おそらく後者だろう。

だけど、ここに来て、私は感謝している。あの人が居なければ、私はこの闘技場に立っていることもできなかつただろう。

「さてと、緑麗チャン。提案があるんだけど、いいかな？」

目の前に立つ西海龍王は、三つ揃いの上着こそ脱いでいるが、ネクタイ姿のダ  
ンデイ・モードだ。とても、戦闘モードには見えない。

だけど、その潜在的な力の奔流が、私を圧倒する。これが、龍王と呼ばれる所  
以。

「……なんでしよう」

「僕としては、美しき桃花の精霊と無骨な殴り合いなんてしたくないし、痛そう  
な効果音付きの刃傷沙汰も御免なのでね。ここはスマートかつエレガントな  
『ゲーム』にしよう」

「概ね同意したいものですが……。それで？」

「どうぞ——」

と、オジサマが差し出したのは、なぜか真紅の薔薇一輪。  
なにも考えずに受け取った。

彼の胸ポケットには、既に同じ薔薇が飾られている。

「この薔薇を散らされた方が負け——ってのは、どうかな？」

「なるほど。優雅な決闘方法だ……」



承諾の意味で、もらった薔薇を胴着につけた。ご丁寧に、安全ピン付きなのね……。

隣の闘技場では既に戦闘が開始され、派手な爆音が轟いている。飛龍の金磚が炸裂したようだ。その爆風の余波が、こちらの第一会場まで届いてくる。

「僕ちゃんも相変わらずだなあ……」

西海龍王は苦笑した。

「この薔薇は特殊コーティングしてあってね、こんなヘツポコ微風くらいじゃビクともしないから——」

とオジサマがニツコリ微笑んだとき、飛龍の怒声が。

「なんだとうツ!？」

どうして聞こえたのか。いや、その前に、それぞれの対戦相手無視して親子喧嘩始めるなよって、どうして誰も突っ込まないのか。

『しばらくお待ち下さい』

そんなプラカードを抱えたバニーちゃんが現れ、数名の大会実行委員らしき方々が、親子喧嘩の仲裁に入る。

そして、何事もなかったかのように、飛龍が九玄娘々に引きずられていくのを見送った。

「……とんだ失礼を。では我々もそろそろ始めましょうか。あ、道具はなにを使ってもいいよ」

武器——と言わないところが、またエレガントだ。

「一つ確認が。西海龍王殿」

「なにかな？」

「敗北は、『花びらを散らされること』——でいいんですか？」

「うん、そうだね」

「……了解した」

そして、審判の太上老君に頷いてみせた。

「緑麗様には不利だな、あの戦闘方法は」

選手席で観戦している赤帝君が木佐の隣で呟いた。

「西海龍王は、どういふつもりであんな方法を提示したんだ？」

「それはやはり、緑麗様を慮ってというのを装って、その実、黄龍を使わせないためだろう」

「……だとしても、それを見抜けない馨じゃないんだが」

木佐は腕組みをしたまま、西海龍王の華麗な攻撃をかわす沙龍を見つめた。

糸かワイヤーなのか、と最初は思った。

(なに……ッ?)

飛び道具であることは確かだった。

無数に飛んでくる、はつきりとは見えない『それ』を避けつつ、間合いを詰めようとするが、逆に遠ざかってしまった。

「……ッ？」

頬に風圧を感じたとき、その構成物資がなんであるのか、やっと分かった。

(水か……！)

考えてみれば、当然だ。敵は『水行』のマイスターでもある。水を自在に操ることなど朝飯前なのだ。

しかし、これは仮に当たったとしても人畜無害な速度と大きさだ。決して流血沙汰にはならないだろう。

つまり、西海龍王は水鉄砲で遊んでいるだけなのだ。どこまでもエレガントに『ゲーム』をしたいらしい。

とはいえ、命の危険がないからといって、悠長に構えているわけにもいかない。まともにヒットすれば、薔薇の花は確実に散る。

「うーん、さすがに早いね。しかも的が小さくて当たらない——。数打ちや戦法で行くか」

と、西海龍王は両手を胸の前で軽く合わせてから、芝居がかったアクションでその両腕を広げた。

「ゲ——」

今度は、四方八方から、かなり勢いのよいスコールが降りかかった。

目を開けていられないような強さだが、顔を庇っている場合ではない。右手で薔薇を覆いながら、左で背中の聖魔剣を鞘ごと外した。

そして、そのまま鞘留めを外した状態で、聖魔剣を思い切り振る。

「……!？」

振った反動で聖魔剣の鞘を、西海龍王目掛けて飛ばしたのだ。

が、それは目くらましだ。

西海龍王は冷静に鞘をかわすが、その一瞬、私の読み通り、スコールは止んだ。

集中力を切られた間だけは、水を操る力も弱まる。それを理解した上で、距離を一気に詰め、接近戦に持ち込んだ。

しかし、

「おっと……」

私の聖魔剣の一撃を、西海龍王は、小さなオモチヤのようなもので受け止めたのだ。

「花を散らすには、これで充分——」

その手には、洒落たペーパーナイフがある。

「……ッ？」

仮にも『聖魔剣』である。

いくら私の物理力が生身の人間の限界値に近かろうが、この斬撃の質量はかなりのものなのに。

(さすが、飛龍のパパ——)

そう思わずにはいられない。

「いや、だから、緑麗チャン、チャンバラはやめようよ——」

私の視線と攻撃は、彼の薔薇の花一点のみに集中させている。

西海龍王もそれを注意しながら、この猛攻をペーパーナイフでしのいでいる。

私は左利きなので、大抵、武器を持つ時は左手しか使わない。両手持ちでは危険が増えるだけ、という董天のモットーによる。一般的には邪道だが、そもそも、殺人技に『正道』も『邪道』もない。

聖魔剣は重い剣だが、これも片手で扱えるようにある程度は訓練した。

いまでも、私は左手だけで斬りかかっている。

そして、意図的に右半身は、西海龍王からなるべく見えない位置に置いている。

やっと、西海龍王がそれに気付いた。が、もう遅い。

「え——？」

目を見開いた彼が、私の薔薇が右の胸の上に無いと気付いたときには、その一瞬の隙について、西海龍王の一点ものの三つ揃えのベストに飾られた薔薇を聖魔劍の一撃とその剣圧で散らした。

「……ッ!？」

半ば、呆然とする西海龍王。

「身体から離れたら駄目なんて言っていない——」

丁度、頭上に落ちてきた薔薇をキャッチしながら、彼が知りたいであろう疑問には、ちゃんと答えた。

薔薇は聖魔劍の鞘を投げ飛ばしたときに、同時に上空に放り投げておいたのだ。

「勝負あり！ 勝者、緑麗——」

太上老君の判定を合図に、それまでシーンと波打っていた観客席が沸いた。

「りよくえいさばあああああ！」

「さッ、さすがですうッ！ んもー、素敵——ッ！」

「おっしやあああ！ 俺は、この一点買いに賭ける！」

緑麗の舎弟三人組達は、いまの上司の敗北を余所に、感涙と鼻血状態である。

「あの詐欺師が……。試合内容はかなりセコイということに、どうして誰も気付かないんだ」

木佐はそう言いながらも、座布団の舞う大歓声の中、微笑んでいた。



闘技場から引き揚げる途中、電光掲示板で、第二会場の飛龍が勝ったのを確認した。つまり、私の次の対戦者である。

(飛龍も力押しだから、頭脳戦でいくしかないな……)

既に、第一会場、第二会場ともに、次の試合が始まっている。

第一会場では、その美貌に歓声を受けているキサさんと、見慣れぬ男前が、お互い距離を取って睨みあっていた。

この人が崑崙でも実力はピカーといわれている燃燈道人か。

隣の第二会場でも、既に歓声があがっていた。というより、どよめいた、と言う方が正しい。

第一会場から僅か数メートル離れた所に併設されている第二会場。

そこには、ものの数秒でダウンした太乙真人が、降参宣言をしている。

白帝君は、両手をポケットに突っ込んだまま、それを見下ろしていた。

「ヨ、お疲れ」

バニーちゃんからドリンクを貰って選手用の観戦席に戻ると、陽輝大将が椅子にふんぞり返って観戦していた。

「真武君、強いな」

いま終わった『黒帝玄武佑君 VS 燃燈道人』の試合結果に感心しているようだ。キサさんと燃燈道人の対戦は、一瞬で勝負がついてしまったらしく、私はその様子を見ていない。

「勝ったのか……、三番人気の仙人様相手に……」

キサさんは、私のようにどこぞの組織で特殊な訓練をした経験もないし、山に籠って厳しい修業をしたことがあるわけでもない。

ただ、小さい頃から、古式柔術と居合道を習っていて、それぞれの師匠に天才と言われたほどの腕前だ。

日本に居た時も、その技を拝む機会はそれほどなかったが、一度私の祖父の実

家に連れていった時に、仕合ったことがある。

結果は、祖父ちゃんに言わせれば『私の反則勝ち』だったが、武術としてはキサさんの洗練された技の方が遥かに上だ。

だけど、実戦において、それがあまり意味のないことは私もキサさんも充分に知っている。

「向こうさんが手を抜いてるなんてことはないよね……、ん？」

そのとき、観客が一斉に沸いて、何事かと思ったら、なんてことはない。元帥が第一会場に現れたただけだ。

「なに、この異常人気。元帥ってこんな人気者だったの？」

「そりゃ、配当からして一番人気だろ」

「いや、トトカルチョの話じゃなくて……」

「順調にいけば、二回戦は俺と九雷になる。お前、どっちを応援するよ？」

陽気大将が言うので、正直に悩んだ。

「うーん……、難しいな……」

「お前なあ、嘘でも俺って言えよ」

「だって、二人とも手を抜きそうだし」

「九雷は手抜かないだろ。なにせ『結婚』が掛かってんだからな」

「あれは、太上老君のおふざけでしょ。いくら相手に不満はないとはいえ、冗談で成り行きのまま結婚させられてたまるか」

「とはいえ、あいつは——」

と、陽輝大将が、黒装束の元帥の前に立っている対戦相手を見て言った。

「その『結婚』を阻止したくて参加したクチだな」

「……マテ」

私も、その対戦相手——呉謙隊長——に改めて視線を移した。

闘技場上がった二人はなにやら話をしている。その内容までは聞こえないが、あれは試合方法の協議をしているような雰囲気じゃないな。

「つまり、なにか？ あの近衛隊長がやけに元帥に突っかかり、私を敵視するのは、〃そういうこと〃か!？」

「なんだ、気付いてたんじゃねえのか」

「んぐぐ……」

気付かないふりをしていただけというか、気付きたくなかったというか。

「ったくもー。なんである人は、鬱陶しいくらい男にモテるんだ。ライバルが男って、どーよ？ つーか、私の立場は？ ねえ、立ち場ナシ？ もナンですから、中でお茶でも？」

「昔の話だろ。まあ、呉謙にとってはそうじゃないから、突っかかるんだろうが」

「元帥も元帥だ。粘着ストーカー野郎になりそうな奴には手を出さなつての。それが遺恨になつて、挙句、あの隊長は『緑麗様に地上にお帰り頂く会』の実行係になつちやつたんじゃないか」

「フフン、そこには気付いてたわけか」

「試合はすぐに始まつた。」

「観客の一層のどよめき。」

「しかし、一番どよめいたのは実は私だった。」

「カ……ッ」

叫びそうになつて、ハツと口を押さえた。本日、二度目のような気がしないで

もない。

「カ……？」

陽輝大将が聞き返すも無視した。

そういえば、私、あの人がまともに剣を振るう姿、初めて見るんだ。

なにこれ、なにこれ、どうしてくれよう。あんな見事な剣さばきは、見たことがない。

どう言ったらいいんだ、これは。ああッ、つくづく自分のボキヤ貧が恨めしい。

いや、最初に思いついたこの一言でいい。だって、他に言葉が見つからない。

「カツコイイ！」

「……なんだって？」

聞こえなかったわけでもなかるうに、なんでそんな変な顔で聞き返すんだ。

いや、陽輝大将は無視だ、無視。

私は、元帥の神速剣技に魅了されて、大興奮してしまったのである。

「無茶苦茶カツコイイ！ 死ぬほどカツコイイ！ 文句なくカツコイイ！」

「あー、そーですか、ハイハイ……。いつぞやも全く同じこと言って騒いでましたね、アナタ」

「うるさいぞ、陽輝！ アアツ、あんな反則的に強くていいのか!? こんなことが許されるのか!？」

「まあ、気付いてないんだらうけどな……」

興奮し過ぎて倒れそうになったのは、かろうじて三倍の酵素パワーで保たせた。

試合結果は当然、元帥の楽々一回戦突破である。

呉謙には『ザマーミロ、一昨日来い』と腹の中で叫んでおいた。

そして、いつの間にか闘技場へ向かったらしい陽輝大将の試合を観戦しようとしたら、既に次の試合が始まっている隣の会場で、またしても大きなどよめき声が上がった。

この試合も、数秒で終わってしまったらしい。膝をついているのは赤帝君だ。

(やっぱり——)

秦ちゃん陛下、強し。

赤帝君はあの性格だから、陛下相手には全力で戦えないという弱みもあつたんだろう。

それにしても、神仙の闘いは、格が違い過ぎる。ほんの瞬きする間に終わってしまう。本気で闘っている人は少ないというのに、この短時間決戦だ。

当初、武闘大会は半日だけの予定と聞いて、それじゃ時間的に厳しいと思つたのに、妙に納得してしまふではないか。

「沙龍、あまり近くで見ていると、巻き添え食らうぞ」

『陽輝大将VS清虚道德真君』の試合をアリーナで見ようとしたら、戻ってきた元帥がそう声を掛けてきた。

「うん? ……そんな派手な試合になるの?」

「多分な」

と言って笑う元帥閣下は息一つ上がっていない。さっきの華麗な試合のシーンがフラッシュバックして、私の方が鼓動バクバクになってしまった。



「えつと……、か、かつこよかった……ですよ。さっきの試合——」

「そうか。お前がそう言うのなら、渋々でも出た甲斐があつたな」

「„渋々“……？」

太上老君の代理出場が „渋々“ ？

あれれ？

元帥が太上老君を言い包めて、この大会を画策したわけじゃなかったのか？

「忘れたのか？ 俺が優勝すればどうなる？」

「ああ……、なるほど……」

と、彼の心情は分かったけど、冗談で言ってみた。

「私と結婚したくないわけね」

「お前がすると言うなら、いまからでもいい」

なんて、冗談が返せるようになったのだから、結構進歩かも。

つまり、私と一緒に、こんな冗談企画で結婚させられちゃたまらない、ってことか。

「俺は最初から出るつもりはなかったんだが、太上老君のささやかな嫌がらせで

な」

「色々しがらみがあるのね」

「太上老君は、本当は、天仙界のいまの状態を苦々しく思ってるんだ。しかし、自分は意見を求められれば答えるが、政治には直接関わらないようにしている。だから、この前、八景宮で陛下が火雲宮の現状について相談し、解決策を求めたときも、『政治』にはしたくなかったようだな」

「だからこそ、このお祭り騒ぎ、か」

よかった。このお馬鹿企画が元帥の案じゃないと分かって。

そうこうしているうちに、陽輝大将の試合が始まって、対戦相手の清虚道德真君が放った仙術で、霧雨のようなものが闘技場を包んだ。

あれ？

「なんか、似たようなものを見た記憶が……？」

しかし、それを思い出す暇もなく、陽輝大将の乱射したライト・マシンガンが、闘技場を無茶苦茶にした。

あの人も、力技専門だったのか――。

私は過保護な恋人が作った防御壁のおかげで、その派手な攻撃の影響を受けずに済んだが、観客の中には霧雨をかぶって、唸っている人達も居る。当人達は真剣に苦しんでるのかもしれないが、傍から見てる分には可愛いもんで、「それだけはやめてえ！」とか「オカーチャーン！」などと叫んでいる。

(あ、あの霧雨は精神攻撃か)

崑崙の山中で、私も同じような術中にはまった記憶がある。あのときの犯人の道士はまだ若い子だったけど、こういう術は崑崙ではポピュラーなのかもしれない。

「ん？ 待てよ……」

試合を他所に、ちよつと気になったので、手元のトーナメント表を広げて、再確認してみた。

私の第一目標は、あくまでも秦ちゃん陛下の優勝阻止だ。決勝までに自滅してくればそれでOK。だから、もし元帥が秦ちゃん陛下を負かしてくれるなら万々歳で、実はその可能性はかなり高いはずだ。ちよつと他力本願ではあるけど、このトーナメント進行だとそうなる。

でも、そうすると、最終目標でもある、私の優勝賞品『自由なプー太郎』を勝ち取るためには……、

「決勝で、元帥に勝たなきゃいけないってこと……ジャン……」

ムリ！ それに、そんなのヤダ！

すると、元帥がことも無げに言った。

「心配するな。決勝でお前と当たれば、俺は棄権する」

「そ、そんなの、許されるの？ 太上老君や陛下は納得しないんじゃないか……？」

いや、愚問だったか？ この人は平気で職権濫用する人だ。

「だが、そもそも無理だ」

「なにが？」

「お前に武器を向けること自体が、俺には無理だ」

当然のことのように、真顔で言う。

「……」

私は、絶句したまま、幾つかのシーンを思い出していた。

まだ、ほんの数ヶ月前のことなのに、随分昔のことみたいだ。

最初に杏源郷で逢ったときも、九玄娘々の屋敷で私が斬りかかったときでさえ、この人は丸腰だった。あれを、神の驕りであり余裕なのだと思っていた私は、とんだおバカさんじゃないか。

うわ、なんか、涙出そう……。

一回戦の八試合が全て終わって、インターバルとなった。

とりあえず、参加者達は控え室に集合している。

オヤジの意地で勝利をもぎ取ってきたらしい陽輝大将は、どうだと言わんばかりに、私達を前にしてふんぞり返った。

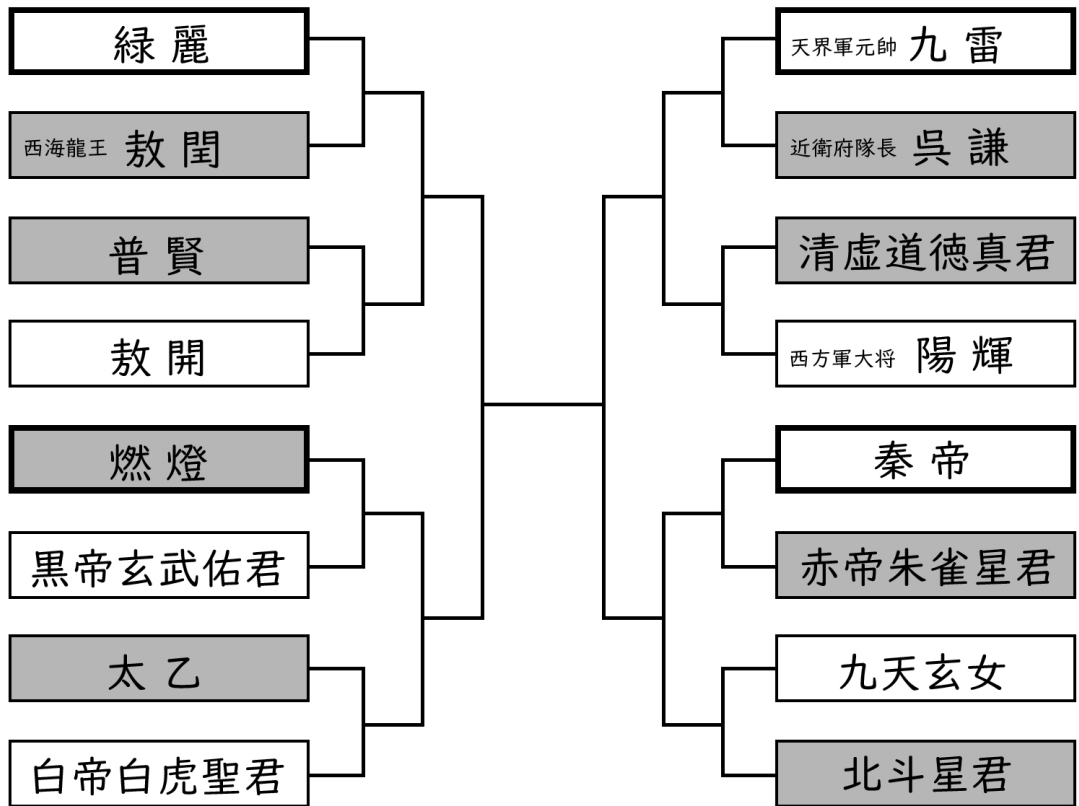
「まー、俺にかかりや、あんな感じ？」

「あ、陽輝、勝ったの？」

と言ったら、ブツブツ怒っていたが。すみません、あまり見てなかったんです。

二回戦には色々厄介な試合がある。キサさんVS白帝君とか、元帥VS陽輝大将とか、私には結果が読めなさ過ぎる。

トーナメント表と睨めっこしていると、さつき自分の二倍近くある大男をKOして、拍手喝采を浴びていた絶世の美女——九玄娘々——に声をかけられた。



そうか、九玄娘々が天ちゃんを倒してくれてもいいわけだ、と思ったのに、娘々は現実的だった。

「無理だろうな。準決勝で当たるのは九雷元帥と天帝陛下だ。さらに言うなら、それを制するのは九雷元帥だろう」

と、やけにきっぱり言い切る。

「なにか、根拠でも？」

「普通に考えて、私の能力では天帝にはカスリ傷一つ付けられないということだ。どう足掻いたとしても、あの五行の力を駆使されれば、先の赤帝君のようになる。あれを発動される前に攻撃を仕掛けられるのは、天仙界広しといえど九雷元帥だけだろう。その上で仕合ったとして、天帝は実戦経験が無いのが敗因となる。場数で現役の軍人に敵うはずがない」

「ほ、ほう……。そうですか。じゃあ、陽輝は？ 元帥にサクッとやられちゃうのが娘々の予想？」

「あの二人が本気で闘り合えば決着は来年までつかないだろうが……。優勝賞品を見るに、陽輝大将はそれほど真剣じゃないはずだ」



「確かに。仙酒がどうのって言ってたしな」

「それよりも、沙龍。自分のことはどうなんだ。準決勝にはおそらく真武君が来るぞ」

「え？　つまり、白帝君はキサさんに負けると読むわけ？　その根拠も聞きたい」

「あの二人の性格を考えれば、そうなるんじゃないかと思ったただけだ。別に分析して言ってるわけじゃない」

「ほー……」

白帝君は、実は猪突猛進型ではない。（そう見えるけど）  
かなり冷静な観察者だ。

そして、キサさんはあの顔に似合わず、一旦、戦闘になると、実は物凄く好戦的だったりする。

だから、仕掛けるとしたら、百パーセント、キサさんの方から、だろう。

とすれば、キサさんの実力をいまいち掴めていない白帝君にしてみれば、後手に回って、一瞬で終わる可能性もなくてはない。

「んじや、私の飛龍戦は？」

「お前が体力バカの飛龍に負けるはずないだろう。その狡すっからい頭とセコイ戦法で西海龍王殿を欺いたんだからな」

「……見てたんすか。にしても、その言い方、ヒドイわ……」

なんか、私、小心な頭脳派みたいじゃないか。

あ、でも、飛龍には小細工しておかないといけなかったんだった。

とりあえずあの重火器類は使わせないように協議で（挑発して）持っていてだな……、ああして、こうして、最終的には食い物でつっておけば、不戦勝に持ち込めるだろう。

そして二回戦、四試合。

九玄娘々の予想は、全て当たっていた。

準決勝、第一試合。

観客が固唾を飲んで見守る中、その試合は開始された。

### 『九雷元帥 VS 秦帝陛下』

電光掲示板にでかでかと飾られたこの対戦カードは、この天界での事実上のナンバー1決定戦にも思える。

この対戦で、私が九雷元帥を応援するのは正しい。

彼は、天界における私の保護者であり、理解者であり、なにより愛する人だ。

しかし、圧倒的に押されている少年の姿をした秦帝が哀れになったのも事実である。

「臣下なんだから、少しは遠慮とか手加減しなさいってのよ……」

あれじゃあ、明らかに、悪玉は元帥の方だ。

一人でブツブツ言いながら選手席で観戦していたら、全身包帯姿の白帝君が私の隣にやって来た。

「旦那ったら、嫉妬パワー全開？」

「なんだよ、それ……」

出場選手達は、自分が負けた後のことには全く興味がないらしく、敗退組はこの選手用観戦席には誰も居ない。

じゃあ白帝君はなにしに来たんだろう……、と一瞬考えたが、その前に私が色々聞きたいことがあったんだった。

「あのさ、聖霄。元帥やキサさんが私のためにあれこれしてくれるのは分かるんだけど、阿哥や聖霄はなんで色々協力してくれるの？」

「四方結界張ったことか？」

「それだけじゃない。多分、他にも色々」

「んー、まあ、黄龍とは一蓮托生なのが四方将神ってもんだし」

「……じゃあ、黄龍がどこかに行ったら、困る？」

その時、ワアツと大歓声が起きて、私の声は掻き消えてしまった。秦ちゃん陛下が参ったのポーズを取っている。

「あーあ、終わっちゃったよ……」

「それで、次の試合は棄権する気だよ。……ホラ」

元帥は、審判団になにか話しかけている。

「……阿姐」

その白帝君の呼びかけに、いつもの陽気さはなかった。

「なに？」

「頼むから、妙なことを考えてくれるなよな。阿哥と俺は長い間待ってたんだ。あ  
るべきものがあるべき場所にないと、寂しいんだぜ？」

「うん、それは分かってる」

「そか。ならいいんだが。しっかし、玄ちゃんの強いこと。あんな短時間でや  
れるとは思わなかったぜ。阿姐、次なんだろ？　なんか策はあんのか？」

「いや、全くない。キサさん相手だと、もう肉弾戦でいくしかない」

「ふーん……、ま、頑張れよ。俺は玄ちゃんより、阿姐を応援してるからな」

「嘘でも嬉しいよ、ありがとう」

元帥は、準決勝の勝利を放棄したわけではなく、決勝戦の出場だけを棄権した。

その理屈だと、秦帝が決勝進出なんて恐ろしいことにはならず、済むわけで、太上老君や西王母をどうやって言い含めたのかは分からないが、とにもかくにも、この準決勝第二試合が自動的に決勝戦となつて、会場の熱気は最高潮に達した。

『準決勝、第二試合。緑麗VS黒帝玄武佑君』

電光掲示板には、ちよつと前までは、誰のこと？ なんて言つて、素通りしそうな名前が二つある。

私もキサさんも、いまや公の場ではこの名を名乗っている。

こんなことになるなんて、新宿のコーヒーショップでバカ笑いをしていた私達は、思いもしなかったよね。

「さて、試合方法はどうするかね？ お二方」

太上老君が、私達に尋ねた。

「……どーする？ キサさん」

「オーソドックスに、時間無制限。勝敗は、降参、テンカウント、場外のみ。……で、どうだ？」

「いいよ。それでいこう」

「僕はこの『七星剣』を使う。他にも幾つか用意してあるが、それにも必要に応じて使うだろう」

馬鹿正直に、自己申告ですか。

「私はじゃあ、この『聖魔剣』で」

なんか、淡々と会話してるけど、いいんだろうか。

表情は変えてないつもりだけど、この人には無表情を作ったって、私の心情はバレバレだろう。

「馨、手加減はしなくていい。でも、馨のことだから、そう言われてもするだろう。だから、最初に外しておく」

「なにを？」

「リミッターを」

「……」

リミッターってなに？　なんて聞こうもんなら、『電気信号の振幅をある限界内に制限する回路』とかいう答えが返ってくる気がしたので、とりあえず、その恐ろしげな雰囲気に一歩後退する。

急に、ガクンと温度が下がったように感じた。

「な、なに……？」

なにか小さな結晶のようなものが無数に宙を舞って、闘技場を包む空気全体がヒンヤリと、巨大冷凍庫のようになった。

「さ、さむっ……」



この結晶は、おそらく『水行』そのもの。

北方守護者たる玄武のみに許された、最上級のクオリティを誇るもの。

四方将神の操る五行は、普通の『マイスター』とは桁が違うという。

その性質故に、二行以上を操ることはできないが、彼らは文句なく、『超マイスター』なのである。

「やべー……」

キサさん、本気だ！

この人、いつの間にこんな離れ業を——！

こんな『水行』の奔流にあつては、私は満足に動けないし、キサさんは無敵になる。

「木佐小次郎としての僕は、生身の身体だから、『彼ら』のように『本来の力』を行使することはできない。だけど、この身体に設定された上限値を解除することはできると、ある人が教えてくれた」

「あう……?」

「そして、本来の玄武の力とは、執行する力のこと。これが、どういう意味だか

分かるか？」

「あう……？」

ちよつと、マトモな反応ができない。

キサさんが、そんな私に少し苛ついたのが分かった。

「つまり、黄龍を凌ぐ力がなければ、執行できない。そういうことだ。では、行くぞ！」

マジだ……！ キサさん、大マジだ……ッ！

な、なんで？ こんな、おふざけな大会で――。

と、思う間もなく、いきなりの猛攻に、私は聖魔剣を抜く間も与えられず、初太刀と二の太刀を鞘ごと受ける羽目になった。

（う、重い――）

手が痺れた。

この感触は、かなり久し振りだ。

確かに、手加減なんかしてる場合じゃない。

真・玄武モード全開のキサさん相手じゃ、私の方が危ない。

難しい顔のまま、九雷は闘技場を見つめている。

木佐が言っていた『リミッターの外し方』を伝授したのは他ならぬ自分だが、それでもまだ、結果は読めないのだ。

既に、白帝君も赤帝君も、なにが起こってもいいように待機しているはずだし、安全面での不安はないが、このことで沙龍が苦しむのは九雷の本意ではない。

「あーあ、『暗黒大魔王』になっちまったじゃねえか。あれじゃ、沙龍も勝てねえな」

どこからか酒瓶を調達してきた陽輝が、九雷の背後からぼやいた。

「沙龍が本気になれば、真武君は敵じゃない。だが、本気にさせるのが難しいのさ」

「……？ 本気にさせてえのか？」

「……」

九雷は答えない。

それが、陽輝にとってはなによりの答えとなる。

「まさか、真武君に真の力を解放する術を教えたのは、お前か」

「そうだ」

「おいおい、知らねえぞ。どうなつても……」

陽輝は、なんとなく審判席に目をやって、試合も見ずに雑誌を読んでいる泰山府君に、どうやって負けた言い訳をしようか、などと考えていた。

が、そもそも、泰山府君は最初からこの大会で誰が優勝しようが構わない、というスタンスだ。

そのとき、陽輝は気付いた。

（泰山府君！ そうだ、なぜ気付かなかった！ あのジーサンが数千年欠席して『蟠桃会』にわざわざ来たのは、興味のない武闘大会を見るためじゃない！）

この大会の企画・立案は太上老君である。

では、泰山府君の目的はなんだ、といわれれば、一つしかない。

（実験好きのあのジーサンが、いま、一番興味がありそうなものといえ——）

「黄龍……!? 泰山府君の狙いはここで黄龍を喚ぶことか!？」

「……」

九雷は難しい顔のまま、やはり答えなかった。

「くっ……ッ！」

横薙ぎの一刀を、聖魔剣を逆手に持ち替え、受けたつもりだった。

だが、片手では充分に受けきれず、そのまま、吹っ飛ばされた。

かろうじて受け身は取ったが、ノードメージというわけにはいかない。

「イテテ……」

なんだよ、手加減すんなって言うておきながら、自分は手加減してるじゃないか。

「地上じゃ最強の甲斐馨もここじゃ形無しだな」

キサさんの冷ややかな言葉が降った。

「……」

返す言葉はない。その通りだ。

「緑麗様はなぜ反撃しないんだ？ 黄龍を召喚すれば、一撃で片は付くだろうに」

「……闘いたくねえんだろ」

赤帝君の焦れた物言いに、白帝君は頬杖したまま答えた。

二人は、観客席とは反対側の裏門で、この対決の行方を見守っている。

「さて、青龍の旦那はどうするのかねえ……」

「……楽しそうだな？ 聖霄」

「ああ、楽しいねえ。旦那の思い通りにならねえ奴が居るってのは」

「泰山府君の実験にはそれなりに意味がある。おそらく、冥府の周期の問題だろうが、これを逃せば、また新たに機会を作らねばなるまい」

「誰にも文句の出ない形で黄龍を召喚させ、泰山府に恩を売って、なおかつ、愛しのハニーに自由な永住権を””ってか。旦那の考えそうなことだぜ」

もし、トーナメントで沙龍と対戦することになったら、黄龍を召喚させること——。それが、泰山府君からの要請であり、四方将神全員の合意事項である。

白帝君とて、自分が対戦することになれば、それを遂行しただろう。

しかし、木佐に追い詰められている沙龍を見ると、そうまでして実験しなければならぬことなのか、と思ってしまう。

「阿哥……。悪いとは思ったが、俺はさつき阿姐の気分が見えちまった」

「まあ、しょうがないさ、お前の場合は……。それで？」

白帝君の特殊技能の一つである『読心』は、読もうとしなくても、読めてしまうことがある。

「いや、はっきり読めたわけじゃないんだが……。どうも、阿姐は黄龍を自分から切り離す方法を考えているみたいなんだよな……」

目の前に居るのは、確かに以前のキサさんじゃなかった。

これが、かつての真武君の力なのか。『執行者』というのも領ける。

「ゲホっ……」

よろよると立ち上がったはいいけど、いまの激突で内臓がかなりダメージを食らってる。左肩も、なんか痛いな。

「そのまま、いいのか？」

キサさんの無慈悲な言葉がなにを意味するのか、私には分かる。

だけど、いつだったか、私が街中で黄龍召喚しようとしたら慌てて止めた人に、こんなこと言われたくない。

「睨むなよ。別に挑発してるわけじゃない。そのまま僕に勝てるのかって言うてるんだ」

「この衆人環視の中で、黄龍を召喚しろ、と？」

「したところで、馨にもう勝ち目はないけどな」

「なんでよ」

「勝とうとしてないからな」

「……」

そっか。



そうだよね。

なのに、私、なにしてんだ？

私は、いや、私達は、一体、なにをしているんだろう。

こんなに遠くまで来て、大好きな人と闘って。

そのとき、シンと波打った会場に、ガシヤン、と重い金属音がした。

沙龍が聖魔剣を投げ捨てたのだ。

「あ、バカ……」

陽輝は頭を抱えたが、

「沙龍……、それが、お前の答えか……」

九雷は意外にも相好を崩した。

34 私が勝ち取ったもの

「ヤーマタ」

沙龍がぞんざいに投げ捨てたのは、天界でも唯一無二の名刀と言われている劍だ。

さすがにこの展開は予期していなかったのか、木佐は素の顔になった。

「な、なにやって……!? このバカ……!」

「私にはキサさんを傷つけてまで欲しいものなんてない。こんなの、ヤメ」

「……!」

「太上老君、そういうわけだから……」

どよめく観客を余所に、沙龍は審判席を見る。

しかし、我に返った木佐が、太上老君が立ち上がったのを慌てて制止した。

「ま——、待て! 待って下さい!」

「……?」

「馨は、『降参する』とはまだ言っていない。いや、本来、彼女が一番得意とするのは拳法だ。降参すると見せかけて、武器を捨てたここからが真の試合のはず。

この脳天気策士に何度も騙されてきた僕が言うんだから、間違いない」

「なに言ってるの？ キサさ——」

沙龍が口を挟む暇もない。

「だから、この勝負、僕が棄権する」

「は……？」

「よろしい。この試合、真武君の棄権により、緑麗の勝ちとする！」

太上老君が、判定を下してしまった。

「へ……？」

沙龍が啞然とする中、電光掲示板の『黒帝玄武佑君』の名が消える。観客席では、ブーイングと歓声が入り混じった騒ぎになっていたが、闘技場に立ち尽くす二人にその雑音は聞こえていなかった。

「馨……、馬鹿だ馬鹿だとは思ってたが、実はそうでもないと思ってた。周囲を欺くために馬鹿を演じてるんだらうと思ったときもある。だけど、やっぱり、正

真正銘の馬鹿だ。ここまで馬鹿だとは思わなかったよ」

「そ、そんなに馬鹿馬鹿言わなくてもいいじゃないか……」

「まったく……、全てペアだぞ、馨のせいで」

と、木佐は膝をついて、そのまま倒れてしまった。

「キサさんッ!？」

沙龍が思わず駆け寄った。

「なんで!? 怪我なんかしてないでしょ——!？」

揺り起こして見れば、木佐は朝礼でぶっ倒れた女子高生のような青い顔になっている。

目の下に隈まで出来てるし、明らかに、疲弊し切ったという感じだ。

だが、意識はちゃんとあるようだ。

「騒ぐなよ。大丈夫だって……」

「で、でも！」

狼狽した沙龍の肩に手を置いたのは九雷だったが、沙龍はそれすら気付かなかった。

「心配するな、沙龍。すぐに回復する。まだ慣れていないのに、急に力を使った  
せいだ」

優勝カップ授与式の準備が進められている中、私は、キサさんに貼り付いてい  
た。

騒ぎを聞きつけて来てくれたドクターは、

「あー、寝かせておけば大丈夫ですよ」

それだけ言って、去って行った。

「あんなえー加減なこと言って、ホントに天界一の名医なのか？」

「そんな顔するなって。九雷元帥も言ってただろ。すぐに起きれるから……」

「うん……」

静かだった。控え室には私達だけしかいなくて、開け放たれた窓からは、桃の  
香りとお日様の匂いだけがしている。

横たわるキサさんが、その静寂の中で言った。

「馨、ゴメン——」

「なんで謝るの？」

そういえば、この人に謝られたのって初めてだ。いままで、数え切れないほど謝ってきたのに、謝られたことはなかった。それは、考えなしに行動する私と、考え抜いて行動するキサさんの違いだ。

「今回は、馨の行動を読み切れなかった僕が悪い。結果、馨は振り回されただけだ。心配もかけたし」

「……私、キサさんがなにを言ってるのか分からないんだけど」

「いいんだ、いまは……」

キサさんが身体を起こして、私の挙動を制しながら自分で水を取りに行った。そして、背中を向けたまま、会話を続ける。

「僕は前世の義理でもって四神府で働いてるわけじゃないし、誰かに言われたからここに居るわけじゃないんだ」

「……」

「僕が僕のしたいようにしているだけなんだよ」

「……」

「僕は多分、ここでなきや、いや……、馨のそばじゃないと生きられないんだよ。四方将神だから、じゃなくて——」

「……」

「だから……。追いついてくれるなよ」

キサさんはそれを言うのに十年分くらいの勇気を使ったんだろうと思う。

「うん……。今後ともよろしくお願いします」

だから、私はそのまま控え室を出て行った。

かくして蟠桃会メイン・イベントの武闘大会は無事終わった。

結局、私が自力独力で勝ったのは二試合だけ（飛龍戦なんて試合すらしてない）。しかも、それだって、本当は四方将神の皆様のおかげだ。なのに、気付けば優勝していて、大会本部は、私の辞令拒否権と、天界での自由永住権を保証してくれた。いつでも里帰りしていいし、いつまでも天界に居ていい、ということ

だ。

だけど、正直言って、そんなのはどうでもいいのだ。私が勝ち取ったものがあるとしたら、それは宮仕えの免除でも、滞在許可でもない。



四神府――。

火雲宮の敷地内にあるこの役所の立派な門は、朱塗りの柱に総平屋造りといった、この大陸王道の建築物だ。

これを見る度、京都育ちの木佐は、どうしてもある場所を思い出してしまう。そういえば、沙龍に京都の名所を案内したとき、平安神宮にだけ反応したのを木佐は思い出した。

（まさか、前世で見た四神府の建物を覚えてたってことじゃないよな……？）  
いくらなんでもそれはご都合主義だろう、と思った。

そもそも、沙龍は前世の記憶は全て消されているという話だ。

しかし、木佐には、最近不思議なことがあった。

『既視感』というほどはつきりしたものではないが、知らないはずの書庫室の場所を知っていたのだ。

ただ、それは建築様式さえ分かっていたら、なんとなくあたりはつけられるわけ、単なる偶然だったかもしれないとも思っている。

「キササーン」

木佐のオフィスの窓から顔を出したのは、沙龍だった。

「出たな、この無職遊び人」

「無職って言うな。せめて、流離いの雀士とでも呼んでくれ」

「流離ってないだろ……」

木佐が言う間にも、沙龍は片足を窓にかけていた。

「よいしょっと。お邪魔しまーす」

「で、どうして、窓から入ってくるんだ。せつかく、そんなお姫様な格好してるんだから、せめてドアに回ってくれ」

「だって、入り口に回るの面倒臭いんだもん。ここの設計、オカシイよ。合理性を完璧に無視してる」

「合理性は最初から追求してねえのよ。要は様式美ってやつだ」  
次に窓から顔を覗かせたのは陽輝だった。

しかし、陽輝はさすがに沙龍と違って、そこから進入してくる気はないらしい。

「ヤンパパとその娘がなんの用です？ 大体、無職の馨はいいとして、陽輝大将、いつもいつも不思議に思ってるんですがね」

「あん？」

「一体、貴方はいつ仕事してるんですか。僕は遊んでいるところしか見たことありませんが」

「俺、有事専門だから。平時は待機身分ってことで」

「それで許されるんだから、大した人望ですね」

冷めた口調で言われて、陽輝は苦笑した。

「相変わらずだな、真武君……」

そして、物珍しそうに木佐のオフィスを物色していた沙龍が、一通りの物色を終えて振り向いた。

「キサさん、仕事終わった？ いや、終わってなくてもいいや。呑みに行こうよ。陽輝が行き着けの店に連れてってってくれるってー」

「お前らも気に入るはずだぜ。無国籍居酒屋なんだが、日本酒も置いてある」  
陽輝はしよっちゅう飲み歩いているので、繁華街にはいくつか行き着けの店があるようだ。

「日本酒か……。そういえば、しばらく飲んでないな」  
木佐にしてはわりと簡単に心を動かされた。

「でしょでしょ？ 西華の仙酒も美味しかったけど、やっぱ我々は故郷の味を忘れたらいかんと思うのよ」

「馨の故郷は日本じゃないだろ。数年しか居なかったくせに」

「んじや、行こうぜ、沙龍、真武君」

陽輝はもう歩き出していた。

「三人でか？ 馨、愛しの元帥はどうした？」

「いーのいーの、あの人は、ワイワイ呑むタイプじゃないのよ」

そうして、また多少の苦勞と共に窓から出て行こうとする沙龍の身体を引き上げて、木佐もまた、そこから出て行こうとする。

「いいの？ ドアから出て行かなくて」

「面倒だからな」

木佐が苦笑するので、沙龍もつられた。

とりあえず、陽輝と沙龍がなにか企んでいるらしいが、それに乗ってやろう、と木佐は思った。

仕事のことや、今後あるかもしれない面倒なことについては追々考えればい  
だろう。

END

